

なれず

て、おのが妻衣(せ)を、それならて、又は誰に
 かなれ(ころ)も
なれずがた 馴姿・襲姿【名】常に家に居る
 時の姿。「古語」襲姿今日よりは、おはし
 ましどころを、御念佛の所にしつらひて、
 佛おはしませ、僧などのなれ姿も、いみ
 じくかたじけなう、よろづに悲し
なれずがほ 不馴顔【名】未だ馴れぬらし
 きやうす。夫々、秋はさぞ吹くないぶきの
 山風になれずがほに鹿のあぶらん
なれずぐ 馴過ぐ・慣過ぐ【動上三目】ほ
 どを越すばかりになる。餘りになる。
なれずく 熟過ぐ【動上三目】ほかに過ぎ
 て熟す。餘りに熟す。熟すなれずきたず
 をあるじの遺恨かな
なれずし 熱鮎・馴鮎【名】魚を鹽にまぶし
 て壓したる後、冷飯に合はせて桶に入れ、
 重き石にて壓して、数日の間、熟らして造
 りたる鮎
なれそむ 馴染む【動下二目】馴れること
 をはじむ。初めて膝ふ。初めて馴染になる。
 天神時平の大臣の御内奏の兼竹と申す
 御隨身の侍と、入知れずなれそめ、忍び違
 ふ夜の敷數なり
なれそめ 馴初【名】馴染めたること。親し
 くなりたる最初
なれつく 馴附く【動四目】なれ親しむ。な
 つく。なじむ
なれつ 馴事【名】なれと(馴事)の音便。
 浮世風呂「江戸で傳法、上方で著録などとい
 ふあばずなれつ、夫れさへも馴事(つ)
 になつてゐる所爲か、更にかまはぬ」
なれど 接 次條の略
なれども 然ども【接】さにはあれども。然
 れども。けれども
なれなじみ 馴馴染【名】なじみ(馴染)に同
 じ。きふはりの物類なれなじみの中は
 となる事ははざるまい
なれなれし 馴馴し【形二】甚だ馴れた
 るさまなり。したしさうなり。露氏なれ
 なれし・振舞ひたり「露・面なきさま
 なり。ぶしつけなり。相成道(き)一見と
 申し武骨者、なれなれしき事ながら、盲蛇

なれの

に怖ぢずとやら、身に迫つての物語」
 甚だなれ古びたり。「襲義し」「古語」新
 古いつか我れしほ焼くあまのふぢころも
 なれなれしくも妹にあひ見ん」夫々な
 れなれし床はふるきの皮衣君きまされば
 あたらさむし
なれの はて爲の果【句】爲(な)れる果
 の詠。「成の果」用明天皇職人鳥この鳥へ
 流されし。五位介諸岩がなれの果にて御
 座候
なればむ 襲ばむ【動四目】襲ふたれる様
 あらはる。襲れて見ゆ。ふるぶ。「古語」秋
 「狩衣は、何も打ちなればみたる」
なれもの 馴者【名】世馴れたる人。物事に
 よく通じたる人。今も人笑ひはする馴
 者なる翁にてぞありければ
なれよる 馴寄る【動四目】馴れて近寄る。
 露氏「女房にもけちかうなれよつ」
なわ名和【名】「地」伯耆國西伯(が)郡
 に在る村。御來屋(が)町の南に接す。名和
 長年の故邑にして、元弘三年後醍醐天皇、
 隱岐國よりこの地に著御あらせられき。
 と奈和とも書きたり。「姓氏」の一。本姓
 は村上源氏。右大臣顯房の第八子雅兼より
 出づ。その第十一世の孫行高伯耆守長年
 を生む。長年、本國名和の地頭となり、因
 りて氏とし、其の孫顯興、懷良(が)親王に
 西海に隨ひしが、その後裔伯耆に歸りて、
 世世、名和神社の祠官たり。明治維新後、男
 爵を授けらる。
なわこんち ゆうけんきうしよ 名和 昆蟲
 研究所【名】昆蟲學者名和靖(が)の昆蟲
 に関する研究を成すために設けたる研究
 所。岐阜市の公園内にあり。
なわじんじや 名和神社【名】伯耆國西伯
 (が)郡名和村に鎮坐せる別格官幣社。祭神
 は名和長年。「つらに同じ」
なわすれぐさ 勿忘草【名】「植」ほなるか
なわながしげ 名和長重【名】「人」勤王
 家。長年の從子。太郎左衛門と稱す。長年に
 隨ひて義兵を擧げ、京師に戰ふ。正平七年
 足利義詮(が)の男山の行宮を侵しし時、
 神鏡の櫃を奉じて走る。その終るところを

なわな

知らず。
なわながとし 名和長年【名】「人」勤王家。
 初名は長高、通稱は又太郎。伯耆國名和の
 人。元弘三年後醍醐天皇の隱岐國におは
 するや、詔を奉じて義兵を擧げ、天皇を船
 上山(が)に迎へて賊を破りしが、延元元
 年足利尊氏の京師を犯すにあたり、諸將と
 堅ちて之を走らせしが、尊氏再び至るに及
 び奮戦して死す。「中海」の別稱。
なわのうらな 名和浦【名】「地」なかのうみ
 なわ【名】ち(ん)地震【名】「古語」驚お
 みの子やぶのしは垣したとよみななるが
 搖(り)こばやれむしは垣」空想ありつ
 るよりも聲の響高くまきりて、かみいとさ
 わがしくひらめきて、なるのやうに土う
 ごく
なるふる【句】地震す。地震がふる。紀
 「地震、ナキフリテ」定規書十月ばか
 り、夜、なないたくふりければ、木末に
 はのこりもあらん神無月なべてふりつ
 る夜のくれなる
なるのかみ 地震神【名】地震を司る神。
 地震の神。「古語」起地震、舍屋悉破、則
 令四方傳々地震神(が)なり
ななはむし なるは蟲【名】「動」『苗葉』
 蟲の轉訛か「あむし(蛭蛉)に同じ」。「古
 語」字彙、蛭、ナエハシム
なをり 名折【名】「名を折る」を見よ「名
 譽をきすつこと。なをれ。古語」拾玉
 「しづの男が麻の衣の花ずりは萩の名をり
 のものにぞありける」長門軍(が)きたなし
 や、源氏のなをりに返し合はせたまへ」
なをり 波折【名】波の折重なりて立つこ
 と。又その所。一説に、波の折返すこと。又
 その所。「古語」重瀬(が)のなをりを
 みれば遊び來る鮎(が)がはた手に妻立てり
 見ゆ」
なをる 名折る【句】(名を)の條下を見よ。
なをれ 名折【名】「名折る」を見よ「名譽
 のきすつこと。はち。盛衰源氏の名折
 不審なりとて、一門に擯出せられて」大藏
 虎猪物語他領へ入つて苛察をさせば、一在
 所の名折ぞ」



に

【發音】「な」行第二の
 音。羅馬字にては na と
 書けども、他のな行音な
 (二)・な(二)の(二)の子
 音 n が舌端音(齒音)な
 るに對し、とぬとの子
 音は、發音の場所、それ
 よりも一層後方に位し、
 舌の中部を高めて發す
 るものなるが故に、口蓋
 音に屬す。これ、(i)・
 (u) が口蓋の母音な
 るがために、子音 n もそ
 の感化を受けるに因る。
 類例は、さ行のしじ、た行
 のちぢ及びは行のひにも
 求むることを得べし。故
 に、にはにに非ずして、
 實はこの音なり。長
 音は、いといと書くこと
 と書くとの兩法あり。
 本書は前者に依れり。
 目拂音にやににににに
 は、舌の中部をなねの
 子音を發する場合より
 も更に高めて、母音 i を
 發する場合の位置に置
 きたる子音に、母音 a・
 u・o の結び附きた
 るものにして、にに母音
 a・u・o の結び附き
 たるものともいふを得
 ること、にににににに
 よりて知らるべし。又、
 その長音はにににににに
 にににににににににに
 の中にて、にの直後にう
 又はふの續く時は、相合
 して揚長音ニユウとな
 る。例へば(来和)にユウ
 (入學)をニユウメン・ニ
 ニユウ・ニユウガクと發音
 する類。一語の中の變化

をえわわ ろれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしぎ こけくきか おえういあ

にはあらざれども、はにふ(墳生)をハニ
ニウと發音する類、亦、これに準ずべし。
例へば、猫の鳴聲なるにやうの類。
母音iの脱落してん(リ)に變化するこ
とあり。例へば、なび(何人)のなんび
さいかに(如何に)のいかん、死にたり」の
「死んだとなる類。漢語の熟語の中、
足利時代以前よりの發音にて、n韻の文
字の直後に、又はその頭音を有する文
字の續く時は、そのい又はの音、n韻の
影響を受けて、ニと轉呼するもの多し。
例へば、えん(延引)・しん(順悲)・さん
み(散位)・いん(因位)をエン・ニン・シ
ン・サン・ニンと發音する類。又、n
韻の文字の直後に、や又はよの頭音を有
する文字の續く時も、同様に、n韻の影
響によりて、發音ニヤ・ニョと發音する
ことあり。例へば、きんや(禁夜)・れんや(鍊
治)・さんや(算用)・ねんや(年預)をキン
ヤ・レンヤ・サンヤ・ネンヤ・ネンヤと發
音し、あんや(安養)・まんや(萬葉集)
を、養葉がヨオの如く發音する文字な
るがために、アン・ニョ・マン・ニョ・オシ
ユウと發音する類。ん(因)も参照。

【字源】平假名には「仁」(吳音ニ)の
草體、變體平假名にも同字の草體、
又は「爾」(吳音ニ)の別體なる「尔」の草
體、又は「耳」(吳音ニ)の草體、又は「丹」
(訓ニ)の草體より出づ。片假名ニは、
「二」(吳音ニ)より出たりとも、仁の
略體なりともいひ、又、萬葉假名として
は、前記「仁」・「爾」・「尔」・「二」の外
字音に據れるものに「通」・「逆」・「備」
・「你」・「兒」・「耳」・「而」・「貳」・「尼」・「人」
・「柔」・「日」等、訓を取れるものに「煮」
・「煎」・「似」・「荷」等あり。

に荷【名】一「携へ、になひ、又、運送しなど
する品物。にもつ。二「一身に負ふ責、負
担。任務。責任。『荷、重し』。三「手数を要
する物。厄介のもの。じやまもの。『荷にま
する物。』四「建、梁柱などの上にかかる重量
にもつ荷持参照。

荷が下(オ)りる【句】責任除かる。義

務、完了す。重荷(オ)がおりる。今宵心
中御念が入つて忝い、私の荷が下りま
したと。二「荷、重きに過ぐ。三
荷が勝つ【句】一「荷、重きに過ぐ。二
負擔、過重なり。

荷が過ぎる【句】前條に同じ。
荷にす【句】邪廢物にす。荷厄介(オ)に
す。もてあます。
荷になる【句】携へてゆく手数を要
し、途中の邪魔になる。
荷の緒【句】荷を結ぶ緒。荷に結びつ
けて、これを持つて便なるやうにした
る緒。には、萬葉(東人)の荷前(オ)
の箱の荷の緒にも妹が心に乘りにけ
るかも。
荷を下(オ)す【句】責任を果す。義務
を完了す。重荷(オ)をおろす。にしろし
(荷下)参照。

に土【名】一「つち土」に同じ。古語「亦に」
に丹【名】一「あかつち。あかに。古、染料
に用ひたり。にぬり(丹塗)参照。二「赤き
繪具(オ)。諸松(口)びるは、にといふもの
塗りたるやうに。方丈記丹着き、白がね
こがねの箱など、所所に著きて見ゆる木
のわれ。
丹の穂(オ)【句】顔面に、赤く美しくあ
らはれること。赤穂(オ)のほに参照。
古語「萬葉にのほなす面(オ)の上に
何處ゆか、皺かきたりし」同吾が戀ふ
るにのほのおも今宵かも天の川原に
岩枕(オ)かむ。
に瓊【名】一「たま。赤色のたま。古語「瓊紀
に私記」古者謂玉或爲努、或爲貳(オ)に
煮【名】煮ること、又、煮たること。に
え。「煮が足らぬ」
に尼【名】一「びに(比丘尼)の略。あま。
に二【名】一「二度目。二番。第二。つ
ぎ。二の矢」二の銘(オ)其一人には一に
思はれずば、……いみじう憎まれ惡しう
せられてあらん。二・三にては、死ぬとも
あらじ」源氏「二の車に忍びて」二なら
ぶこと。同等。二重ぬること。二重

に

四同一ならぬこと。たがふこと。異にす
ること。「價を二にせず」二ふたごころ。
二心(オ)。三「味線などの三本の線の真
中にあるもの。にのいと。(一・三に對し
て)にあり(二上)参照。二が上る」
二鷹三茄子(オ)【句】一「富士、二鷹、
三茄子」を見よ。
二の刀【名】一「二度目に斬りつく
る太刀。平家「景經が打つ太刀に、義盛
が、(オ)、胃の眞向(オ)打割られて、
二の太刀に頸打落さる」
二の手【句】一「はなて(二番手)に同じ。
二の階(オ)【句】位階の二位。増鏡「文
治元年、二のはしを上りしも」
二の槍【句】二度目に突出す槍。「二
の槍を入る」見よ。
二越前【名】一「播磨、二越前」を
二【名】一「太宰府の次官。大貳、少貳の
別あり。

に二【名】一「一を加へたるもの。
二無し【句】一「なし(似なし)を見よ。
二も無く三つも無し【句】(佛)「二つ
も無く三つも無し」に同じ。大鏡「今
の入道殿下の御有様、古を聞き、今を見
はべるにも、二もなく、三もなく、並な
く、はかりなくおはします」
に不【助動】一「不」の連體形なるぬの轉。
古語「貳(オ)が緒をぬすみ獄(オ)せむ
と」筑はく、已知るに御眞木入日子(オ)は
はや」萬葉言はむすむすむす知らに」
に【助動】ぬの命令形なるぬの詠。古語「
萬葉久方の天路(オ)は遠しなほなほに家
に歸りて業(オ)をしまさき」同この川に
朝菜洗ふ子なれもあれもよちをぞ持てる
いて子たばりに」
に【助】一「名詞・代名詞に添ひて、事物の
位方向時などを、それと指示する語。地
位方向の場合のは、へに似て、一層明確に
指示する意あり。『汝に與ふ』冷氣に襲
はる『東京に赴く』右に向く『午後三時
に歸る』三に二を加ふ『乙は甲に劣る』
二名詞に添ひて、その事物に、他の事物の

に

に

添ひ加はる意を示す語。「月に村雲、花に
風」鬼に金棒(オ)二名詞・代名詞に添
ひて、にてに於て等々の意を示す語。
「泰き次第に候ふ」大に非ず」よき折に
もあるかな」四名詞・代名詞に添ひて、變
化する事物を示す語。二「氷解けて、水
になる」黒色に變ず」議員に選舉す」大
臣に任ず」三名詞又は名詞・動詞に添
ひて、原因・手段・方法、又は目的の事物を
示す語。「紙を買ひて、に就きて文量
を示す語」深き心を君に見るかな」産
物に富む」四名詞・動詞又は句などに添
ひて、副詞又は副詞句を形づくる語。「俄
かに」疾くに」思ふがままに」雪のごと
くに」ひた下(オ)に下る」二つの同
一なる動詞の中に挟まりて、その動詞の
意を強むる語。「雨降りるに降る」採みに
採うてぞ攻め寄する」二動詞・形容詞に
添ひて、然るにの意を示す語。ものを
「風も無きに花散る」二動詞・形容詞に
添ひて、云云なるに因りて、云云なるが故
に等の意を示す語。「風寒きに、疾く歸ら
ずや」

にあがり【二上【名】三味線の弾き方の
一。二の絲の調子が、本調子の場合より
も高きこと、又その曲。(本調子三下(オ)
に對して)
にあがり【二上新内【名】新内
節の節まはしにて唄ふ、二上の小歌。詞
も、節も、哀婉の情趣に富む。
にあがる【煮上る【動四自】にあがる(煮
上る)の詠。
にあく【煮灰汁【名】煮立てたる灰汁
にあぐ【煮上ぐ【動下二他】完全に煮る。
にあけ【荷揚【名】船に積みたる荷物を、
陸地に揚ぐる。みづあげ。
にあけ【荷揚港【名】にのろしかう(荷
卸港)に同じ。
にあけ【煮湯【名】煮たる食物
などを器より取出し、その液(オ)をしたた
らせたなどとするために、暫時入れおく。煮
湯。魚などを煮る時、その肉のくづれぬや

に

うに、それを入れて煮る策。

にあげにんそく 荷揚人足〔名〕荷揚に従事する人足。こあげにんそく。にあげは 荷揚場荷揚場〔名〕荷揚をする場所。あげは。とは。

にあし 荷足〔名〕そこに(底荷)に同じ。にあせ 荷汗〔名〕穀類・糠粕などを船舶に積込み、暖地より寒地へ向けて航行する時、諸貨物蒸熱して、船舶内に生ずる汗の如き水滴。鋼鐵船は、木船に比してこれを生ずること多く、貨物を濡れ損ぜしむ。これを汗濡(あせ)と稱す。ふなあせ。あせ。

にあはし 似合はし〔形二〕似合ふやうなり。釣合ひであり。ふさはし。相應なり。にあはす 煮合はす〔動四他〕まぜ合はせて煮る。共に煮る。

にあはす 煮合はす〔動下二他〕前條ににあひ 似合〔名〕似合ふこと、又、似合ひであること。釣合ふこと、又、釣合ひであること。在言(在言)「似合(の)用」。

に結婚などの上にて、年齢・身分などの釣合ひであること。五人女(都の物がたき住)を嫁ひ、物解かなるかか山家に、似合の縁もなき身をひきさけて、里の仕業の庭ばたらき。無類昔人又、かのお方も、若い身の上、何時までも獨身(ひとりで)でも済まぬ程に、似合な者もあるならば奥様も持たせまじ。

似合似合の釜の蓋(フタ)〔句〕「大さ。形などの同一」ならざる釜の蓋も、それぞれしつくりと合ふ釜のある意」いかにつまらぬ物にも、それぞれ釣合ひたる相手のあるものなり。似合ふ釜の蓋。破鍋(やぶなべ)に綴蓋(つづみ)。「詠語」。

にあひつゝ 似合頃〔名〕結婚の上にて、年齢の釣合ひであること。年五二つちがひのつま等は、似合比との調(なご)「かや」。

にあふ 似合ふ〔動四自〕配合よく見ゆ。つりあふ。につく。ふさふ。適合す。相當す。相應す。にやふ。

似合はぬ僧の腕立(うでたて)〔句〕人は、その身に似合はしからぬ事を好む傾あ

るものなり。〔詠語〕曲曲(まがまが)「似合はぬ僧の腕だて、さこそをかしと思すらめ」。

似合ふ釜の蓋(フタ)〔句〕「似合(の)似合の釜の蓋」に同じ。鍋蓋合點(なべがしあひて)口に任する法問を、似合ふ釜の蓋あてて響むれば、よきぞと心得て、鼻頭を反(さか)らし、慢すれども。

似合ふ夫婦の鍋の蓋(フタ)〔句〕「似合(の)似合の釜の蓋を見よ」夫婦の、性行相似て、釣合ひである形容(やや)嘲る意にていふ。似た者夫婦。〔詠語〕。

にあへ 煮煮煮和(ににに) 鮭などの皮梅干(うめ干)・木茸(きそう)・銀杏(ぎんぎょう)・榎(えん)・黒豆胡桃(くろまど)などを混合して、旨煮(うまに)とし、玉子をかけたる食品。

にい 兄〔名〕あに(兄)を云ふ。〔幼兒の〕にい 兄〔名〕「類書纂要」に「小西大西二山名、在古辰州府城西、中有三書千卷、相傳、秦人于此而學、因留焉」とあるに本づく。書籍を多く蔵する所。〔二西の書〕。

にいさま 兄様〔名〕に(兄)の敬稱。にいさん 兄様〔名〕前條の音便。

にいひ 丹石〔名〕「鑑代諸石」又は黄土(こゝろ)の類。にいち二 數 次條を見よ。二二天作(サシ)の五〔句〕「珠算の割算にて、一を二にて割る時、桁の上の五珠(ごしゆ)を一つおろすこと。〇かぞふること。計算」。

にいちゃん 兄様〔名〕にいさん(兄様)の訛。〔幼兒の語〕。

にいにい 煮煮〔名〕煮ること。〔幼兒の〕にいにい 煮煮ににいにい 蟬〔名〕「動」なつみ(夏蟬)に同じ。

にいやか 賑やか〔貌〕にぎやか(賑やか)の音便。〔東京の幼兒の語〕。

にいう 丹色〔名〕丹(に)の色。丹の如き色。たんに。

にいう 煮色〔名〕食物の煮上りたる色。〔いろ色〕を見よ。鰹節を削り、醬油と共に煮出して、その滓を去りたるもの。吸物などの汁に用ふ。

にいう 乳〔名〕にいう乳を見よ。乳の粥〔句〕「乳(に)の粥」を見よ。和名「乳酪」通字「酪可遊」。

にいう 二羽〔名〕合掌する時の、左右の手を握り合せる花弁かに、十念稱名の聲絶えず。

にうけにん 荷受人〔名〕「法」荷受をする人。にうけぬし(荷受人に對して)。

にうけぬし 荷受主〔名〕前條に同じ。にうけぬし 柔弱〔名〕じやや(柔弱)に同じ。

にうじん 柔順〔名〕じやじん(柔順)に同じ。にうちゃん 牛莊〔名〕「地」歐米人の、この地の北方にある牛莊城の所在地と混同して稱へたるもの。〔えいご〕「牛莊」に同じ。

にうさんくわん ニウトン環(英Newton's ring)〔名〕「理」一面平なる凸レンズを、その凸面を下にして、硝子板に載せ、上方より光線を當つる時に、現る明暗の縞の如き美麗なる色彩の輪。英國のニウトンの發見に係り、凸面より反射したる光波と、平板の上面より反射したる光波との、互に干涉するによりて生ず。にうさんりんぐ。

にうさんのうんどうのだいじはふそく ニウトンの運動の第一法則(英Newton's first law of motion)〔句〕「理」静止せる物體は、外力の作用を受けざる間は、静止状態を繼續し、又、運動せる物體は、外力の作用を受けざる間は、同一の方向に、同一の速さにて進行を繼續するといふ法則。慣性の法則。

にうさんのうんどうのだいじはふそく ニウトンの運動の第三法則(英Newton's third law of motion)〔句〕「理」作用あれば反作用あり、而して作用と反作用とは、大さは相等しく、方向は反對なりといふ法則。反作用の法則。

にうさん 運動の第二法則(英Newton's second law of motion)〔句〕「理」運動量の變化は、力と力の作用せる時間との相乘積に比例し、且つ、その變化の方向は、作用せる力と同一なりといふ法則。又、力は質量と加速度との相乘積に比例するといふ。加速度の法則。

にうさんのうんどうのはふそく ニウトンの運動の法則(英Newton's law of motion)〔句〕「理」物體の運動に關して、英人ニウトンが規定したる法則。第一法則・第二法則・第三法則の三つあり。各條を見よ。

にうさんりんぐ(英Newton ring)〔名〕「理」二面平なる(ニウトン環)に同じ。

にうなん 柔軟・柔順〔名〕じやなん(柔軟)に同じ。〔佛〕「法華經の華嚴品に「衆生既信伏、質直意柔軟、一心欲見佛、不自惜身命時我及衆僧俱出靈鷲山」とあり。心柔和にして、道に隨順すること。今書「心柔軟、正直にして」。

にうなんちてん 柔軟地天〔名〕「佛」三十三天の一。善見城天の北方にあり。

にうはう 女房〔名〕にうはう(女房)の訛。狂言(狂言)「一度」再びくれた女房(にうはう)をば戻すまいといふか。

にうはう 女房事〔名〕にうはう(女房)の出入(しゆ)の訛。狂言(狂言)「ちと女房(にうはう)の出入(しゆ)御座る」。

にうはう 女房衆〔名〕にうはう(女房)の訛。狂言(狂言)「女房衆(にうはう)に談合めされい」。

にうま 荷馬〔名〕荷物の運搬に使役する馬。におひうま。こにだうま。駄馬。騾馬(騾馬)にてもあれ、荷馬にてもあれ、雜役に濟(な)うだ。

にうむ 名 〔名〕あるみにうむ(安律審紐)の略。〔ニウムの銅〕。

氷結と降雪との爲に、水陸諸方面の交通
杜絶せるに乘じ、バルチザンは、漸次同地
の我が守備隊に脅威を加へ、翌年三月、武
裝解除を要求するに及びて戦闘となり、
我が軍、衆寡敵せずして百三十餘名の捕
虜を出すに至りしが、敵は、既に、我が救
援軍の接近を知りて、五月二十四日の夜
半、捕虜の外、在留同胞全部を虐殺し、全
市を焦土と化せしめて退去せり。

にがうていり 二項定理【名】「数」『英
Binomial theorem』 n が正の整数なる時、
二項式の n 乗の展開式を求むる定理。例
ば、 $(a+b)^n = a^n + na^{n-1}b + \dots + b^n$

$$\begin{aligned} &+ \frac{n}{1 \cdot 2} a^{n-2} b^2 + \dots + \frac{n}{1 \cdot 2 \cdot 3} a^{n-3} b^3 + \dots \\ &+ \frac{n}{1 \cdot 2 \cdot 3 \cdot 4} a^{n-4} b^4 + \dots + \frac{n}{1 \cdot 2 \cdot 3 \cdot 4 \cdot 5} a^{n-5} b^5 + \dots \end{aligned}$$

二項式定理。
にがうていり 二項方程式【名】

「数」『英 Binomial equation』 n を任意の
正整数、 a を任意の正数、負数若しくは虚
数とする時、 $x^n + a = 0$ 又は $x^n = 1$ と
化し得る方程式。

にがうはん 二郷半【名】「地」にがうはん
(二合半)を見よ。

にかうもんたい 尼港問題【名】尼港事
件に關して、朝野の間に論議せられし善
後處置の問題。

にかうり 苦瓜【名】「植」「きからすうり
(黃烏瓜)に同じ。『つるなし』(蔓莖枝)
に同じ。

にかうるか 苦酸鰯【名】「鮎」の鰯を
材料としたるもの。

にかかしゅう 苦何首烏・黃獨【名】「植」
「蓼」科に屬する多年生の草。莖は
蔓となりて、他物に纏繞し、葉は全縁の心
臟形にして、莖葉(莖)のよりも固く、大
き約五寸。花は莖葉に同じく、淡黄色に
して、夏季開き、單性、雌雄異株、穗狀花序

に排列す。根塊は粗き莖多く、味苦く、食
用とす。我國各地の山野に自生す。かし
ゆういも。けいも。ゐのととき。

にがき 苦木【名】「植」苦木科に屬す
る落葉亞喬木。高さ二丈乃至四丈、周圍
三尺程に達し、葉は互生して、奇数羽狀複
葉をなし、各小葉は長卵形にして、鋭尖
頭と鋸齒とを有し、苦味あり。夏季、黃綠
色の小花、總狀花序をなして開く。我國
各地の山野に自生し、北海道に殊に多し。
材は質硬くして光澤あり、器具用とす。
樹皮は紫黑色にして、苦味を有し、染料
又は殺蟲劑に供せらる。やまにがき。

「苦棟樹」【名】(桑皮)に同じ。『植』
たうや(旱蓮)に同じ。

にがきくわ 苦木科【名】「植」顯花植物。
被子類、雙子葉門、離瓣花區に屬する一科。
喬木又は灌木。苦木、庭漆(漆)など、こ
れに屬す。くわく。

にかうせん 二架空線式【名】「く
せんかうしき」複線架空式に同じ。

にがくさ 苦草【名】「植」「唇」形科に屬
する多年生の草。高さや二尺に達し、
葉は楕圓形にして鋸齒を有し、對生す。
夏季、葉腋及び莖頂に、淡黄色の小花、穗
狀花序をなして開く。我國各地の山野
に自生す。いねちよろぎ。はなちよろぎ。

「やだば」(藪煙草)に同じ。

にがくち 苦口【名】「人」の氣に障る様な
る。にがにがしき物いひ。どくぐち。あ
くこう。わるくち。にくまれぐち。

にかくむぎ 二角麥【名】「植」にであむぎ
(二條麥)に同じ。

にかけ 煮掛【名】「餛飩」の下に、笋
(筍)・大根などの物を敷き、垂味噌(味噌)の
汁にて掻きまぜたる食品。「信濃國輕
井澤邊の方言」。

にかげんそ 二價元素【名】「化」『英
Bivalent elements』原子價の二なる元素。
にがこにが子【名】(赤子)を云ふ。
「越後國の方言」。

にがうり 苦子瓜【名】「植」にがうり(苦
瓜)を云ふ。「肥前國長崎の方言」。

にがされ 苦戲【名】にがにがしきざれ
ごと。色道大體にがされ、人をなみして、
ざれごとを強ひいふ貌なり。にがにがし
きざれごとといふ事なり。

にがし 苦【名】「形」「熊鷹」の如き味
あり。あまからず。苦味あり。『快から
ず。嫌はしく感ぜらる。いとほし。にが
にがし。』「苦い顔」大體興もきめて、事に
がくなりぬ。『千本櫻親子が工合』の最
中、「苦い父親」(彌左衛門)。

「苦い經驗」【句】『英 Bitter experience』
嘗て辛(き)き目に遭ひしこと。くるし
き經驗。

にがひん 逃癖【名】『英 Escape valve』
又 Relief valve 蒸氣機關に於て、汽笛の
内部に水滴附著し、唧子に壓縮せられ、強
大なる水壓生じて、汽笛蓋の破裂を生ず
ることあるにより、これを防ぐために、蓋
の上部に、外方に開き得るやうに取附け、
發條にて壓しおく圓錐形のもの。給水管
にも、過剰の水壓を逃出せしむるために
裝置することあり。放水瓣。『同じ』。

にがしほ 苦鹽・苦塩【名】にがし(苦汁)に
にがしほ 苦潮【名】あかし(赤潮)に同
じ。仕懸文庫「あんまり照りつづから、苦
潮でいけやせん」。

にがす 逃す・逃す【動】(動四他)「逃げしむ
とり」にがす。のがす。はなつ。のがらか
す。『足を後方など(反)らし仰ばす。
建武年中(行軍大開)を、硯の北におきて、
左の足をにがして、これを繰る』。

逃した魚は大きい【句】次條に同じ。
「諺語」。

逃した物に、小さい物なし【句】取
り逃したる物は、何れも大きくありし
やう感じて、惜しく思はる。逃した魚
は大きい。『諺語』。

にかた 煮方【名】「煮」る方法。煮やう。
『料理屋などにて、食品を煮る業を取扱
ふ役、又その役の人。二代男「煮方する男
も、心安だて出て、鯉など揚げといふ」』。

にかた 荷方【名】荷物の事を取扱ふ役、
又その役の人。にもつかた。

にかた 二心候【名】鷹の性の鈍きこと。
にかた 苦竹【名】「植」『その筍の味苦
きによりていふ。』「ただけ(苦竹)に同じ。
にめだけ(女竹)に同じ。

にかた 荷方船【名】こにだね(小荷
駄船)に同じ。

にかちや 苦茶【名】「植」たうちや(旱蓮)
に同じ。『升麻』の葉を云ふ。「東北
地方の方言」。

にかつぎ 荷擔【名】荷物をかつぐこと。
又その人。におひ。擔夫。

にかち 苦土【名】「農心土」の未
だ風化せずして、植物の根の發育に不適
當なるもの。

にかち 苦手【名】「己れにとつて不利
益なる相手。好ましからぬ相手。『相手
のにがにがしき手段』。

にかち 苦手藥【名】「好ましから
ぬ藥。『好ましからぬ物事。一代玄物
言ひかくるに、俄かに腹痛むとて、返事も
せず、むきむきで寐入れば、この男、つめひ
らきは思ひも寄らず、私の苦手藥なりと、
夜明までさすりける程の、あまりいたは
しく思はれ』。

にかち 苦汁取油汁取【名】醬油を醸
造する時、食鹽中の油汁(油)を分離する
こと。にがををること。

にかち 苦菜【名】「植」「りんどう(龍膽)
に同じ。『古語』和名龍膽、衣夜美久佐。
一云、通可奈。『菊科に屬する二年生の
草。莖は細くして、高さ
一二尺に達
し、葉は互
生し、細長
く、不整の
缺刻有り。
春、芽を出し、花は蒲公英
(蒲公英)の似て小く、通常、五箇の黄色なる
舌狀花より成る頭狀花序に排列し、小形
種子狀にして、冠毛ある果實を結ぶ。我國
各地の山野に自生し、莖葉に白汁を含



(二) な が (に)。

にがみ

火もいたうまよひて吹きかけらるるを拂
ひわびつつ、烟の中よりがみ出たる
主殿察(み)の者の顔ども」
にがみいる 苦入る「動四自」甚しくに
がむ。大いに顔をしかむ。盛衰(せ)悪しく
飛んで、腰を損じて、にがみ入りたりける
顔の氣色」
にがみかかる 苦掛る「動四自」にがみ
ながら襲ひかかる。顔をしかめて向ひ來
る。狭き道にいて、にがみかかる顔け
しき、やまもせば、食ひかきぬべし」
にがみきる 苦切る「動四自」甚しくに
がむ。にがみきる。
にがみはる 苦味走る「動四自」顔つ
きに、にがみ有り。容貌りりしく見ゆ。
「苦」が走る「參照」
にがむ 苦む「動四自」にがにがしく思
ふ。にが顔をなす。にがる。盛衰(せ)心ち
悪しうなりて、いかに仕らんとにがみて」
住吉(すけ)泣くよににがみあるなり」
にがむ 苦む「動二他」にがむ様子を示
す。盛面(せ)を作る。眉をひそむ。しかむ。
盛衰(せ)王の舞を舞ふなるに、面模(も)の
の下にて、鼻をにがむ事に侍るなり」
にがむ 苦む「名」嘔まばにがからん
と想像せらるる盛。
苦蟲を嘔潰(せ)したやうな顔「句」
にがみきりたる顔つき。にが顔。盛
面(せ)。
苦蟲を喰潰(せ)したやうな顔「句」
「同じ」
にがもも 苦桃「名」「種」けも(毛桃)に
にかよふ 似通ふ「動四自」互に似る。
かよふ。類似す。源氏(げん)いとよく似通ひ
けるかなと思ひくらぶるに」
にがよも 苦艾「名」「種」菊科に屬
する多年生の草。高さ二尺乃至四尺に
達し、葉は一回羽状に分裂し、下部の葉
は長柄を有し、上部の葉は短柄又は無柄
なり。葉の裏及び莖の全體には、柔き白
毛密生し、且つ強き芳香有り。八九月の
頃、黄色の花、半球形の小頭狀花序をなし
て開く。原産地は歐羅巴。果實は香料

にがら

種子は驅蟲劑に供せらる。日めはじき(益
母草)に同じ。
にがら 煮穀「名」にだし(煮出)に同
じからが(英 Kneading)「名」地中央亞
米利加にある共和國。首府をマナガ(Ma-
nagua)といふ。
にがらひつ 荷唐櫃「名」長唐櫃の半分
の長さなる唐櫃。その二つを棒の兩方
にかけ、一人にて荷ふ。になひからひつ。
にがら 苦「名」にがること、又その有様。
にがら 苦「句」にがみはる(苦味
走る)に同じ。盛衰(せ)にがりの走りた
るも、仔細ありてよし」
にがら 苦汁・瀉汁「名」食鹽の、空中の水
分を吸收するによりて滴りたる液。その
成分たる鹽化マグネシウムなどのため
に、苦味を有し、豆腐の製造に、レグミン
を凝固せしむるに用ふ。にがしほ。
にがら 苦切る「動四自」にがみきる
(苦切る)に同じ。
にがら 苦らふ 苦笑ふ「動四自」にがらふ
(苦笑ふ)に同じ。盛衰(せ)和主(わ)を鼓判
官(く)と京中の童郎(どう)のふまでも申す
は、人に打たれたまひたるか、又はらた
まひけるかと問ひければ、判官(はん)苦ら笑ひ
てぞ歸りける」
にがら 苦る「動四自」にがむ(苦む)に同
じ。盛衰(せ)實に理(り)なりければ、聞く
人、皆にがらあ(へり)。「苦笑(せ)」
にがら 苦らふ 苦笑「名」にがらふこと。
にがら 苦らふ 苦笑「名」にがらふにがに
がし思ひながら、強ひて笑ふ。にがら笑
ふ。苦笑(せ)す。平素上には事なき様な
れども、下には用心して、苦笑(せ)ひてのみぞ
候はれるに」
にがら 日記「名」にきき(日記)に同じ。
「古語」源氏(げん)わが御ありさまを、にきのや
うに書きたまへり」日記(に)を書く
こと。日日の出来事を記すこと。「古語」
源氏(げん)月日たしかに記しつ、にきして、さ
るべき所は、繪に書きたまへり」
にきき 二氣「名」陰と陽と。陰氣と陽氣
と。二儀。兩儀。

にき

にきき 二季「名」唐書(てい)の王彦威傳に
「季二季(き)とあり」四季の内の二つ。
主に、春と秋と、又は夏と冬とにいふ。
東鑑(とう)二季彼岸(き)佛聖田(ふ)禁抄(きん)二季月次神
今食(いま)孟蘭盆(ぼん)と説き及ぶ。ぼんく
れ。にきはらひ(二季拂)ひさきほう(二季
奉公)參照。「二季の諸拂(しよ)」
にきき 助動「助動詞の運用形に、助動
詞の添はりたる語」過去の意を強く表
はす語。古今(きん)名にめてて折れるばかりぞ
をみなべしわれ落ちにきと人に語るな」
にきき 二儀「名」天と地と。兩儀。太平
記(たい)日本開闢の始を尋ねれば、二儀(に)すてに
分れ、二氣(に)漸く顯れて、二陰(に)と陽と。兩
儀。三氣(さん)は。在(あ)居(あ)二儀七曜の火」
にきき 和熟「接頭」柔かなる。精しき等の
意。にき、荒(あ)に對して「古語」和妙
(わ)「和魂(わ)」
にきき 和魂「名」上古、蝦夷を三種
に分ちしもの。王化に服して、皇朝
の風俗に従ひしもの。にきえみし。熟蕃
(じく)蝦夷(え)都加留(と)蝦夷に對して」記
「熟蝦夷(じく)ニギエミシ」
にきき えみし 熟蝦夷「名」前條に同じ。
にきき い 歸戒「名」佛三寶の内の
佛寶と僧寶とに歸依(き)する戒法。さんき
(三歸)參照。
にきき 仁岸川「名」地能登國風
至(し)郡にありたる細流。古は越中國に屬
し、鏡石川(きやう)と書きたり。萬葉(ま)妹にあはす
久しくなりぬにきし川清き瀬とにみな
うらはへてな」
にきき 和稻「名」稻の實の、根(ね)を
指(さ)り去りたるもの。こめ(荒稻)のむ
に對して「古語」祝詞(いのち)大忌祭(おほ)和稻(わ)荒稻
(あ)に」
にきき 和炭「名」にきき(和炭)に同
じきたつ 熱田津・采田津「名」地伊
豫國温泉(い)郡にありし地。今の同郡三
津濱(さん)町古三津(ふる)村の邊といふ。
萬葉(ま)にきたつに舟のりせむと月待てば潮
津(うし)を見よ」
にきたつ 和炭「名」にきき(和炭)に同
じきたつ 熱田津・采田津「名」地伊
豫國温泉(い)郡にありし地。今の同郡三
津濱(さん)町古三津(ふる)村の邊といふ。
萬葉(ま)にきたつに舟のりせむと月待てば潮
津(うし)を見よ」

にきた

にきた 和妙「名」にき(和)は接頭語、
妙は假借の字、細かく柔かに織りたる袴
(は)。「一説に、打ちて柔かならざる袴
なり」とも、又色を染めず、且つ光澤なき
常の絹なりともいふ。(荒妙(あ)に對して
にきて和幣(わ)參照。祝詞(いのち)新年祭(しん)御服(み)
は、明妙(めい)參照。妙妙(めい)和妙(わ)に
にきた 和魂「名」にききた(和
魂)に同じ。「古語」類聚(るい)其君(き)そは忘れ
たるらめにきたたまのたわめわれは常の
白珠(しろ)に
にきた 和靈「名」にきた(和
靈)に同じ。「和袴(わ)の誤ならんといふ。ころも
(衣)にかけていふ。萬葉(ま)にきたまのころ
も寒らに」
にきた 和幣「名」にきた(和袴の約に
て、それを幣(へい)とするに就きていふもの
に、ふてが古袴(ふる)の義なる類なるべし
とも、又、にき(和)は接頭語に、美稱(み)に用
ひて、手の意にて、手して捧げ奉る幣
(へい)の義なるべしともいふ。(幣)に同
じ。「古語」蜀下枝(し)に白にきて。青
にきてを取垂(た)して」
にきた 二季鳥「名」(動)秋、北方よ
り我が國に渡り、春歸り去るよりいふ。に
き(二季)參照。が(雁)に同じ。「古語」
萬葉(ま)雁(かり)二季鳥。いつ方を故郷とて
は二季鳥の年に二たび行き歸るらん」
にきた 握握「名」赤子が、自分の手
を握りつ握りつすること。狂言(き)の養子
「手を握るやうな事をする。これも藝か。
それは、にきにぎと申す藝でござる」
「握飯(に)をきらふること。「幼兒の語」
先代(せん)もう飯が出来ました。いつものや
うににきにぎして上げましたよ」にきり
め(握飯)を云ふ。「幼兒の語」
にきた 賑賑「名」次條の語の語幹
にきにぎしきさま。愚管抄(ぐ)康賴(こう)など云
ふさるがうくるひ者など、にきにぎと召
使(めい)ひて」
にきた 賑賑「名」賑賑し「形」いかににも
にきはし。非常ににぎやかなり。
にきた 賑賑「名」にきはすこと。

にぎはし

にぎはし 賑はし「形二」にぎはし(賑はし)の略。空想、こころの御うぶにあひまうてくる中に、多くにぎはしかりし事は」

にぎはす 賑はす「動四他」にぎはす(賑はす)にぎはす 和膚・柔膚「名」にぎ(和)は接頭語「やはらかなるはだへ。やははだ。」「古語」萬葉、つまのみことたたなづく柔膚すらを」

にぎはひ 賑はひ「形二」「動詞にぎはふ(賑はふ)の形容詞形となりたる語。うらやむ(羨む)のうらやまし(羨まし)となり、ゆく(行く)のゆかしとなる類」にぎはひてあり。富み榮えてあり。ゆたかなり。にぎはし。字義、饒也、饒也。由太介之。又、爾支波波志」にぎやかなり。陽氣なり。繁昌せり。殷賑なり。にぎはし。源氏樂の聲の賑にぎはしきに」

にぎはす 賑はす「動四他」にぎはしはしくす。富み榮えしむ。豊かならしむ。にぎはす。目めぐみ救ふ。ほどこす。救助す。賑救す。目にぎやかなりしむ。繁昌せしむ。陽氣にす。にぎはす。にぎはひて賑「名」にぎはふこと、又にぎはひてあること。富饒(の)。繁昌。記「饒富ニギハヒ」

にぎはふ 賑はふ「動四自」にぎはふ榮ゆ。ゆたかなる。富む。名義、賑ニギハフ・ユタカナリ・オホカリ」にぎやかなりなる。繁昌す。

にぎはふ賑ふ「動下二他」にぎはす(賑はす)に同じ。「古語」起贈給、ニギハヘ」

にぎはひのひとこと 通藝速日命饒速日命「名」神代に天磐船(アマフネ)に乗りて、河内國川上郡峰(ミタケ)に降り、後、大和國鳥見(トトリミ)の白庭山(シロノエ)に還りたまへる神。舊事記(イ)には、天忍穗耳(アメノホミミ)尊の御子と傳へたれど、天照大神の御系統以外の神なるべし。大和の倉長長盛彦(クラナガノナガモリヒコ)の妹御炊屋姫(ミツロイメ)を娶り、長盛彦に推されて、神武天皇の師に抗す。命、戦の利あらざるを知り、長盛彦を殺して、王

にきほろ

師に降る。その御子に可美真手(カミマコ)命あり、物部(モノベ)氏はその後裔。一に天照國照彦火明彥玉饒速日(ミコトハルヒノヒコ)命とも、膳杵(ツルキ)丹杵(ニツルキ)命ともいふ。にきほらひ 二季拂「名」にき(二季)に見よ。盆暮(ハシゴケ)の二季における支拂。にきひ 面皷・瘰癧「名」にき(瘰癧)の轉。顔面及び胸背の上部に生ずる。皮脂肪の炎症。紅く尖れる丘疹をなし、その中心に膿點を見る。主に、青年期に、消化不良、便秘脂肪過多貧血等によりて發生す。にきみ。運歩色葉集「瘰癧、ニキヒ、秘病」

にきひ 面皷・瘰癧「名」にき(瘰癧)の轉。顔面及び胸背の上部に生ずる。皮脂肪の炎症。紅く尖れる丘疹をなし、その中心に膿點を見る。主に、青年期に、消化不良、便秘脂肪過多貧血等によりて發生す。にきみ。運歩色葉集「瘰癧、ニキヒ、秘病」

にきび 面皷・瘰癧「名」にき(瘰癧)の轉。顔面及び胸背の上部に生ずる。皮脂肪の炎症。紅く尖れる丘疹をなし、その中心に膿點を見る。主に、青年期に、消化不良、便秘脂肪過多貧血等によりて發生す。にきみ。運歩色葉集「瘰癧、ニキヒ、秘病」

にきびたう 面皷黨「名」春機發動の年齢にある男女たち。にきびれん。にきびのむむ 面皷蟲「名」動「まうなうちゅう(毛蟻蟲)に同じ。にきびぶんかく 面皷文學「名」皷面黨の愛讀する、戀愛を主材とする文學。にきびれん 面皷連「名」にきびたう(面皷黨)に同じ。にきふ 日給「名」にきふ(日給)に同じ。日給の簡(ワ)「句」日給(の)の簡に同じ。辨内侍(ハニ)殿上に久しくたたずみて、にきふの御ふだ著到など見て。にきふ 和ふ・柔ふ「動上二自」やはらぐ。にぎむ。なごむ(荒)ぶに對して。「古語」萬葉、天皇(の)の御命(の)かしこみ、柔(に)びにし家(を)さかりて」

にきふせん 二級船「名」汽走・航走に拘らず、船舶検査規定に依りて、第二級の資格ある船舶。その船路は、近海航路・沿海航路又は水平航路の區域内に限る。にきふせんきよ 二級選舉「名」法。等級選舉の一。選舉人に二階級に分ち、各階級より同数の議員を選挙するもの。例へば、我國の町村會の選舉の類。にきふせんきよにん 二級選舉人「名」等級選舉制に於ける第二の等級にある選

にきふせんきよにん 二級選舉人「名」等級選舉制に於ける第二の等級にある選

にきふせんきよにん 二級選舉人「名」等級選舉制に於ける第二の等級にある選

にきふせんきよにん 二級選舉人「名」等級選舉制に於ける第二の等級にある選

にきふせんきよにん 二級選舉人「名」等級選舉制に於ける第二の等級にある選

にきふち

舉人。にきふちやうそん 二級町村「名」地方自治團體の一。北海道にて北海道二級町村制を施行する町村即ち一級町村にあらざる町村。にきふはふ 二級法「名」或事物を二箇の等級に分つ制度。にきふひん 二級品「名」商。鐵道貨物を種類によりて分ちたる等級。人造絹絲、毛織物・植木・樟油・ベン先等の類。運賃は一級品より低く三級品より高し。にきふふ賑ふ「動下二他」にぎはふ(賑ふ)に同じ。「古語」起優賜、ニギホヘタマフ」

にきふふ賑ふ「動下二他」にぎはふ(賑ふ)に同じ。「古語」起優賜、ニギホヘタマフ」

にきふふ賑ふ「動下二他」にぎはふ(賑ふ)に同じ。「古語」起優賜、ニギホヘタマフ」

にきふふ賑ふ「動下二他」にぎはふ(賑ふ)に同じ。「古語」起優賜、ニギホヘタマフ」

にきふふ賑ふ「動下二他」にぎはふ(賑ふ)に同じ。「古語」起優賜、ニギホヘタマフ」

にきふふ賑ふ「動下二他」にぎはふ(賑ふ)に同じ。「古語」起優賜、ニギホヘタマフ」

にきふふ賑ふ「動下二他」にぎはふ(賑ふ)に同じ。「古語」起優賜、ニギホヘタマフ」

にきふふ賑ふ「動下二他」にぎはふ(賑ふ)に同じ。「古語」起優賜、ニギホヘタマフ」

にきふふ賑ふ「動下二他」にぎはふ(賑ふ)に同じ。「古語」起優賜、ニギホヘタマフ」

にぎやか

にぎやか 賑「名」にぎやかすこと、又その物。にぎはひ。落枯木も、山のにぎやかし」にぎやかす 賑かす「動四他」にぎやかにす。景氣をよくす。にぎははす。にぎやく 二極「名」南極と北極と。兩にぎらか 降るか「貌」あふらぎりて光澤あるさま。きららか。「古語」名義、降、ニギラカナリ・ウルハシ」

にぎらか 降るか「貌」あふらぎりて光澤あるさま。きららか。「古語」名義、降、ニギラカナリ・ウルハシ」

にぎらか 降るか「貌」あふらぎりて光澤あるさま。きららか。「古語」名義、降、ニギラカナリ・ウルハシ」

にぎらか 降るか「貌」あふらぎりて光澤あるさま。きららか。「古語」名義、降、ニギラカナリ・ウルハシ」

にぎらか 降るか「貌」あふらぎりて光澤あるさま。きららか。「古語」名義、降、ニギラカナリ・ウルハシ」

にぎらか 降るか「貌」あふらぎりて光澤あるさま。きららか。「古語」名義、降、ニギラカナリ・ウルハシ」

にぎらか 降るか「貌」あふらぎりて光澤あるさま。きららか。「古語」名義、降、ニギラカナリ・ウルハシ」

にぎらか 降るか「貌」あふらぎりて光澤あるさま。きららか。「古語」名義、降、ニギラカナリ・ウルハシ」

にぎらか 降るか「貌」あふらぎりて光澤あるさま。きららか。「古語」名義、降、ニギラカナリ・ウルハシ」

帶してあらぬこと。からて。すて。手ぶ
ら。にぎりこぶし。徒手。空拳。目盛
の葉の、未だ開張せぬ時の譬。八笑人山
ふところに早蕨の握拳を開くより、盛（さか）
（進）ぬ花簾
握拳も、外（わ）れりや、腹が立つ（う）
思のままにならぬ時は、不平の心おこ
る。〔語註〕

握拳を戴（か）く〔句〕次條を、殊更に
丁寧にいふ語。丹波興作「握拳を二つ三
つしたきながら泣聲に」
握拳を喰（く）ふ〔句〕握拳にて打た
る。拳骨（こぶ）を喰ふ。
握拳を喰（く）ふ〔句〕前條に同じ。會我
會精山御時分善からう。朝比奈が握拳
の握飯、喰（く）うて見よ

にぎりさかもり 握酒盛〔名〕越後國に
て、邊鄙の貧民が、酒の糟を握りて、盆や
うの物に盛り、人々、寄りあひて、酒のか
はりに入ふこと。

にぎりした 握下（か）下（か）〔名〕弓の、握革
〔名〕より下の方。〔上〕に對して
にぎりしむ 握締む〔動下二他〕握り
て締めつく。固く握る。にぎりつく。
容易に手ばなす。

にぎりしむ 握締む〔動下二他〕握り
て締めつく。固く握る。にぎりつく。
容易に手ばなす。

にぎりしむ 握締む〔動下二他〕握り
て締めつく。固く握る。にぎりつく。
容易に手ばなす。

にぎりしむ 握締む〔動下二他〕握り
て締めつく。固く握る。にぎりつく。
容易に手ばなす。

えず握る。
にぎりづめ 握詰〔名〕握り詰むること。
にぎりさる 握取る〔動四他〕握りて、わ
が物とす。

にぎりばう 握坊〔名〕にぎりや（握屋）に
にぎりばさみ 握鋏〔名〕こさばさみ吳
服鋏に同じ。

にぎりばし 握箸〔名〕小兒などの、箸を
用ふるに馴れず、握りつかむが如き手つ
きに持つこと。
にぎりばす 握蓮〔名〕〔建〕勾欄（こうらん）な
どにて、東（あ）の上に設けて、
手摺を支ふるためにする、蓮
の葉の形せる飾。

にぎりふど 握太〔名〕手に
握りて持つに、手束に餘リ
て、太きこと。〔握太のステッ
キ〕廣義記「白木の弓の握太
なるを」



（すばりぎに）

にぎりへ 握尻〔名〕放屁し
たる時、それを掌中に受け握りて、漏れぬ
やうにすること。又その尻。にぎりつべ。
握尻三里〔句〕臭氣の長く保つ形容。
〔語註〕

にぎりぼどけ 握佛〔名〕泥を握り固め
て作りしといふ佛像。紀伊國名所圖會「握佛、
南嶽山大同寺法華院にあり。本堂の後
面、山道の傍にあり。慈覺大師、當山にお
いて、如法經（にっぽうきやう）修行の砌、自ら泥を以
て握り固めたまひしに、即ち八萬四千の
大日如來と拜まされしとせたまひしとなん
その形の大さ、五六分より乃至一二寸、黃
土を固めたるが如くにして、天然に佛壇
を見せり。實に殊勝のものなり。初は、
ここかしこに散在してありしが、今は、集
めて、小堂に安んぜり」

にぎりめ 握飯〔名〕飯を握り固めた
るもの。鹽氣を加へ、又は梅干（うめ）を挿
入しなどし、當座に食し、又は遠足などの
辨當として携帯す。にぎりいひ。つくね
めし。すび。おにぎり。團飯（だんぱん）。

にぎりもつ 握持つ〔動四他〕握りて持
つ。把持す。

にぎりや 握屋〔名〕金錢を貯へて、容易
に使用せぬ人。にぎりか。にぎり坊。け
ちんぼう。

にぎる 握る〔動四他〕〔手〕の五本の指
を、内側の方へ屈む。大體手を強く握り
て、……握りたうびけるおよびは、あまり
強くて、上にこそとほりて出でまへたり
けれ。〔屈〕めたる手の指と掌とにて、物
を締め又は持つ。つかむ。〔己〕が所有物
とす。手に入る。掌中に収む。掌握す。
五人女（ごにんむすめ）「一代見捨てじとの誓紙を握り」〔四
握腕（よにぎで）〕又は握飯を作る。〔容
握つたら放さぬ〔句〕〕怒心ふかき形
握たる拳（こぶ）、笑（わら）（こめる面（おもて））に
當らず〔句〕〕怒れる拳、笑顔に當ら
ず」に同じ。〔語註〕

にく肉〔名〕動物體の一部。筋と共に
筋肉を構成する柔軟なる物質。しむ
ら。しむ。み。〔獸〕類又は鳥類の、食用
に適するもの。〔畜〕に〔牛〕肉の略。〔四
果實の皮と種子との間にある、柔き部分。
み。〔英〕「apple」からた。肉身。肉體。
〔靈〕に對して。〔肉〕にくあひ。にくつき。
〔中肉中背（ちゅうにくちゅうはい）〕厚き。厚み。かさ。
〔紙の肉〕彫物（てうぶつ）の肉。〔圓形〕にして
中央に孔ある錢（ぜに）の、周圍をなせる厚き
部分。〔肉〕にく（印肉）の略。

肉餡（にくあん）〔名〕肉を食す。〔句〕次條に
同じ。〔語註〕

肉腐（にくくさ）て蟲を出だす〔句〕荀子の
勸學篇に「肉腐出蟲、魚枯出蠹」とあ
るに本づく。惡しき原因は、惡しき結
果を生ず。〔語註〕

肉の切實（にくのきつじつ）〔句〕女が、金錢のた
めに、多くの男に身を任すること。
肉の關係（にくのかんけい）〔句〕にくかう（肉交）に同じ。
肉を重ねず〔句〕史記の晏嬰傳に
「嬰以節儉力行、重於齊、既相、齊食
不重肉、妾不衣帛」とあり。一飯に、
二種以上の肉を食せず。

肉を剝（む）つて瘡（かさ）を醫す〔句〕
『華夷中の傷田家』と題する詩に「二月

肉を剝（む）つて瘡（かさ）を醫す〔句〕
『華夷中の傷田家』と題する詩に「二月

賣（う）新絲、五日糲（れ）新穀、醫得眼前瘡、刺
卻心頭肉」とあるに本づく。眼前の小
害を除かんがために、大なる犠牲を拂
ふ。〔語註〕

肉を割（き）いて疵（きず）に補ふ〔句〕〔股（こ）〕
を割いて、腹に充たすに同じ。〔語註〕
肉を以て蟻（あ）を去る〔句〕〔韓〕非子の
外儲篇に「以肉去蟻、蟻愈多、以
魚驅蟻、蟻愈至」とあるに本づく。方
法を誤れるがために、反對の結果にな
る。〔語註〕

肉を以て餓虎（がこ）に委（ま）す〔句〕
〔史記の張耳陳餘傳に「今必俱死、如
以肉委餓虎、何益とあるに本づく」〕
次條に同じ。〔語註〕

肉を以て餓虎（がこ）に委（ま）す〔句〕
〔史記の張耳陳餘傳に「今必俱死、如
以肉委餓虎、何益とあるに本づく」〕
次條に同じ。〔語註〕

にく肉〔名〕動物體の一部。筋と共に
筋肉を構成する柔軟なる物質。しむ
ら。しむ。み。〔獸〕類又は鳥類の、食用
に適するもの。〔畜〕に〔牛〕肉の略。〔四
果實の皮と種子との間にある、柔き部分。
み。〔英〕「apple」からた。肉身。肉體。
〔靈〕に對して。〔肉〕にくあひ。にくつき。
〔中肉中背（ちゅうにくちゅうはい）〕厚き。厚み。かさ。
〔紙の肉〕彫物（てうぶつ）の肉。〔圓形〕にして
中央に孔ある錢（ぜに）の、周圍をなせる厚き
部分。〔肉〕にく（印肉）の略。

にく憎惡（にくぞうお）〔名〕〔憎〕の語幹。〔に
くき〕の、甚あなにくの男や。〔盛〕盛
物論じたる顔の類や。……あな惡の人の
にぐ逃ぐ、逃ぐ、遁ぐ、亡ぐ、北ぐ〔動下二
自〕逃は逃の俗字。逃げて走る。のが
る。逃遁（てうとん）す。逃亡す。〔關係〕するこ
とを欲せず。責任の地位に立たぬやうに
す。避く。回避す。

逃ぐる魚を蛭子（むすこ）に供ふ〔句〕次
條に同じ。〔語註〕

逃ぐる魚を蛭子（むすこ）に供ふ〔句〕次
條に同じ。〔語註〕

いんぎ

る魚を夷(ヒ)三郎殿に供へ参らすとの意「つまらぬ物を提供して、望を叶へんとする輩」。「諺語」
逃ぐるが(一)の手「句」三十六計逃ぐるに如かず」に同じ。「諺語」
逃ぐるが奥の手「句」前條に同じ。「諺語」
逃ぐるが勝(カ)「句」(負)くるが勝に同じ。「諺語」
逃ぐる者道を擇ばず「句」逃ぐるとする目的のためには、手段の如何は問ふ暇なし。「諺語」
逃ぐるも一手(ハ)「句」事窮したる場合には、逃ぐるも止むを得ず。「諺語」
逃ぐるをば剛(ツ)の者「句」逃ぐるが勝に同じ。「諺語」 盛衰(セウセキ)軍に向ひては、命を失ふとこそ聞くに、一人も開けず上られたるこそいみじけれ。逃ぐるをば剛の者といふ事ありとて、人皆、笑ひあへり。
逃げた魚は大きい「句」逃(ヒ)した魚は大きい」に同じ。「諺語」
逃げた鯨(クジ)は大きく見える「句」前條に同じ。「諺語」
逃げ逃げ月を見る平家「句」平家の一族には、風流を解する者多く、源氏に追はれて、壇ノ浦に滅亡するに至るまで、逃げながら月を賞したりとの意」基を打つ時、相手が石を返くるを嘲りていふ語。「諺語」
逃げ逃げ天下を取る家康(ヤ)「句」『徳川家康は勝算なければ、妄に兵を進めざりしよりいふ』「逃ぐるが勝」に同じ。「諺語」
逃げも隠れもせず「句」にけか(ヒ)る(逃隠る)を見よ」敵又は警官などに捕へられんとする時、わるびれずしていふ語。
にくあつ 肉厚「名」肉の多きこと。分厚(フ)。(肉薄に對して)
にくあひ 肉合「名」身體のふとりである程あり。肉つきの程度。ししあひ。
にくあん 肉案「名」肉を載せて切る臺。

いんぎ

まないた。肉凡。
にくいち 肉一「名」(數)和算にて、甲數の某倍數より、乙數の某倍數を減じて、不足なること一なる時、その兩倍數を知りて甲乙の兩數を求むる算法。今の二元一次不定方程式の解法に相當す。じよういち(一)參照。
にくいれ 肉入「名」印肉を入れ置く器。いん(印)に同じ。
にくいろ 肉色「名」肉の色あり。にくしよく 皮膚の色に似たる色、即ち黄ばみたる淡紅色。にくしよく。
にくいろいじゆばん 肉色襦袢「名」肉色に染めたる襦袢。多く俳優、輕業師などの、技を演ずる時に著用す。にくじゆばん。次條參照。
にくいろいもひき 肉色股引「名」肉色に染めたる股引。所用は、肉色襦袢に同じ。前條參照。
にくう 二空「名」佛我空と法空との二空の滿月「句」佛二空の理を悟れる心の圓滿なるを、月に譬へていふ語。盛衰(セウセキ)痛まぬを、月に譬へていふ語。な(な)が、生死(シシ)の長夜の迷情たる事を」
にくう 二宮「名」二柱(ニハ)の宮たち。皇族御二かた。二后宮(ニク)と東宮と。「二宮の大饗」目伊勢大神宮の内宮(ニク)と外宮(ウケ)と。二所大神宮。著聞伊勢の海一志(シ)の浦にて、……たまたま二宮の御前に参りて、……太皇太后神宮……二宮の末社、風の社の寶殿」
にくうくわん 二空觀「名」佛我空觀と法空觀との併稱。
にくうす 肉薄「名」肉の少なきこと。分(フ)の薄きこと。(肉厚に對して)
にくえきす 肉越幾斯「名」英(England)の、即ちソップを煮詰めたもの。
にくえん 肉縁「名」肉體上の縁のあること。肉親たる關係。血縁。合那(カ)それこそ幽霊そなた、氣味が悪いはないか。

いんぎ

肉縁の深い程、死人になればこはい物、必ず門(カ)の月明けまいぞ」
にくが 肉芽「名」肉の組織。英(Easily)芽(カ)が(球芽)に同じ。「肉芽」に同じ。そ(そ)き(肉芽組織)に同じ。
にくかい 肉界「名」肉(カ)を見よ」肉身の世界。身體及びその作用の範圍。現身の界(靈界に對して)
にくから 肉業「名」肉を材料として製したる業(カ)。そ(そ)が。肉汁。
にくから 肉交「名」男女の肉體の交接。肉體上の交際。(情交に對して)
にくかく 肉角「名」孔(カ)に「鉏商獲麟(カ)二十五父之衝、冉有告夫子曰、麋身而肉角、豈天之妖乎」とあり。肉に包まれたる角(カ)。「動」後漢書の班彪傳に「肉角則毛、宗子外固」とあり。きりん麒麟の異稱。
にくがそき 肉芽組織「名」醫「獨Granulationsgewebe」組織の一部の、外傷のために缺損したる時、深部よりあらはれる顆粒狀の組織。にくげ。體感。にくかん 肉感「名」肉體に感ずる感覺。にくがん 肉眼「名」支那明の張翥の詩に「肉眼紛紛爭醜好」とあり。俗人の眼。凡眼。(心眼に對して)にくげん(肉眼)參照。肉體に具はれる調力。眼鏡などの助を借らざる眼の力。「肉眼にて見ゆる星」
にくかんてき 肉感的「名」哲(カ)色慾の衝動を起させやすきさま。實感的。「肉感的なる女」
にくかんらん 肉感論「名」哲(カ)ゆゑか(ヒ)ん(唯覺論)に同じ。
にくがる 憎がる「動四他」憎しと思ふ。にくむ。憎む。
にくき 肉兒「名」肉案(肉案)に同じ。にくきう 肉牛「名」肉を食料とする目的にて飼養する牛。(乳牛に對して)
にくきは 肉際「名」肉つきの様子。にくきり 肉切「名」獸類などの肉を切ること。又その人、又それに用ふる刃物。

いんぎ

物。日(カ)條の時。
にくぎり 肉切庖丁「名」肉を切るに用ふる庖丁。にくきり。
にくんちん 肉鯨「名」鯨肉を、食用に供する時にいふ語。(皮膚に對して)
にくんわ 肉果「名」植(カ)たに(カ)わ(多)肉果に同じ。にくんわ 肉塊「名」肉の(カ)たま(カ)りしむら。肉團。肉體。肉塊。
にくんわん 肉冠「名」雄雞の頭上にある、赤き肉質のもの。ときか。鶏冠。
にくげ 肉芽「名」醫(カ)に(カ)が(肉芽)に同じ。
にくけい 肉刑「名」身體をきずつけそこなふ刑罰。即ち斬首(カ)刺(カ)刑(カ)宮刑(カ)炮烙(カ)火責(カ)水責(カ)蛇責(カ)などの類。
にくけい 肉髻「名」佛(カ)う(カ)た(カ)し(カ)や(カ)鳥する常髻喬木。高さ二三丈に達し、葉は革質、長橢圓形にして光澤あり、銳尖頭を有し、中肋及び二側脈著し、夏綠黃色の小花、聚繖花序をなして開く。原産地は交趾支那にて、帶辛甘味と一種の香氣とを有し、根及び樹皮は、乾かして強壯藥、矯臭藥、矯味藥等に供す。かんなん。からだも。
にくけい 肉桂「名」佛(カ)に(カ)め(カ)き(小葉)に同じ。
にくけい 肉桂酸「名」けい(カ)さん(桂酸)にくけい 肉桂酒「名」肉桂を和して製したる酒。
にくけい 肉桂水「名」けい(カ)さん(桂)にくけい 肉桂油「名」けい(カ)さん(桂)油に同じ。
にくげ 憎氣言「名」にくきげなる言葉。不愛想なる言語。甚(カ)にくきもの。……ただなだにといふしと思はしからぬ人。たに(カ)げ(カ)といたる」
にくげ 肉芽組織「名」醫(カ)に(カ)が(肉芽組織)に同じ。
にくげん 肉眼「名」佛(カ)五(カ)眼(カ)の一。吾人の肉體に具する眼。近前(カ)内(カ)畫。

上を見れども、遠く後外夜、下を見るを得ずと説く。にくかん(肉眼)にてんげんつう(天眼通)参照。

にくさ 肉叉【名】にきし(肉刺)に同じ。

にくさう 憎相【名】憎さげなる相好(さうごう)。

にくさうもの 憎相者【名】憎さげなる相好(さうごう)の者。太平記「面影の似たりける首二つ、猿門の木に懸けて、新田左兵衛督義貞、楠河内判官正成と書附をせられけるを、いかなるにくさう者かしたりけん、その札の側に、これはた首なり、まさしげにも書きける虚事(きこと)かなと」

にくさげ 憎さ氣(き)【名】いかにも憎く思はるさま。「古語」大和いと憎さげなる女子のあるを。十訓その類、いかにも憎さげなり。

にくさじ 肉刺【名】西洋料理にて、肉類を刺して食ふに用ふる、熊手の如き形の具。ほおく。肉叉。

にくさび 荷轄【名】和船にて、碇を舷(かた)の覆(ふ)又は部(ぶ)として、浪をよくるやうにしたもの。その上に打つ押縁(おしかり)を四五(ご)といふ。にくさみ。みくさみ。「古語」小町集「漕ぎ来ぬやあまの風間も待たずして荷くさびかける蟹の釣丸」

にくさみ 荷轄【名】前條に同じ。「古語」夫木荷くさみさくべかりける難波湯舟打つ浪のいこそ寂れね」

にくさん 肉山【名】料理の肉の多量に積上げてあるを、山に譬(たと)へていふ語。

にくさん 肉山【名】六月火雲蒸(むす)二肉山とあり。肥満した人を嘲(あざわら)うていふ語。

肉山・脯林(ほりん)【句】「帝王世紀」に「夏桀(じやく)爲(な)る肉山・脯林、殷紂(きん)爲(な)る酒池肉林」とあり。脯は乾したる肉の義、山はそのうづだかき譬、林はその數多き譬。宴席などの驕奢(きょうしゃ)なる形容。酒池・肉林。

にくざり 二句去【名】「文」去(きょ)の一連句にて、人倫居所旅體・降物・降物・天象に關する語、又は互に意味の類似せる語にて、例へば「今」と「今日」、「頃」と「間」と「折」、「車」と「馬」と「舟」の類は、二句を

隔つるに非ざれば附くべからずといふもの。語の種類によりて、三句去五句去七句去などあり。

にくじ 肉肆【名】にや(肉屋)に同じ。

にくじ憎し 惡し【形】憎むべし。かはゆからず。にくらし。にくく。見又は聞きなどするに快からず。みにくし。醜惡(しうご)なり。竹取御(みかど)かへり事さすににくからず聞えかはして。其清げなる男の、にくげなる妻(めかけ)持ちたる、鬚黑(ひげくろ)にくげなる人の、年老いたるが、物語する人の兒(こ)もてあそびたる。

憎いが餘つて不便なり。不便のあまりの憎さや。

憎し憎しは可愛(めづ)しいの裏【句】口を極めて憎しといふは、實は、却りて愛情こまやかなる證據なり。「諺語」人は、口に言ふと心に思へる所と、正反對なることあり。「諺語」憎い者に餌を與へよ【句】憎き鷹に餌を飼へ【句】に同じ。「諺語」憎い者は繼子(ついでこ)と縫目に這入(はいり)【句】た蚤(ひら)【句】世人の憎く思ふ物を並べ擧げていふ語。「諺語」憎き鷹には餌を飼へ【句】憎み嫌ふ者に對しては寧ろ憐憫(れんきん)を加へよ。憎い者に餌を與へよ。【諺語】憎き者は生きて見よ【句】「命(いのち)有つての物種」に同じ。「諺語」幸若悲用(きやくさくひよう)「命を全う持つ蟲は、蓬來(ほうらい)に逢ふと傳へたり。つらき人の果(はたけ)をば、生きて見はてたまふべし。死しては何の曲あるべき」

憎き者は生きて見よ【句】憎しと思ふ者は、殺さず、その成りゆきを見るがよし。「諺語」徘徊(はいかい)擧月(きげつ)の紅葉(もみぢ)内に惡魔(あくま)のある事も、憎い者は生きて見よ、それも、世間の不承(ふしょう)者(もの)か、それすも袖の下(そでした)に廻る子は叩かれず【句】いかに憎く思ひても、ま

つはり附く子は、慘酷(さんこく)に取扱ふこと能はず。【諺語】憎さも憎し【句】いかににくくし。在言(ざいごん)正動(せいどう)方聲(ほうせい)憎さも憎し、おどしてくれう」

にくじ惡し 接尾(けつび)易からず難しなどの意。動詞に添(そ)へて用ふ。「書きにくくし」「讀みにくくし」

にくじき 肉食【名】「佛」なまぐさき物を食ふこと。佛戒(ぶつがい)に、小乗教(じょうじやうきやう)にては、三種の淨肉(じゆんじゆ)を食ふを許したれども、大乘教(だいじやうきやう)に於ては、菩薩(ぼさつ)の慈悲心を害すとして、一切の肉を食ふを禁じたり。にくしよく。

肉食妻帯【句】「佛」肉を食し、妻を娶ること。佛教にて、僧徒に對しては、大抵これを禁ぜり。しんらん(親鸞)・ばうも(坊守)参照。

にくじ 禪鹿【名】「動」かもしか(羚羊)に同じ。

にくじつ 肉質【名】肉の部分の多き性

にくじふ 肉汁【名】鳥獸(ちゆうぶつ)の肉を煮出したる汁。そつぷ。にくしる。肉羹(にくがゆ)。

にくじやう 肉漿(にくじやう)に同じ。

にくじふばい 肉汁培養基【名】牛肉又は馬肉一斤に水一リットルを加へて煮たる後、滅菌したる、黃色透明の肉汁にペプトンと食鹽とを加へて製する培養基。

にくじみ 憎惡(にくじみ)【名】にくくむこと。にくみ。新義語(しんぎご)玉眼(ぎよく)、御氣色(ごきしき)變りて、御惡(ごご)深かりし。合那(がな)が辻(つじ)父(ちち)様の御腹立、お憎しきは御尤も」

にくくむ 憎しむ 惡しむ【動】四他(よんた)にくくむ(憎む)に同じ。天の綱鳥(てんのこうりう)先の男の無分別は恨みず一門一家、其方(そのかた)を恨み憎しむ」

にくじん 肉身【名】にたい(肉體)に同じ。【佛】しやうじん(生身)に同じ。著西(しやくせい)方(ほう)より紫雲(むらさきぐも)現(あら)ひて、堂の内へ入ると見る程に、肉身ながら見えぬ。即身成佛(じくしんぶつ)の、人にや。太平記(たいへいき)この仙人も、……金骨(きんこつ)返りて、もとの肉身と

なりしかば」

肉身の像(さう)【句】にくぐつたう(二月堂)にくじん 肉親【名】肉縁の親族。血筋の最も近き人。血族。

にくじん 肉心【名】「佛」にくたんしん(肉團心)に同じ。

にくじんぼさつ 肉身菩薩【名】「佛」肉身のままにて菩薩の位に至れる人。生身(じやうしん)の菩薩。

にくじやう 肉漿【名】獸類の生肉を壓搾して得たる汁に少量の食鹽を加へて、味を附けたるもの。肉汁。

にくじやう 肉醬【名】しじしほ(肉醬)にくくじやう 肉商【名】肉類を賣買すること、又その人。

にくじやう 肉障【名】「肉體によりて風を障(さ)ふる義。開元遺事(かいげんいじ)に「楊國忠、冬月選(えら)ぶ禪(ぜん)妻(さい)肥(ひ)大者(だいしや)三行(さんぎやう)列(りやく)于(よ)前(まへ)令(しん)遮(しや)風、謂(い)之(を)肉障(にくじやう)亦謂(またい)之(を)肉障(にくじやう)とあり。にくたんしん(肉團心)にくじん(肉親)にくじんぼさつ(肉身菩薩)参照」にくじやう 肉情【名】肉體に有する情慾。肉慾。色情(じきやう)。

にくじゆ 肉腫【名】「醫」獨(ひとり)Swollen一種の不定型なる惡性の腫瘍。初發期に施術せざれば外科的に摘出すとも、再發の要多し。

にくじゆ 肉植【名】「植」にくじやう(肉從容)の訛(ひ)ならん。きむらだけを云ふ。「下野國日光・駿河國富士地方の方言」

にくじゆばん 肉襦袢【名】にくじゆばん(肉色襦袢)の略。白色の如何に拘らず、肌(はだ)に密着するやうに作りたる襦袢。

にくじゆらう 肉從容【名】「植」きむらだけの漢名。

にくじよく 肉色【名】にくじよく(肉色)に同じ。【英】Flesh-tint或る畫家の人物描寫の上に現したる、皮膚の色澤の力。「チチャンの肉色」ルウベンスの肉色」

にくじよく 肉食【名】鳥獸などの肉を食すること。にくじき。食肉(しきじく)(肉食に對して)左傳(さく)の莊公十年の條に「肉食者

「を見よ。肉身の像(さう)【句】にくぐつたう(二月堂)にくじん 肉親【名】肉縁の親族。血筋の最も近き人。血族。

にくじん 肉心【名】「佛」にくたんしん(肉團心)に同じ。

にくじんぼさつ 肉身菩薩【名】「佛」肉身のままにて菩薩の位に至れる人。生身(じやうしん)の菩薩。

にくじやう 肉漿【名】獸類の生肉を壓搾して得たる汁に少量の食鹽を加へて、味を附けたるもの。肉汁。

にくじやう 肉醬【名】しじしほ(肉醬)にくくじやう 肉商【名】肉類を賣買すること、又その人。

にくじやう 肉障【名】「肉體によりて風を障(さ)ふる義。開元遺事(かいげんいじ)に「楊國忠、冬月選(えら)ぶ禪(ぜん)妻(さい)肥(ひ)大者(だいしや)三行(さんぎやう)列(りやく)于(よ)前(まへ)令(しん)遮(しや)風、謂(い)之(を)肉障(にくじやう)亦謂(またい)之(を)肉障(にくじやう)とあり。にくたんしん(肉團心)にくじん(肉親)にくじんぼさつ(肉身菩薩)参照」にくじやう 肉情【名】肉體に有する情慾。肉慾。色情(じきやう)。

にくじゆ 肉腫【名】「醫」獨(ひとり)Swollen一種の不定型なる惡性の腫瘍。初發期に施術せざれば外科的に摘出すとも、再發の要多し。

にくじゆ 肉植【名】「植」にくじやう(肉從容)の訛(ひ)ならん。きむらだけを云ふ。「下野國日光・駿河國富士地方の方言」

にくじゆばん 肉襦袢【名】にくじゆばん(肉色襦袢)の略。白色の如何に拘らず、肌(はだ)に密着するやうに作りたる襦袢。

にくじゆらう 肉從容【名】「植」きむらだけの漢名。

にくじよく 肉色【名】にくじよく(肉色)に同じ。【英】Flesh-tint或る畫家の人物描寫の上に現したる、皮膚の色澤の力。「チチャンの肉色」ルウベンスの肉色」

にくじよく 肉食【名】鳥獸などの肉を食すること。にくじき。食肉(しきじく)(肉食に對して)左傳(さく)の莊公十年の條に「肉食者

に對して」夫本朝たちに駒の荷ぐらを急ぎおきて聞きおぼせつる時鳥かな」
にぐら 荷庫 荷倉〔名〕荷物を入れおくくら 倉庫
にくらか 憎らか 惡らか〔貌〕憎むべきさま。にくにく、「古語」源氏「さるべき方には卑下」して、憎らかにもうけばらぬなどを、譽めぬ人なし」
にくらじ 憎らし 惡らし〔形〕にくにくほど。にくくし。にくむべし。にくききく。よくし慕はし。
にくりり 肉瘤〔名〕こぶ〔瘡〕に同じ。
にくりん 肉林〔名〕肉を懸けたる林、主に形容にいふ
肉林 酒池〔句〕「酒池・肉林」に同じ。
にくるべ〔名〕「人」しやかむにおづ〔釋迦牟尼佛〕に同じ。南無別號、釋迦牟尼佛をにくるべと訓むは、如來部なるべし」
にくるま 荷車〔名〕荷物を運ぶに用ふる車。種類多し。
にくるまぢ 荷車賃〔名〕荷車にての、貨物運搬の勢力に對する賃錢。「類」
にくるお 肉類〔名〕鳥獸などの肉の種にくるじ 土黒し〔形〕土の如く黒し。あかぐろし。「古語」記はつには肌赤らけみ、しはにはにぐろきめ糸、三栗〔六〕のその中つを」
にくろみ 煮黒味〔名〕「化」次條に同じ。
にくろみぢ 煮黒味銅〔名〕「化」次條に同じ。
にくろめ 煮黒目〔名〕「化」銅の合金の一。銅百斤に白鐵〔六〕三斤を調合して、鍍化したるもの。純粹の銅よりも黒みを帶ぶ。にぐろみ。にぐろみどう。にぐろめどう。「烏銅」
「膽礬」〔六〕緑青〔六〕梅酢〔六〕などを合せて造り、銅製の化粧金物を、にぐろめに塗るに用ふる。にぐろめいろ 煮黒目色〔名〕にぐろめに似たる色。
にくろめどう 煮黒目銅〔名〕「化」にぐろめ。煮黒目〔名〕に同じ。
にぐわ 二火〔名〕「ぐわん」〔入棺〕の略」

をゑのわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

いん

山、……祇園豆腐の二軒茶屋」目昔、江戸
深川の富岡(……)八幡宮の境内に在りて
賑ひし茶屋、風来六部集里のをた参許し「深川
の地は、……二軒茶屋」二軒に限らずして
榮え」(俗曲、色山解深川)「寒さいとはぬ道も
せや、妹春に並ぶ二軒茶屋、そもそも富ヶ
岡と申せしは」(四)「地」大阪市東區玉造
(……)の東端の地、奈良街道に當り、伊勢
参宮大和めぐり、大峰詣など送迎の場所
として賑ひしが、汽車開通以來、大いに寂
れたり。

にげんしき 二元的【義】『英 Dualistic』
事物の根元を二つの物とする見かた。(一)
元的に對して)

にげんしう 二間牢【名】徳川幕府にて、
無宿者の罪人を入れおきし牢獄、無宿牢。
にげんれりつはうていじき 二元聯立
方程式【名】「数」れりつにげんはうていじき
(聯立二元方程式)に同じ。

にげんろん 二元論【名】「哲」[英] Dualism
「理」全く對立せる二原理、例へば有(……)と
無物質と精神、神と世界、同情と利己心
等の如きを認め、兩者の關係を哲學・宗
教・倫理等の説明に資せんとする學說。
二元論多元論に對して)

にげめ 逃目・逃目・遁目【名】にげまなど
(逃眼)に同じ。「古語」漢兵にげ目をつ
かひて)

にげようい 逃用意・逃用意・遁用意【名】
にげじやく(逃支度)に同じ。最前寺殿百人
上臈かねてきやうの逃用意、臈病神の末
社殿)

にげれう 逃料・逃料・遁料【名】花骨牌
(……)にて、勝ち得る見込なくして、逃げ
又は落ちて引込まんとする時に拂ふ料。
場(……)の大小、各自の位置によりて、多少
の差あり。

にこ和【義】にこやか(和やか)【名】に同じ。
盛衰にここと笑ひて出て合ひたり」
にこ和柔【接頭】にぎ(和)に同じ。「古語」
「にこ草」にこ物」にこ風」
にこいた 二五板【名】「長さ」二尺五寸
と見ていふ」長さ二尺四寸、幅九寸、厚さ

いん

二寸五分ほどの玄蕃石。
にこい 尼公【名】「尼」ことなる貴婦人
の尊稱。あまきみ。太平記「瓜生(……)」判官
が老母の尼公」

にこちゆう 二口蟲【名】「動」ちすま
にこさ 和草【名】「植」うすはしん(薄
葉細辛)に同じとも、くはがたさ(鐵形草)
に同じとも、たんぼ(蒲公英)に同じとも、
はな(箱根草)に同じともいふ。又、單
にわ(……)に同じともいふ。萬葉「蘆
垣の中にこ草にこやかに我とあまして
人に知らぬに」新古今「箱に枯れにけり
しな足柄の箱根のねるに茂るにこ草」

にこさ 和草の【枕】「草」といふよ
り、はな(花)にかけていふ。萬葉「あしが
りの箱根のねるのにこさの花妻なれや紐
解かず寝む」(……)同音のこにかけてい
ふ。萬葉「秋風に靡く川邊のこさのこ
よかにしと思はゆるかも」

にこ毛【名】毛髪又は羽毛の、柔か
に薄く短く生えたるもの。むくげ。いも
げ。「古語」和名「毛」通古介。細弱毛也」
にこ毛【義】にこにこ。にふふ。「古語」
名義抄「輾然、ニココ」

にこり 煮凝【名】「魚」などを煮たる
汁の、寒さに凝(……)りたるもの。にこやし。
にこよし。こよしもの。延喜式「雄并伊具
比魚煮凝」(……)「鮫」などを煮たる汁の
中に、種種の具を入れて凝(……)らしたる
食品。「五山」に同じ。

にこさん 尼五山【名】あまてら(……)尼寺
にこし 和し柔し【形】「あたらあし」か
らず。にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこしね 和稻【名】にぎしね(和稻)に同
じ。にこしらへ(荷拵)【名】につくり(荷造)に同
じ。和合(……)入用の品も著到し、荷ごし
らへ出来ければ」

にこす 煮凍す【動四他】にこす(煮凍す)
に同じ。
にこす 濁す【動四他】にこす(濁らす)に
同じ。

いん

にこすみ 和炭【名】「消炭」の如く和
炭(……)に同じ。荒炭(……)に對して)「古
語」和名和炭、通古須美。今案「云三賀
知須美」

にこそう 和奏【名】國司よりの不堪田
(……)の申文(……)を、公卿の評定して奏
せしこと。(荒奏(……)に對して)「江次萬和
奏之度祝詞」

にこた 和名【名】「植」にんじん(人參)に同じ。
字「氏茂」生山其味甚苦、人能食、爾古
多。又云、加之爾介」

にこた 和名【名】「植」くはがた
さ(鐵形草)に同じ。
にこちん 和名【名】「化」烟草の
葉又は實の中に、鹽類となりて含有せる
油狀の液、無色なれども、空氣に觸るれ
ば褐色に變ず。水酒精エテール等に溶
けやすく、烟草に類する特異の臭を有し、
燒刺するがごとき味あり。烈しき毒物に
して、その二三滴にても、胃中に入る時
は、數分間に死すといふ。

にこちんちゆう 和名【名】ニコチン中毒【名】
烟草常用などの結果、身體にニコチンの
毒を受くること。前條參照。
にこちん 和名【名】ニコチン中毒【名】ニコチ
ンの中に含める毒。にこちん參照。
にこちゆう 和名【名】ニコチン中毒【名】ニコチ
ンの中に含める毒。にこちん參照。
にこちん 和名【名】ニコチン中毒【名】ニコチ
ンの中に含める毒。にこちん參照。

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

いん

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

にこく 和手・柔手【名】やはらかなる手。
にこよかなり。やはらかななり。な
ごやかなり。おだやかななり。「古語」祝詞
「大忌祭」山に住む物は、毛の和き物、毛の
荒き物」

ひきくろ 二魚類

三三

三三

三三

三三

頭足類中の一目。二箇の鰓を有し、心房及び排器も、一對を具へ、漏斗は完全なる管状をなし、墨汁囊を有し、介殼は板板状にして、肉中に没入し、若しくは全然これを缺き、觸手は八箇又は十箇ありて、各吸盤を具ふ。烏賊(イ)章魚(イ)の類、これに屬す。雙鰓類。

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】
にさんくわち。二酸化窒素(名)【化】
【英 Nitrogen dioxide】

に「代」ぬし(主)の轉訛。「東國の方言」に「助動」にきの連體形「行きにしを」。「花ぞ散りし」。

に「虹」名。「理」日光が、空中に浮遊せる無數の水滴に直射する時、水滴内に於て、反射と屈折とをなし、分散せらるるによりて生ずる虹の彩色帯。實は圓形なれども、その一半は、地平線下に隠るるに現れ、外環の赤色より、橙、黄、緑、青、藍の順序に排列し、内環の紫色に終る。時として、普通の虹の外側に、別に、色一層薄くして、その順序全く反對なる虹の生ずることあり。これ日光が、水滴中に二回反射して生ずる現象にて、前者を第一の虹、後者を第二の虹といふ。蟠蜺(ひこ)。

虹立つ。「句」虹あらはる。に「ふく」。夫去雨はるる峰の浮雲うき散りて虹立ちわたる冬山里。

虹の梁(はし)。「句」こうりやう(虹梁)の直譯。太平聖鳳の夢(か)天に翔り、虹の梁雲に跨ゆ。

虹の帯。「句」虹を帯に擬へていふ語。善の門松霞の袂、虹の帯、雲の上著もゆりかけて。

虹の如し。「句」意氣氣微の盛んなる形容。「氣を吐くこと、虹の如し」。虹ふく。「句」虹立つに同じ。出處案「雨はれて入日の空に虹ふけば肌身寒しも谷の夕風」。

に「二」字「名」文字の數二つ。「多」は二つの漢字にて記すよりいふ「じつみや(實名)に同じ」。

二字の言葉。「句」きのふはけふの物語に「肥前國神崎の郷に、南無の二字を額に打ちたる比丘尼寺あり、すなはち二字寺といふ」とあり。「南無(なむ)の二字。山峯響ありて頗はん國へ往くべくは二字のこばに重ねたるかな」。

二字を首に懸く。「句」二字とは、「武士」の二字なるべし。生命にかけて、武士の體面を汚さぬやうにす。女殺油地、且那より御扶持を蒙り、二字を首に懸けたる森右衛門。

二字を獻(けん)する。「句」師弟の約を結ぶしるしとして、名簿(なぼ)に實名を書きて獻る。十箇二字を、僧正に奉りて「二字を呈す」。「句」前條に同じ。

に「二」時「名」二時の次、三時の前な時刻。午前のと午後のとあり。「午前と午後との、日二回の食時(昔は、一日二食なりしなり)。仍食物(じき)枯れたる賤(しん)が身は、二時の食(け)さへ下されかね」。

に「植」にんじん(人參)を云ふ。「義内の方言」。

に「あかり」西明「名」日没後、しばし西の空のあかりのこと。西日のさすこと。西の「あかりの二階窓」。

に「あさね」西浅井「名」近江國の舊郡の一。明治二十九年伊香(い)郡に併せらる。「より吹く風」。

に「あなせ」西あなせ「名」戌(い)の方角に「あふみ」西近江「名」近江國の琵琶湖以西の地(東近江に對して)。義經聖荒乳(せい)の中山を馳せ越して、西近江にかりて、大津の浦に著きて、狂言廳坊「西近江から東近江まで、ちと用あつて参りまする愚僧てござる」。

に「あまね」西周「名」人學者。津和野藩士時義の長子。漢學蘭學英學を修め、幕末、藩書取調所教授に任ぜらる。又、和蘭留學を命ぜられて政治法律を修め、歸朝後、開成所教授となる。維新の際、將軍慶喜に召され、明治以後、沼津兵學校教頭、兵部省出仕、陸軍大丞學士會院長、元老院議員に歴任し、貴族院議員に勅選せられ、二十七年没す。年六十九。

に「あらね」西新井「名」武藏國南足立(あ)郡に在る村。千住(せん)町の西北一里餘、新義真言宗に屬する總持寺ありて、西新井大師堂と呼ばれ、東京市民の尊崇深し。

に「いばらき」西茨城「名」地。常陸國十一郡の一。郡役所を笠間(か)町に置く。に「う二周」名。支那の東周と西周と。支那の戰國時代に、周王の子孫の、東西に分れしもの。

に「うけ」西受「名」家屋の一部の、西方に向きである所。間取の、西日を受くるむき。にしむき。西面。又、飛脚(ひやく)西受の竹連子、反故障子を細目に明けて」。

に「うすき」西白井「名」地。日向國八郡の一。郡役所を高千穂村に置く。に「うら」西裏「名」或建物の西方に當る背後。保正(たか)爲朝、寶莊殿院の西裏に返し合せて、火出づる程ぞ戦うたる」。

に「うら」西浦「名」地。常陸國霞ヶ浦の西北部。別稱、西浦湖。河内國南海内郡の村。大字西浦に、清寧天皇の坂門原(さか)陵あり。相模國三浦郡の西側、相模灘に面する一帯の地。四伊豆國田方郡の村。風景甚だよし。に「うら」西浦湖「名」地。前條に同じ。

に「うら」西宇和「名」地。伊豫國十二郡の一。郡役所を八幡濱(や)町に置く。に「おいたま」西置賜「名」地。羽前國十郡の一。郡役所を長井町に置く。に「おぼた」西大谷「名」京都東山の西麓鳥部野(とり)に在る觀靈(くわん)の廟所。親鸞の寂するや、鳥部野に火化し、骨を今の東大谷の地に納めしを、本願寺第十二世准如の時、今の地に移す。西本願寺に屬す。に「おほひら」西大平「名」地。今の三河國額田(が)郡男川(お)村大字大平の舊稱。岡崎市の東南一里。永祿大正の頃は本多作左衛門の居邑、近世は大岡忠相(お)の領。明治の初年設置の縣の一。ぬかだ(額田)に參照。

に「おもて」西面「名」家の、西に向ひたる方。其西おもてに出て、物など聞けるほどに。源(げん)西おもての格子、そそき上げて。次條の略。宇西おもて。北おもての者ども。近(きん)近う仕うまつる上達部(じやう)殿上人、まいて、北面の上臈(じやう)西おもてなどいふも。同じ。

西面の武士「西面(めん)の武士」に「おもて」西表島「名」地。いりおもて(入表島)に同じ。

に「しか」助動にきの已然形。「行きにし

かば」花こそ咲きにしか」。

に「がう」のたき西河瀧「名」地。大和國吉野川の上流にある瀧。龍曲(りゆう)二人靜(しん)の宮瀧、西河の瀧」。

に「がしら」西頭「名」馬などの、頭を西の方に向けをること。太平記、敵を相待ちて、西頭に馬をぞ控へたる」持統天皇歌詠法「馬を早めて、西頭に歩ます」。

に「かすが」西春日井「名」地。尾張國九郡の一。郡役所を枇杷島町に置く。に「かせ」西風「名」西方より吹き来る風。にし。しけ。西風(せい)。

に「がた」虹形「名」虹の如き形。半圓形。天壽記「弓と矢番ひ、虹形に引き絞り」。

に「かつ」西葛飾「名」地。下總國の舊郡の一。下野武藏兩國に接したる小郡なりしが、明治二十九年猿島(さ)郡に合併す。

に「かは」西川「名」藤間(ふ)花柳(は)と共に、師匠の家柄の一。元祖は仙造といひ、人形遣西川十三郎の族なりしが、五代扇造に至りて家絶ゆ。又、三代目扇造の門人に、花柳壽輔といひ、西川光太郎と改め、弘化四年花柳の一派を立てたり。かま(藤間)はな(花柳)參照。

に「かは」西川「名」地。京都の西方に在るよりいふ。山城國桂川の別稱(東川(が)に對して)。源氏、西川より奉れる鮎、近き川のいしぶしやうの物、御前にて調じまゐらす」。

に「がは」西側「名」西方の側面。西のに「かはすけ」西川祐信「名」人。浮世繪師。初名は祐助、通稱は右京。文華堂自傳齋と號す。京都の人。狩野永納、土佐光祐に學び、遂に浮世繪師となる。筆致婉柔、最も宮女の圖、俳優の側顔を巧みにし、又、花鳥をも善くす。その畫、八文字屋本及び版刻せる繪本の插繪に多し。寶曆十二年歿す。年五十七。

に「かはは」西川派「名」美。次條に同じ。に「かはりう」西川流「名」美。浮世繪の一派。西川祐信を祖とするもの。西川派。

に「わ」ろれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねねにな とてつちた そせすしそ こけくきか おえういあ

にしき

にしきかんばら 西蒲原〔名〕〔地〕越後國十五郡の一。郡役所を卷〔名〕町に置く。にしきかも 西加茂〔名〕〔地〕三河國十郡の一。郡役所を舉母〔名〕町に置く。にしきから 螺殼〔名〕螺の貝殻。羅羅螺の螺殼を懷中に歸りぬ。油螺螺殼を蝸牛や親と思ふらん。

にしき錦〔名〕〔丹敷の義〕丹は赤色、敷は排列の義、即ち赤色を交へ綴る意にていふ。但し後には、赤色に限らざるに至れり。二種以上の染絲を用ひて、模様を織り出だしたる、地質厚く、美麗なる絹布。赤地の錦「青地の錦」「紫地の錦」若風、柿地の錦の守袋。美しき物の簪。「紅葉の錦」古今見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける。

錦暗し〔名〕〔古今集に〕見る人も無くて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」とあるに本づく。紅葉を、只一人にて寂し観る形容。源氏「紅葉はひとり見はるるに、錦暗し思ひたまふればなん」。錦の赤草〔名〕〔赤地に唐草などの模様を白く染出したる草。錦の模（シ）〕〔名〕錦を用ひて作れる足衣。古、禮服の時用ひしもの。錦の旅〔名〕錦を著飾りての旅。本朝三賢馬我も昔は、めん物、著つつ馴れにし縁あれば、今日の錦の旅をしぞ思ふ。

錦の波〔名〕紅葉など散り浮びて、錦の如く、美しく見ゆる波。大鷲鷲磯は吉野の花となり、海は錦の波澄る立田川とぞ變じける。錦の帽子〔名〕鷹飼〔名〕装束の一。錦を用ひて作れる帽子。定家卿鷹三首百狩人の錦のばうし色に鷹のしらみをあらひてぞ見る。錦の袴著て故郷に歸る〔名〕「錦を著て故郷に歸る」に同じ。〔諺語〕盛衰記「院の御所までも、さる者ありと知らしめされたるは、親しき奴原〔名〕が面目に非ずや。これこそ、錦の袴著て、故郷

に歸りたるにはあれ」錦の袋に葉を包む〔名〕外親は立派にて内容の見すばらしき簪。〔諺語〕錦の御旗〔名〕〔赤地の錦にて作り、その表面に、日月の形を、金銀にて打附け、又は描きたる旗。鎌倉時代以後の制に依り、古、節刀を賜ひしに代へて官軍の武將に賜ひしもの。錦旗。〕錦を飾る〔名〕次條に同じ。〔諺語〕錦を著て歸る〔名〕「錦を著て故郷に歸る」に同じ。〔諺語〕錦を著て郷に歸る〔名〕〔南史の劉之遴傳に〕令卿衣錦還郷、郷里榮榮之理上、同書の柳慶遠傳に「爲雍州刺史、帝錢三千新亭、謂曰、卿衣錦還郷、朕無三顧之憂矣」とあり。功成り、身榮えて、郷里に歸る。錦衣。故郷に歸る。故郷に錦を飾る。〔諺語〕錦を著て郷に歸る〔名〕〔中唐の第三十三章に〕衣錦尚綢、惡其文之著也」とあるに本づく。詩經の衛風にも、「碩人其風衣錦衣」とあり。花やかに目立つて遊くる簪。〔諺語〕錦を著て故郷に歸る〔名〕「錦を著て郷に歸る」に同じ。〔諺語〕聖運遂に開けば、錦を著て、故郷へ歸り知らぬ里見ぬ浦の旅宿をも語り。錦を著て畫遊ぶ〔名〕〔唐書の張士貴傳に〕從征伐有功、賜爵新野縣公、又從平洛、授號州刺史、帝曰、願令卿衣錦畫遊耳」とあるに本づく。次條に同じ。〔諺語〕錦を著て畫行く〔名〕〔三國志中の魏志に〕張既爲雍州刺史、太祖謂既曰、還君本州、可謂衣錦畫行也、又、北史の毛昫傳に「還字鴻遠、北地三原人也。第鴻賓、明帝改北地郡爲雍州、鴻賓爲刺史、詔曰、此以畫錦爲榮」とあり。功成り、身榮えて、衆人に示す簪。〔諺語〕錦を著て夜に行く〔名〕〔漢書の項羽紀に〕富貴不歸、如衣錦夜行」とあるに本づく。功成り、身榮えて、郷里

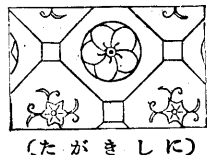
にしき

に知られざる簪、袖を著て、夜行く。〔夜〕の錦参照。〔諺語〕貧我人富みて、故郷に歸らざるは、錦を著て、夜行くが如しといふ。錦を故郷に飾る〔名〕「錦を著て故郷に歸る」に同じ。〔諺語〕にひき耳識〔名〕〔佛六識の一。耳根。〕〔二〕至規〔名〕〔天に〕にせん〔二〕至線に同じ。〔諺語〕にひき荷敷〔名〕和船の敷板の兩側なる外板。河船の荷尻といひ、海船のをはてといふ。加敷。根柢。にひき二食〔名〕一日の中に、食事を二度すること。

にひきうを 錦魚〔名〕〔動〕硬骨類に屬する魚。暖地の近海に産し、體形狹長、鰓蓋より尾部に達する黒條及び眼より吻と鰓蓋とに達せる條あり。口咽には着色の點あり、奇鱗は紫色を呈して、その縁は黃色、その他、體には種種の條線ありて、彩色美しけれど、肉は美味ならず。にひきがた 錦形〔名〕模様の。下圖を見よ。にひきかは 錦草 錦草〔名〕紫地に、白く紋を出したる染草。おもてがは。

にひきかは 錦川〔名〕〔地〕周防國岩國の川の異稱。きんたばし 錦帶橋 參照にひきかひ 錦目〔名〕〔動〕穀に美しき模様ある貝。貝類に屬する軟體動物。殻は橢圓に近く、長徑三寸餘、十四本の隆起線ありて、各線上に細かき鱗板を有し、耳は前後形を異にし、後方は短小にして不等邊三角形をなす。色彩美麗にして、紅色又は紫色に白斑あるもの、褐色又は紅色に白色又は褐色の條線又は斑紋あるものなど、種種あり。我國近海に産し、肉は食用に供せらる。にひきかんすぬ 錦甘遂〔名〕〔植〕なつとらひ〔夏燈臺〕に同じ。

にひきき 錦木〔名〕〔木〕昔、奥州地方にて、男が逢はんと思ふ女の家の方口に立つる習なりし木。五色に彩り、長さ一尺ほどなるもの。女同意する時は、直にこれを取り入れ、然らざるも、次次加へ立てて千束に及ぶ時は、志深きを知り、取り入れたて進ひたりといふ。にひきか〔名〕〔參照〕同花思ひかね今日立ててむる錦木の千束。も待たて進ふよしもむる。〔諺語〕の由來を作れるもの。古名、錦家。〔植〕衛矛科に屬する落葉灌木。各地の山野に自生し、高さ一丈に達し、幹枝の面には、褐色にしてコルク質なる翅狀の隆起縱走。葉は對生し、鋭頭にして鋸齒あり。花は小形、黄綠色にして、初夏、柔嫩花序をなして開き、果實は蒴果にして、深く四分し、秋に至りて熟し、赤色の假種皮を有する種子露出。秋季、美麗に紅葉するを以て觀賞用とし、材は質や硬く、小細工用に適し、樹皮は製紙の原料となり、嫩葉は食用となる。くそまゆみ。ごしき。こまゆみ。まゆみ。やにひきやはすのき。〔衛矛〕にひききくわ 衛矛科〔名〕〔植〕顯花植物。被子類雙子葉門・離瓣花區に屬する一科。喬木又は灌木。衛矛の外、黑葉、蔓梅擬〔名〕木荔枝〔名〕など、これに屬す。にひききさ 錦草〔名〕〔植〕おもむき 槭樹に同じ。〔古語〕藟玉、錦草、紅葉。立田山松を立てたる錦きしぐれてまはる山の横雲。にひききさ〔名〕〔錦草〕に同じ。にひききひや 馬齒莧に同じ。にひききいさう 二色雞頭〔名〕〔植〕はひさう〔葉雞頭〕に同じ。にひききこうちの 錦小路殿〔名〕〔人〕あしかたのし〔足利直義〕の異稱。にひききころも 錦衣〔名〕〔植〕唇形科に屬する草。山野の陰地に自生し、莖は高さ三四寸に達し、葉は對生し、卵形にして紫色を帯び、葉脈粗く、花は唇形にして小く、紫色を呈す。きんもんさう。にしきさう。



(たがきしに)

にしき

にひきき 錦木〔名〕〔木〕昔、奥州地方にて、男が逢はんと思ふ女の家の方口に立つる習なりし木。五色に彩り、長さ一尺ほどなるもの。女同意する時は、直にこれを取り入れ、然らざるも、次次加へ立てて千束に及ぶ時は、志深きを知り、取り入れたて進ひたりといふ。にひきか〔名〕〔參照〕同花思ひかね今日立ててむる錦木の千束。も待たて進ふよしもむる。〔諺語〕の由來を作れるもの。古名、錦家。〔植〕衛矛科に屬する落葉灌木。各地の山野に自生し、高さ一丈に達し、幹枝の面には、褐色にしてコルク質なる翅狀の隆起縱走。葉は對生し、鋭頭にして鋸齒あり。花は小形、黄綠色にして、初夏、柔嫩花序をなして開き、果實は蒴果にして、深く四分し、秋に至りて熟し、赤色の假種皮を有する種子露出。秋季、美麗に紅葉するを以て觀賞用とし、材は質や硬く、小細工用に適し、樹皮は製紙の原料となり、嫩葉は食用となる。くそまゆみ。ごしき。こまゆみ。まゆみ。やにひきやはすのき。〔衛矛〕にひききくわ 衛矛科〔名〕〔植〕顯花植物。被子類雙子葉門・離瓣花區に屬する一科。喬木又は灌木。衛矛の外、黑葉、蔓梅擬〔名〕木荔枝〔名〕など、これに屬す。にひききさ 錦草〔名〕〔植〕おもむき 槭樹に同じ。〔古語〕藟玉、錦草、紅葉。立田山松を立てたる錦きしぐれてまはる山の横雲。にひききさ〔名〕〔錦草〕に同じ。にひききひや 馬齒莧に同じ。にひききいさう 二色雞頭〔名〕〔植〕はひさう〔葉雞頭〕に同じ。にひききこうちの 錦小路殿〔名〕〔人〕あしかたのし〔足利直義〕の異稱。にひききころも 錦衣〔名〕〔植〕唇形科に屬する草。山野の陰地に自生し、莖は高さ三四寸に達し、葉は對生し、卵形にして紫色を帯び、葉脈粗く、花は唇形にして小く、紫色を呈す。きんもんさう。にしきさう。

にじぎさう 錦草【名】「植」大戟科に属する草。山野庭園に自生し、茎は地に横臥し、よく分枝し、葉は対生し、楕圓形にして、よく夏秋の候、各葉腋に、黄褐色の花を開く。いちぐさ。ちちぐさ。しきぐさ。さかきかづら。【地錦】前條に同じ。

にじぎさう 二色草【名】「植」はるう(葉雞頭)に同じ。

にじぎさう 錦血【名】錦手の血。會食會積山御寮その日の御賞瓶……二膳白血受けて召されたり。御相伴には、五郎丸、赤繪吳洲手(三)の錦血、下したまはつて、これぞ喰ふ。【に同じ】。

にじぎさう 西北【名】西と北との間なる方角。いぬ。西北。北西。

にじぎさう 錦大根【名】「植」あかぢさ(赤高菹)に同じ。

にじぎさう 錦鯛【名】「動」硬骨類に属する魚。全體紅色を呈し、形、鯛に似て、眼甚だ大きく、鱗も大きく、鰓蓋に長き棘を具ふ。我國各地の近海に産す。きんだひ。きんときだひ。

にじぎさう 錦塚【名】昔、奥州南部領の封境今の陸中國鹿角(三)郡の内の邊に在りきといふ古墳。千束(三)の錦木を立して男女の、未だ婚を成さずして死にしを、里人の哀みて合葬せし所といふ。【に同じ】。

にじぎさう 錦鳥【名】「植」常春藤(三)の葉の色、紅・白相まじれるもの。

にじぎさう 錦包【名】次條の略。

にじぎさう 錦包の太刀【名】柄も、鞘も、共に錦に包める太刀。

にじぎさう 丹敷戸畔【名】「人」紀伊國荒坂津(三)の酋長、神武天皇東征の際、王命に抗せしため誅せられたり。にじきのうら錦浦参照。

にじぎさう 錦島【名】「動」きんけい(錦雞)に同じ。【に同じ】。

にじぎさう 錦流【名】流鼻鼻繡頂【名】馬の毛色の一。額より鼻の上にかけて、薄色の毛あるもの。

にじぎさう 錦塗【名】津輕塗のごとく、數種の色漆を不規則に蒔き散し、更に雲鶴千鳥桐鳳凰等の模様を置きたる漆器。陸奥國弘前(三)にて製造す。近代の産出に係る。津輕塗(三)。

にじぎさう 錦浦【名】「地」紀伊國北牟婁(三)郡にある海濱。西牟婁郡にも、串本(三)浦に近く、二色(三)浦あり、又、丹敷戸畔(三)の、神武天皇に誅戮せられ荒坂津(三)の故址なりとの説あり、南牟婁郡荒坂村二木島(三)浦の名も、音相近きより見るに、丹敷の名は廣く熊野浦一帯に通用せしものかとも思はる。後拾遺「名」に高き錦の浦に來て見ればかづかぬあまはすくなかりけり。【見よ】。

にじぎさう 二色浦【名】「地」前條をにじぎのうらち錦小路【名】姓氏の一。古の醫術の家なる丹波氏より出づ。家業を傳へて朝廷に仕へ、侍醫・典藥頭・施藥院使(三)に補任せらるるを例としたり。明治維新後、子爵を授けらる。

にじぎさう 錦島【名】「地」伊勢國にある島。紅葉の名所。山家集・波にしく紅葉の色を添ふゆゑに錦の島といふにやあるらん。

にじぎさう 錦濱【名】「地」にじきのうら(錦浦)に同じ。諸曲(安達原)分けゆく末は、紀の路がた、鰐崎の浦をさし過ぎて、錦の濱のりををりは。【に同じ】。

にじぎさう 錦の御旗【名】「にじぎさう」の條下を見よ。

にじぎさう 錦文流【名】「人」淨瑠璃及び淨世草子の作者。大阪の僧・本名、詳かならず。井原西鶴に俳諧を學び、俳名を錦頂子といふ。元祿・寶永頃の人。座敷(三)社邊に住し、淨瑠璃作者としては脚色秀てたるにはあらねど、櫻痴西吟・西澤一風と共に、古代文者三傑と稱せらる。

にじぎさう 錦部【名】「地」近江國にある紅葉の名所。夫木、いろいろの木木のみちを見渡せばはか織りくるにしきべの里。【に同じ】。

にじぎさう 錦蛇【名】「動」爬蟲類中、蛇類の一種。熱帶地方に産す。長さ二三丈。羊牛などを締め殺して吞む。全身、多くは黒色又は褐色を呈し、錦の如き斑紋あり。肛門の兩側に、後肢の痕跡を存す。その鱗は藥用にすといふ。

にじぎさう 錦蛇【名】「動」前條に同じ。【古語】和名、蛇。文字集略云、蛇、通之岐倍美。地文如、連錢錦也。【に同じ】。

にじぎさう 錦豆【名】「植」くろくわ(黒豆)に同じ。【に同じ】。

にじぎさう 錦鏡【名】圓筒の中に、大さ互に同じき長方形の硝子板を、三角に組み立て、別に、その筒の中に、種種に彩色せる硝子の小片を入れたる玩具。筒を廻しながら、一端より覗く時は、その小片、美しき六稜形をなして見ゆ。ひやくいめがね。【に同じ】。

にじぎさう 錦様【名】にじぎ(錦手)ににじぎやき錦焼【名】本焼にしたる上に、人物山水花鳥草木などを描きて、更に焼きたる陶器。

にじぎさう 錦製【名】表に錦を張り附けたる、木製の靴。

にじぎさう 錦句【名】「文」俳句の切字(三)は、一句の中に一つあるを普通とするものなるに、特に二つあること。例へば芭蕉の「君火焚けよき物見せん雪まるげ」などの類。二段切。

にじぎさう 錦繪【名】「錦の如く美し」といへる語。徳川時代に武者・役者の似顔などを木版摺にしたる、彩色美麗なる繪。多くは淨世繪師の手に成り、もと江戸の製産なれば、江戸繪又は東(三)錦繪ともいひ、又、初、一枚摺なりしかば、一枚繪ともいひしが、後には二三枚摺きたるもの多く出づるに至れり。

にじぎさう 二文字口【名】相撲場(三)の内土俵の左方と右方とに、各その二俵づつを除(三)けて作りたる入口。

にじぎさう 西國【名】西方にある國。西國(三)。土佐・西國になれど、甲斐歌などうたふ。

にじぎさう 西國東【名】「地」豊後國十郡の一。郡役所を高田町に置く。

にじぎさう 西頸城【名】「地」越後國十五郡の一。郡役所を糸魚川(三)町に置く。

にじぎさう 西群馬【名】「地」上野國の舊郡の一。明治二十九年片岡郡と合せて、群馬郡となる。

にじぎさう 西風【名】にしぜ(西風)に同じ。【に同じ】。

にじぎさう 二次元【名】「數」英 Quadratic (二次) 相異なる二つの未知數の積。例へば、 $x^2 + 5x + 6$ などの類。

にじぎさう 二次コイル【名】「理」英 Secondary coil 第二コイルに同じ。

三月の貨幣法に基きて發行したる、二十錢の補助銀貨、二十錢銀貨。
にじっせんさん 二十錢札「名」めいしつうは(明治通寶)を見よ。

にじつちやうだて 二十挺立「名」小早(の、船二十挺を設けて漕ぐもの。

にじつめ 西詰西爪「名」西の橋詰(の、盛衰宮の兵(の)は、橋の西爪にて、きし詰め、きし詰め、さんざんに射ければ、面を向けがたし。平家の軍兵は、東の爪に轉(を)を並べて。

にじつて「助」にて同じ。「これは、犬にして、猫に非ず」萬葉からころも堀に取りつき泣く子らをおきてぞ來(の)ぬやおもなしにして。

にじつひらひら 西朝集堂「名」てうしふだう(朝集堂)を見よ。

にじつてん 二至點「名」(天)夏至の點と冬至(の)點と。(二分點に對して)

にじつち 二次電池「名」理「英」secondary battery 他より電流を通じて電氣分解を起さしめたる上、普通の電池と同様に用ふるより、二次といふ。ちてんち(蓄電池)に同じ。一次電池に對して。

にじどち 復詰「名」(動)西(の)何方(の)の義。鱗翅類に屬する昆蟲の蛹(の)。即ち地蟲(の)の土中に變態せるもの。多くは紡錘形にして、褐色を帯び、大さ一二寸、形、蠶の蛹に異ならず。指にてつまみて、「西はどち、東はどち」といへば、腰より上の方を左右に振動して、東西を答ふるが如く見ゆるより、小兒の玩ぶ所となる。にしはどち。にしやどち。にふだうし。にしむけ。

にじとなみ 西蠟波「名」(地)越中國八郡の一。郡役所を石動(の)町に置く。

にじなり 西成「名」(地)攝津國の舊郡の一。郡役所を大阪市北區に置きしが、大正十四年大阪市の一部となり、西成區といふ。

にじに「鏡」しむじみ(染染)に同じ。伊達娘無排馬子「この世の名残、今一度、顔がにしに」と見たいはいのと、身を悶へ。

にじのいち 西市「名」(地)奈良・平安兩京の、西半即ち右京(の)の市。萬葉西の市にただひとり出て眼並(の)べず買へりし絹し商(の)じりかも。

にじのいちのつかさ 西市司「名」いちのつかさ市司を見よ。

にじのうち 西内「名」次條の略。

にじのうちがみ 西内紙「名」初、常陸國久慈(の)郡諸富(の)村大字西之内に産せし米粉を混じて製する堅一尺一寸、横一尺六寸一分ありて日本紙美濃紙よりも肉厚くして、質強く、四十枚を一帖とし、油紙・合羽の地紙、又、提灯傘などに張るに用ふ。初は常陸國の産物なりしが、製造地次第に擴張し、原料、製法等にも變化を生じたり。にしのうち。

にじのうみ 西海道「名」(地)さいかいだう(西海道)の古稱。

にじのおほてら 西大寺「名」さいだいじ(西大寺)に同じ。諸曲(の)龍田(の)西の大寺よそに見て、はや暮過ぎし秋篠(の)や。

にじのさやう 西京「名」(地)うらまち(右京)に同じ。世、西の京の荒れたりつることなど宣ひて。

にじのくに 西の國「名」にし(西)の條下にし(の)しま 西嶋西島「名」(地)隱岐國島前(の)三太島の一。中島の西にあり。周圍、二十里二十六町。中央くびれて、幅僅かに二町の地塊を成し、船越(の)の名あり。浦郷(の)・美田(の)・別府・宇賀の四村に分たれ、知夫里(の)島と併せて、知夫(の)郡を成す。

にじのたい 西の對「名」にし(西)の條下にし(の)たう 西野黨「名」武藏の七黨の一。今の大里郡長井村の一部なる西野の地に土著せしものと云ふ。長井は齋藤實盛に緣ありと傳へらるる處なり。

にじのちがは 西父川「名」(地)石狩國石狩川の別稱。下を見よ。

にじのちん 西の陣「名」にし(西)の條下にし(の)さうん 西洞院「名」(地)京都の南北の通路の一。盛衰五條渡(の)。西洞院在地の人。曰「京都の西洞院通に邸宅ありしよりいふ」姓氏の一。本姓は平氏。桓武天皇の皇孫高棟(の)王の第十七世の孫なる左大辨・正三位行高の子行時を祖とす。明治維新後子爵を授けらる。支族に平松・長谷(の)・交野(の)・石井の四氏あり。

にじのさうん 西洞院「名」(地)京都の南北の通路の一。盛衰五條渡(の)。西洞院在地の人。曰「京都の西洞院通に邸宅ありしよりいふ」姓氏の一。本姓は平氏。桓武天皇の皇孫高棟(の)王の第十七世の孫なる左大辨・正三位行高の子行時を祖とす。明治維新後子爵を授けらる。支族に平松・長谷(の)・交野(の)・石井の四氏あり。

にじのさうんがみ 西洞院紙「名」『大阪の人、紀伊國屋亦右衛門が、京都の西洞院にて漕(を)かせて賣りはじめしによりていふ』あさきさかみ(淺草紙)を云ふ。『京都の語』

にじのさうんがみ 西能登呂岬「名」(地)樺太(の)島の最南端を成せる岬。中知床(の)岬と亞庭(の)灣を擁し、宗谷岬と相對して、宗谷灣を挟む。

にじのさうんがみ 西洞院「名」(地)にしのさうん(西洞院)の古稱。

にじのはがは 西母川「名」(地)天鹽(の)國天鹽川の別稱。

にじのまつばら 虹松原「名」(地)虹の如く彎曲せるによりて名づく。肥前國東松浦郡に在る松原。満島(の)村とその東に續く濱崎村との間、約二里に涉り、領巾(の)山を貫ひ、唐津灣に臨み、風景絶佳なり。一名、二里の松原。

にじのまる 西丸「名」にしまる(西丸)に同じ。一代(の)丸の内、……日影も西の丸に傾くに驚き。

にじのみち 西道「名」(地)さいかいだう(西海道)に同じ。古語。西道、ニシノミチ。

にじのみや 西宮「名」(地)攝津國武庫郡に在る町。西國街道に當り、大阪・神戸の中間に位し、酒造業盛なり。

にじのみや 西宮「名」(地)次條を見よ。

にじのみや 西都「名」(地)にのきや(西京)に同じ。寶皇少女(の)らに男立ち添ひ蹈みならす西のみやこはよろづ代の宮。

にじのみや 西宮神社「名」攝津國武庫郡西宮町字市場に鎮座せる神社。祭神は西宮大神・天照大神・大國主尊・素戔鳴尊(の)尊。俗に西宮の惠比壽(を)と稱し、福徳の神として、中世以降崇敬甚だ厚く、殊に商家に敬ばる。えびすまつり(惠比壽祭)參照。

にじのみや 西宮大神宮「名」前條に同じ。

にじのみや 西宮渡海「名」和船の一種。兵庫渡海よりも小くして、屋形(の)も矢倉盛(の)も無きもの。

にじのみやのおとど 西宮大臣「名」(人)みなもとたかあきら(源高明)を見よ。さいきうき(西宮記)參照。

にじのおんりう 西院流「名」(佛)仁和寺の三流を見よ。岡(の)に同じ。

にじのをか 西岡「名」(地)ながをか(長にひは 西派「名」昔の大阪の淨瑠璃の、豊竹座に屬せし一派(東派に對して)。

にじは (アイヌ語 Kshin) 代 第二人稱。あなた。君。『北海道土人の語』

にじはうちう 西方丈「名」西方にある方丈。(東方丈に對して)。

にじはうちう 二次方程式「名」數に「英」Quadratic equation 未知數の最高次數が二次なる方程式。例へば、 $ax^2 + bx + c = 0$ 又は $ax^2 + by + cz = 0$ などの類。

にじはた 西端「名」(地)三河國碧海(の)郡にありし村。本多氏の舊藩地。明治三十九年明治村に入る。明治の初年設置の縣の一。ぬかた(額田)參照。

にじはた 西端「名」西側のはた。鶴巻古川の西はたを。

にじはちう 西八條「名」(地)京都八條通の内、朱雀大路以西。平賀入道相國の西八條の邸に參りて。次條の略。

にじはちう 西八條殿「名」朱雀大路以西に在りて、八條通に面したる邸宅の意。平清盛の邸宅。京都の八條坊門の南八條の北、大宮の西、壬生(の)の東、即ち今の下京區東寺の北なる大内村の邊にありしもの。一名、八條殿。はちてんじ。

にじはちう 西八條殿「名」朱雀大路以西に在りて、八條通に面したる邸宅の意。平清盛の邸宅。京都の八條坊門の南八條の北、大宮の西、壬生(の)の東、即ち今の下京區東寺の北なる大内村の邊にありしもの。一名、八條殿。はちてんじ。

じふし

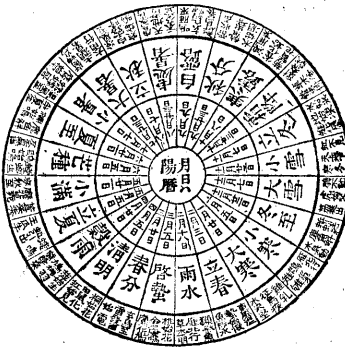
じふし

じふし

じふし

じふし

三・金剛童子如意輪樂天衣(二)觀音清雨經(三)安鎮延命四天王北斗七星十二天・水天・星供(四)冥通供(五)聖天供(六)四天王供・千手供
にじふさんや二十三日夜「名」陰曆十月二十三日の夜、この夜、月待を行ふ。
にじふさんやまち二十三日夜待「名」二十三日の月待。
にじふしから二十四孝「名」(人)支那にて、孝行を以て著名なる二十四人、即ち虞舜・漢の文帝・曾參(三)・閔損・仲由・董永・刻子(二)・江革・陸績・唐夫人・吳猛・王祥・郭巨・楊香・朱壽昌・鹿野(二)・老萊子・蔡順・黃香・姜詩・王褒(二)・子蘭・孟宗・黃庭堅・元の郭居業の遺といふ。荒唐無稽の俗話なれど、我國にても、江戸時代、節用集大雜書に、圖入として刊行してより、世上に流布し、中には、仲由と江革とを除き、張孝張禮の二兄弟と田眞・田廣・田慶の三人兄弟とを以てせるもあり。ほんとうにじふさう(本朝二十不孝)参照。
にじふしき二十四氣「名」舊曆にて、五日を一候とし、三候を一氣とし、一年を、立春・雨水・驚蟄・春分・清明・穀雨(以上春)・立夏・小滿・芒種(二)・夏至(二)・小暑・大暑



(き し ふ に)

廣大なる地域の何れの部分にも適用せらるべきには非ず。従ひて、我國には、そのまは用ひがたきものなり。ほつせつ(八節)じふさう(十六節)及び二十四番の花信風参照。二十四氣節、二十四節、二十四時。
にじふしきせつ二十四氣節「名」前條にじふしに二十四史「名」(書)支那の二十史の内、唐書を新舊に分ち、これに舊五代史を加へて呼ぶもの。清の乾隆年間に定めし所なり。
にじふしじふ二十四時「名」にじふしき(二十四氣)に同じ。
にじふしじふ二十四節「名」にじふしき(二十四氣)に同じ。
にじふしじふく二十四宿「名」印度にて、星宿を二十七に分ちたるもの。支那の二十八宿に比して、牛宿を闕く。
にじふしじふく二十四挺立「名」小早(二)の、繪の數二十四挺を設けて漕ぐもの。にしろくちやう。
にじふしは二十四輩「名」(人)にじふし(二十四輩)を見よ。
にじふしは二十四番「名」次條を見よ。
にじふしは二十四番花信風「名」次條に同じ。

二十四番の花信風「名」次條に同じ。
二十四番の花の開くを知らする風の義。二十四氣の中、小寒より穀雨までの八氣節を、各氣節を三候づつに分ち、一候毎に新たな春の風を配當したるもの。即ち梅・山茶・水仙(以上、小寒・瑞香・山櫻・望春(二))・以上、大寒・迎春・杏・李(以上、雨水・桃・棠梨・上春・桐・麥・柳(以上、清明・牡丹・茶・蘭・楝(二))・以上、穀雨。
にじふせんきんくわ二十錢銀貨「名」にじふせんきんくわ(二十錢銀貨)を見よ。
にじふせんきんくわ二十錢銀貨幣「名」にじふせんきんくわ(二十錢銀貨)を見よ。

「名」にじふせんきんくわ(二十錢銀貨幣)を見よ。
にじふせんきんくわ二十錢札「名」にじふせんきんくわ(二十錢札)を見よ。
にじふだ二字札「名」ばばだ(下馬札)に同じ。牛馬馬(下馬札)といふべからず二字札といふべし。
にじふちやうだて二十挺立「名」にじふちやうだて(二十挺立)を見よ。
にじふちやうだて二十四不同「名」(文)漢詩の絶句と律詩とに於て、第二字と第四字とは平仄の相異なるを通則とすること。(二六對に對して)
にじふにじふ二十二史「名」(書)二十一史に明史(二)を加へたる稱にじふにじふ(二十四史)参照。
にじふにじふ二十二史割記「名」(書)二十二史に就きて誤を正し、政事上重要な事項に對しては議論を附したるもの。三十六卷。支那清の趙翼の著。
にじふにじふ二十二社「名」(古)京都皇居の守護神と定めて、祀せられたる二十二箇所の社。即ち伊勢神宮(伊勢國・石清水(二))・上下の加茂松尾(二)・平野・稻荷(二)・大原野梅宮(二)・吉田・祇園(二)・北野・貴船(二)・以上、山城國・春日(二)・大神(二)・石上(二)・大倭(二)・廣瀨・龍田・丹生(二)・以上、大和國・住吉・廣田(以上、攝津國・日吉(二)・近江國)。初は、十六社。十九社・二十一社なりしが、後朱雀天皇の時より、二十二の數に確定し、臨時・大小の新願奉幣等、多くこの諸社にて行はれ、殊に、二月七月の新年穀の奉幣は、全くこの諸社に限られて、應仁の亂の時に及べり。明治維新後、これ等の神社は、すべに官幣大社に列せられたり。
にじふにじふ二十二挺立「名」小早(二)の、繪の數二十二挺を設けて漕ぐもの。
にじふにじふ二十人衆「名」わかつた(若黨)に同じ。「戰國時代武田家の語」にじふはちこち二十八講「名」(佛)法華經二十八品を講ずる法會。ほつはつこち

ろれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしそ こけくきか おえういあ

じふは

じふは

じふは

じふは

十八日なるに本づき、一日一宿と分野を劃して二十八の數を定めしものなるべしといふ。支那に於ける區分法は、東方は角(一)亢(二)氐(三)房(四)心(五)尾(六)箕(七)北方は斗(八)牛(九)女(一〇)虛(一一)危(一二)室(一三)壁(一四)西方は奎(一五)婁(一六)胃(一七)昂(一八)畢(一九)觜(二〇)參(二一)南方は井(二二)鬼(二三)柳(二四)星(二五)張(二六)翼(二七)轸(二八)にちふちとゆへ(二七宿參照)。

にじふはちやうだて二十八挺立【名】小早(一)の、櫓の數二十八挺を設けて漕ぐもの。

にじふはつてんか二十八天下【名】天の二十八宿に配していふ。支那にて、戰國時代の英雄割據の狀態を形容していひし語。我國の戰國時代にも轉用せり。

にじふふみ【動四他】にじふふみ【名】に同じ。字鏡ニ「跳、ニシクルニシムフミニシル」。

にじふめくすり二十丸藥【名】火繩銃に用ひ玉藥の一種。仍我條物語「口藥に二十丸藥といふことあり。それ、なせに、十五丸、硝磺三丸、灰二丸、硫黃、これは、よくよくおろして、口藥によきなり」。

にじふめんたい二十面體【名】數【英】Icosahedron 又 Icosahedron】二十箇の平面にて圍まれたる立體。

にじふよかんきそく二十四時間規則【名】「法」戰時國際法にて、交戰國の軍艦は、特別な取極なき限は、二十四時間以上、中立國の港灣内に碇泊するを得ずといふ規則。

にじふよはいまうて二十四輩詣二十餘輩詣【名】二十四輩に關係ある寺に、

順次參拜すること。その寺は、性信房の建立に係る東京市淺草區北清島町報恩寺(東本願寺派)眞佛房の下野國芳賀(郡物部)村大字高田の専修寺(専修寺派)及び下總國結城(郡結城町)稱名寺(西本願寺派)順信房の常陸國鹿嶋郡巴村大字鳥栖(無量壽寺)西(及)同國同郡同村大字下田無量壽寺(東)乘念房の常陸國新治(郡那珂町)の如來寺(西)信樂房の下總國結城郡安房(郡村弘徳寺)東、成念房の同國猿島(郡森戸村)の妙安寺及び上野國前橋市妙安寺(東)西、安房の下總國猿島郡岩井町西念寺(東)及び信濃國上水内(郡朝陽)村長命寺(西)證信房の常陸國水月市青蓮寺及び磐城國東白河郡棚倉町蓮正寺共に東、善性房の下總國結城郡石下(郡)村の東弘寺(東)是信房の陸中國岩手郡米内(郡)村本誓寺及び信濃國松本市本誓寺(共に東)無爲信房の磐城國東白河郡棚倉町無爲信寺及び陸前國仙臺市の稱念寺(共に西)善念房の常陸國東茨城郡西門(郡)村善重寺(東)信願房の下野國那須郡烏山町慈願寺(東)及び同國同郡馬頭(郡)町慈願寺(西)定信房の常陸國那珂郡額田(郡)村阿彌寺(東)道圓房の常陸國久慈(郡)郡幸久(郡)村枕石寺(東)入信房の常陸國那珂郡野口村壽命寺(西)念信房の常陸國那珂郡陸奥(郡)村昭願寺(東)入信房の常陸國筑波郡大穂(郡)村常福寺(東)明法房の常陸國那珂郡神崎村上宮寺(西)慈善房の常陸國那珂郡神崎村常弘寺(西)唯佛房の常陸國那珂郡津町の淨光寺(西)唯信房の常陸國茨城郡茨城(郡)町の唯信寺(東)唯信房の常陸國多賀郡分村覺念寺及び同國水月市信願寺(共に西)唯念房の常陸國久慈郡佐竹村の西光寺。

にじふれう二十寮【名】古の官制にて、八省に附屬せし二十寮、即ち大舍人寮(寮圖書)寮内藏(寮縫殿)寮内匠(寮大學寮雅樂)寮玄番(寮諸陵)寮主計(寮主税)寮木工(寮左馬)寮右馬(寮兵庫)寮陰陽(寮主殿)寮大炊(寮寮掃部)寮齋宮(寮)寮にじふろくちやうだて二十六挺立【名】小早(一)の、櫓の數二十六挺を設けて漕ぐもの。

にじふろくちやうだて二十六挺立【名】小早(一)の、櫓の數二十六挺を設けて漕ぐもの。

にじふろくちやうだて二十六挺立【名】小早(一)の、櫓の數二十六挺を設けて漕ぐもの。

にじふろくちやうだて二十六挺立【名】小早(一)の、櫓の數二十六挺を設けて漕ぐもの。

にじふろくちやうだて二十六挺立【名】小早(一)の、櫓の數二十六挺を設けて漕ぐもの。

にじふろくちやうだて二十六挺立【名】小早(一)の、櫓の數二十六挺を設けて漕ぐもの。

にじふろくちやうだて二十六挺立【名】小早(一)の、櫓の數二十六挺を設けて漕ぐもの。

にじふろくちやうだて二十六挺立【名】小早(一)の、櫓の數二十六挺を設けて漕ぐもの。

にじふろくちやうだて二十六挺立【名】小早(一)の、櫓の數二十六挺を設けて漕ぐもの。

にじふろくちやうだて二十六挺立【名】小早(一)の、櫓の數二十六挺を設けて漕ぐもの。

にじふろくちやうだて二十六挺立【名】小早(一)の、櫓の數二十六挺を設けて漕ぐもの。

にじまつら西松浦【名】「地」肥前國十

にじまつら西松浦【名】「地」肥前國十

にじまつら西松浦【名】「地」肥前國十

にじまつら西松浦【名】「地」肥前國十

にじまつら西松浦【名】「地」肥前國十

にじまつら西松浦【名】「地」肥前國十

にじまつら西松浦【名】「地」肥前國十

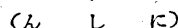
にじまつら西松浦【名】「地」肥前國十

にじまつら西松浦【名】「地」肥前國十

にじまつら西松浦【名】「地」肥前國十

にじまつら西松浦【名】「地」肥前國十

北海道に多く漁獲せらる。肉を食用とし、又、油を採り、粕は肥料とし、背肉は乾し



八郡の一。郡役所を小林村に置く。
にしやう 二聖【名】「佛」**二**二人の聖人

のぼりて、西出なる所におちつきたれば、
三「地」よしみね(良峯)の別稱。**四**「地」常陸

惡魔。病魔。『左傳の成公十年の條に、
「公疾病、求二醫于秦一秦伯使二醫緩爲之。」

にじふ

未至、公夢、疾爲三豎子、曰、彼良醫也、
體傷我焉、逃之。其一日、居言之上、背
之下、若我何、醫至曰、疾不可爲也、在
背之上、背之下、攻之不可、達之不及、
藥不至焉、不可爲也、とあるに本づく
やまひ。病氣。

にじふあんらく 二種安樂「名」次條の
にじふあんらくきやう 二種安樂行「名」
「佛」有相「佛」安樂行と無相安樂行との併
稱、各條を見よ。

にじふきん 二朱金「名」徳川時代の金貨
の。一、長方形にして、價額二朱なりしも
の。即ち元祿二朱金、天保二朱金、萬延二
朱金など。二朱判金。二朱判。

にじふきん 二朱銀「名」徳川時代の銀貨
の。一、長方形にして、價額二朱なりしも
の。即ち安永南銀、文政二朱銀、安政二
朱銀など。南銀二朱銀。南銀。

にじふさつ 二朱札「名」みんぶしやきんさ
つ「民部省金札」を見よ。

にじふはん 二朱判「名」にじふはんきん
(二朱判金)の略。「人」次條の略。其角
「二朱判」を取るが上にも年男

にじふはんきん 二朱判吉兵衛「名」
「人」俳優。本名は中村吉兵衛。二朱判を
紋所とせるより、この綽名「や」あり。道
化「や」方の名人にて、大歌舞をよくし、紀
文奈良茂などに愛せられたり。明和二
年歿す。年八十二。

にじふはんきん 二朱判金「名」にじふはん
(二朱金)に同じ。

にじふはん 耳順「名」にじふはん(耳順)に同
じ。運歩色葉順「耳順、ニジュン」

にじふはん 二手類「名」(動物)人類を、哺
乳動物中の一目と立つる時、四手類(猿類)
に對して呼ぶ稱。れちやうるる(靈長類)
参照。

にじふよ 二所「名」ふたところ。二箇所。
二所の權現(ガシ)「句」伊豆國の伊豆
山權現と、相模國の箱根權現と。鎌倉
時代には、將軍家の崇敬一方ならず、
將軍のこの二社に參詣するを、二所詣
(ニショギ)又は二所參詣といへり。曾我八

にじふ

幡大菩薩足柄大明神・富士淺間(ガシ)大
菩薩二所の權現・三島大明神の御擁
護「ガシ」御座あるべからず
二所の宗廟「句」にじふよへう(二所宗
廟)に同じ。

にじふよ 二證「名」(佛)三學の中、戒學
を修する事證と、定「ガシ」慧「ガシ」二學を修
する理證と。

にじふよ 二乘「名」(佛)即ち佛乘なれど
も、菩薩と佛とは、因果の別に過ぎずとし
て、菩薩乘をも、一乘の中に攝し、これに
次ぐ下記の二者を、二乘と立てたるなり。
しやう(四聖)「參照」聲聞「ガシ」と緣覺
と。還獲天蓋「句」向に六塵を離れて、八風を恐
れば、覺えず二乘の白寶に墮して、永く佛
道を成(ガシ)ぜじとなり」(佛)大乘と
小乘と。四「佛」三乘と一乘と。

にじふよ 二乘根「名」(數)へいさうこ
ん(平方根)に同じ。

にじふよ 二乗根性「名」(佛)
「二乘即ち聲聞(ガシ)と緣覺とは、自身の
出離生死(ガシ)の事のみを思ひて、他を
化(ガシ)する考のなきを思ひて、自利(ガシ)
利他「參照」我事のみを思ひて、他人の上
を思ひやることなき心。自利のみを心に
かけて、利他の考をおこさぬこと。

にじふよ 二鐘亭「名」(人)江戸の狂
歌師。「初世」幕府の士。御徒目付よ
り廣敷番頭となる。木室七左衛門朝忠と
稱し、又、卯雲「ガシ」と稱す。初め俳諧を
學ぶ。今日狂歌集、京物語の著あり。天明
三年頃歿す。「二世」幕府の小普請方。
和田五郎兵衛定記と稱し、俳諧寮、蝙蝠翁
又蝙蝠老人とも稱す。文政十三年歿す。

にじふよ 二乗比「名」(數)にじふよひ
(自乗比)に同じ。

にじふよ 二乗累「名」(數)にじふよへ
き(自乗累)に同じ。

にじふよ 二所參詣「名」(二所の
權現)を見よ。東海道名所記、伊豆の山は、走
湯山ともいふ。ここにまします御神をば、
走湯權現と申し奉る。昔、鎌倉の右大將、

にじふ

伊豆箱根を信じ、常に二所參詣を致した
まへり
にじふよ 二所宗廟「名」(二所の權
現)を見よ。日本國中にての二つの
大廟、即ち伊勢の天照大神宮と山城の石
清水(ガシ)八幡宮と。

にじふよ 二所大神宮「名」
伊勢の大神宮の内宮と外宮「ガシ」と。二宮。
正統記、内外宮「ガシ」、……これより二所大
神宮と申す。

にじふよ 二所大神宮名略記「名」(書)しんめいり
やんき(神名略記)に同じ。

にじふよ 西四辻「名」姓氏の一。本
姓は藤原、四辻正二位權大納言公享の第
二子公眞、始めてこの姓を稱し、官位、左
近衛權中納言中將正三位に至り、嘉永四
年薨す。子孫相續して、明治維新後子
爵を授けらる。

にじふよ 二所詣「名」(二所の權現)
を見よ。曾我、文治四年戊申正月十五日に
は、鎌倉殿御二所詣聞えけり」
にじふよ 荷尻「名」にじふよ(荷尻)を見よ。

にじふよ 踊上「名」(名)
「初座入(ガシ)の際、膝にてにじり込み、後
を向きて、腹物を摘み、手拭にて手を淨む
るの作法あるによりていふ」茶室の客の
入口。にじりぐち。にじりぐち(亭主口)參
照。「雨雨」次第に舞上ること。

にじふよ 踊出「名」(動)にじり出づ
「動」にじり出づ。踊出づ。踊出づ。踊出づ。
下に「自」坐りたるまゝ、膝にてにじり出
るに、進み出づ。……膝手よりにじり出
て、掃部(ガシ)に向ひて」

にじふよ 踊書「名」(筆)にて、紙
をにじりやうにして、拙く文字を書くこ
と、又その書きたる文字。五人女、久七が
心おぼえほどににじり書を羨し」(舞村
「てて」蟲やその角文字のにじり書」

にじふよ 踊口「名」(名)千「
宗且の言ひ世てし語といふ」にじりあがり
(踊上)に同じ。

にじふよ 踊込む・踊込む・踊込む(動)
にじりこむ。踊込む・踊込む・踊込む(動)

にじふ

四自「にじりやうにして入り込む。日
強ひて入り込む。本朝、不干渉、博奕の場
ににじり込みて、(讀)をいひても」(春生五大
方うしろに居るる御子息といふも、こ
の後家御(ガシ)の實子とごさる處へ、六右
衛門どのが、踊り込まれたと、の事」

にじりやう 踊据う・踊据う・踊据う(動)
「二他」抑へつけて、にじりやうにして、
立ち上りしめず。八笑人物狂はしく眼七
(ガシ)をこき廻し、にじりやう、物言はん
にも、聲出す」

にじりやう 踊寄る・踊寄る・踊寄る(動)
「四自」にじりやうにして近く寄る。おざ
りて近寄る。源平引續行綱はあたり見
まはし、にじり寄り」

にじりやう 煮汁「名」(物)を煮たる汁。
「金」工作品に著色するに用ふる藥品。
にじりやう 踊る・踊る・踊る(動)四他「押し
つけながら摩り動かす。踏みにじり」

にじりやう 踊る・踊る・踊る(動)四他「押し
つけながら摩り動かす。踏みにじり」

にじりやう 踊る・踊る・踊る(動)四他「押し
つけながら摩り動かす。踏みにじり」

にじりやう 踊る・踊る・踊る(動)四他「押し
つけながら摩り動かす。踏みにじり」

にじりやう 踊る・踊る・踊る(動)四他「押し
つけながら摩り動かす。踏みにじり」

にじりやう 踊る・踊る・踊る(動)四他「押し
つけながら摩り動かす。踏みにじり」

にじりやう 踊る・踊る・踊る(動)四他「押し
つけながら摩り動かす。踏みにじり」

にじりやう 二印岩岐「名」長き三
尺餘なる岩岐石。「翅類」に同じ。
にじりやう 二翅類「名」(動)さうしるる。雙
にじりやう 西六條「名」(地)京都
六條通の、朱雀大路以西(東六條に對し
て)。「前記」の西六條に在るよりいふに
しほんせんじ(西本願寺)に同じ。(東六條
に對して)。

にひるくうふち 西六條藤「名」紋所の
の。一。西本願寺にて用ふる藤。
にじわか 西和賀「名」陸中國の舊
郡の一。明治二十九年東和賀郡と合せて、
和賀郡を立つ。

にじを 西尾「名」三河國幡豆の郡
の西北部にある町。郡役所あり。松平氏
の舊藩地。

にじをか 西岡「名」西方にある丘陵。
にす 假漆「名」化わす(假漆)の略。
にす 似す「動下二他」似るやうにす。
まぬ。摸倣す。日まねて作る。偽造す。
贋造す。

にす 煮煤「名」煤の煮たるもの。板な
どの色づくに用ふ。
にす 丹摺「名」赤き土にて、色をすり
つくること。又その衣。虱にすりの袖

にす 荷摺「名」次條の略。
にす 荷摺板「名」倉庫などの内
部の周圍に張れる厚板。にすり。

にす 二水「名」漢字の偏の「氷」。
「凍」「治」などの字の左にある「水」の
字の變體。(三水に對して)

にす 二水永「名」にすくわんえい
(二水寛永の略)。
にす 二水記「名」書中納言
尾藤康の日記。寫本廿一冊。一名、一止記。

にす 二水寛永「名」くわん
えいにすくわんえい(二水寛永)に同じ。
にせ 似眞偽「名」本物に似せて造るこ
と。又その作りたる物。偽造。贋造。

にせ 二世「名」この世とあの世と。
現世(世)と來世(世)。日「夫婦は二
世」を見よ。夫婦の關係。太刀頭血汐に染
むる兩の手を合すも、二世の名残ぞと、物
いひたげに、夫の方」(俗曲。花川戸身替の段)

「お前は、あの、傳兵衛さんと、二世でもと
いふ仲ぢやあござんせぬか」
二世と替(か)す「句」次條に同じ。俗曲
(神路山色)「二世と替せし、殿御の手跡、
見ちがへて、何とせう」

二世と契る「句」夫婦の關係を結ぶ。

二世を契る。二世を誓ふ。二世と替(か)す。
維新御月の紅葉。二世と契りていと
しいもの、そもに怨のあるべきか」

二世の縁(えん)「句」夫婦の縁。諸曲。初瀬
西行「げにげに、二世の縁盡きず、今宵
御目にかかること、これ、御本尊の御引
合なり」

二世の固(カタ)「句」夫婦の契を固む
二世の語(カゴ)「句」二世の約束に
同じ。二代男。二世の語らひ、人も知って
淺からず」

二世の願(ガン)「句」夫婦の縁の、あの
世に至りても絶えざるやうにとの願
望。二世の大願。諸曲。初瀬西行「いよいよ
よ二世の願成就して、一蓮同生(ひとしづ)の
契あるまじくと、頼もしうこそ候へ」

二世の契約「句」二世の約束に同じ。
結音山女庭訓十握(か)の御劍奪(ごけん)に
ひ返しに渡されなば望のとはり二世
の契約、得心無ければ叶はぬ縁」

二世の大願(ダイガン)「句」佛「二世の
願」に同じ。榮花。二世の大願、あひ叶は
じやなぞ云ふ」

二世の頼(ラン)「句」來世にて逢はる
べきたのみ。心中。おは永の期。世の中に
絶えて心中なかりせば、二世の頼も無
からまし」

二世の契(ケ)「句」二世の約束に
同じ。盛衰。誠に二世の契にや、愛念類
なくして、月日を重ねし程に、その期
(こ)も満ちなければ、産平らかにして」

二世の夫(ウ)「句」二世かけて變らじ
と誓ひし夫。御城島合戦「見送るは二世
の夫、見返れば三世の父」

二世の妻(メ)「句」二世かけて變らじ
と誓ひし妻。五十年思歌念佛「我こそ、清
十郎が二世の妻」

二世の願(ガン)「句」佛「二世安樂の
祈願。わが身の現世安穩、後生菩提(ぼだい)
を得たといふ祈願。榮花。自らの
二世の願、叶ひぬべくば」

二世の約束「句」夫婦となりて、心變
らじといふ契約。二世のちぎり。二世の

かたらひ。二世の約束。俗曲。親が
許さうが、どうせうが、敦盛様とは二世
の約束」

二世を契る「句」二世と契るに同
じ。二世を誓ふ「句」前條に同じ。八陣守
城「二世を誓ひし戀中も、今日を限と成
りはてて」

にせ あんらく 二世安樂「名」佛の
慈悲によりて、現世(世)も、安樂なるこ
と。又その安樂なる現世と來世と。現世
安穩、後生(ごせい)善所。諸曲。榮花。五障の
雲のかかる身を、助けたまはば、この世よ
り、二世安樂の國にはや生れゆかんぞ嬉
しき」

にせ 二姓「名」二つの姓氏。兩姓。
禮記の昏我篇に「昏禮者、將合二姓
之好、上以事宗廟、而下以繼世也。故
君子重之」とあり。男、女配偶の二家。兩
姓。日「後漢書の蔡邕傳に「昔曾子不受
季孫之賜、況可事二姓哉」とあり。支那
にて、前後兩朝の君主。兩姓。陳樵の
節婦賦に「子敬母三先人之教、令、以三身
而事三姓」とあり。前後二人の夫。二
夫。兩姓。

二姓の好(コ)を合す「句」前條を
見よ。婚を結ぶ。婚禮を行ふ。
にせ 二星「名」二つの星。日「牽牛
星と織女星と。たなはた(七夕)参照。芭蕉
(鳥之聲)「鳥鳴……、天の川に翅を並べて、
二星の媒となれり」其角。二星私かに戀む
隣の娘年十五」

にせ 二聖「名」二人の聖人。日「人」
我國古代の二人の歌聖。即ち柿本人麿と
山部赤人。諸曲。榮花。古今の詠歌を選
び、二聖六歌仙を始として」日「人」我國
古代の二人の書聖、即ち嵯峨天皇と空海
と。「二聖三筆」

二聖一賢「句」二人の聖人の評臣論
に出づ。大禹孔子と墨子と。
にせ いんかい 二星會「名」たなはた(七夕)
に同じ。

にせ いん 似印。偽印。贋印「名」いつは
り似せて造りたる印章。偽造の印。にせ

いんばん。にせはん。偽印(ごいん)。謀判(ぼうはん)。
にせ いんばん 似判。偽印判。贋印判
「名」前條に同じ。

にせ 偽書。偽書。贋書「名」にせよ
(似筆)に同じ。
にせ かね 似金。偽金。贋金「名」いつはり
似せて造りたる貨幣。贋造の貨幣。

にせ ちがひ 似氣違。偽氣違「名」つゝ
りちがひ(作氣違)に同じ。
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
金貨。

にせ さん 似銀。偽銀。贋銀「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の

にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の

にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の

にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の

にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の

にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の

にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の

にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の

にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の
にせ さん 似金。偽金。贋金「名」贋造の

にせは

らうとしたれども」
にせはがみ 似手紙、偽手紙、贋手紙〔名〕
いつはり似せて書きたる手紙。にせぶみ。
偽書。

にせはかり 似秤、偽秤、贋秤〔名〕 一
つはり似せて造りたる秤。露迦如來經作「物
の懸からぬ贋秤、打折るが大法、國法」

にせはん 似判、偽判、贋判〔名〕 にせん
(似印)に同じ。會根橋心中「騙(リ)を言うて
縛られての、偽判して括られてのと、ろく
な事は一つも言はず」

にせはん 似版、偽版、贋版〔名〕 一
つはり似せて造りたる版。にせの出版物。偽
版(リ)。

にせひつ 似筆、偽筆、贋筆〔名〕 にせよ
(似筆)に同じ。白石「これに、最前作平
が贋筆、邪智深き臺七、必ず油断は致すま
じ」(俗間、山路、山色、見す見す知れた、こり
や偽筆)」

にせひやろき 似病氣、偽病氣〔名〕 一
つはりて病氣をよそふこと。又その病氣。
つくりやまひ。假病(リ)。作病(リ)。

にせふだ 似札、偽札、贋札〔名〕 にせつ
(贋札)に同じ。

にせふて 似筆、偽筆、贋筆〔名〕 一
つはり似せて書くこと。又その書きたるも
の。偽筆(リ)。

にせぶみ 似文、偽文、贋文〔名〕 にせがみ
(似手紙)に同じ。川中島合戦「そなたの似
文して、兄様を呼寄せんため」

にせまます 似枅、偽枅、贋枅〔名〕 一
つはり似せて造りたる枅。

にせむらさき 似紫〔名〕 江戸時代に流
行したる、一種の紫。一代玄明野(リ)が
原の茶屋風俗、さりとてはをかしげに、似
紫のしつこく

にせむらさき おなかげん 修紫田舎源
氏〔名〕「書」紫式部の作に倣ひたる意
にて、修紫といふ。柳亭種彦の著せる草
雙紙合巻物。源氏物語を饗案せるものに
て、光る源氏を足利將軍光氏とし、實物詮
義のため不品行をなすやうに作り替
へ、實は徳川時代の事相を描きたるもの。

にせき

三十八編百五十二冊より成り、文政十二
年より天保十三年まで、前後十四年に互
りて出版せらる。作者死没のため、横柱
の巻までにて終り、挿畫は歌川國貞の筆。
略して、田舎源氏ともいふ。

にせんきやう 〔名〕「勤」なまづ(蛇)を云ふ。
〔安房國の方言〕

にせんせき 二千石〔名〕「支那漢の世の
制度にて、郡の太守の祿二千石なりしよ
りいふ、わが國にては、郡は縣の下に在れ
ども、支那にては、當時の制、郡は却りて
縣の上に在りたり。せき(石)参照」げんち
に府縣知事の異稱。

にせんてん 二禪天〔名〕「佛だいにせんて
ん(第二禪天)の略」

にせんどうくわ 二錢銅貨〔名〕 次條の
にせんどうくわい 二錢銅貨幣〔名〕 明
治四十年の新貨條例に基きて發行せられ
、明治三十年青銅貨の發行と共に、その鑄
造の廢せられたる、二錢の補助銅貨。二
錢銅貨。

にせんべん 二尖瓣〔名〕「醫」羅 Vah-
bi bicuspidalis「そらべん(僧帽瓣)に同
じ。さんせんべん(三尖瓣)参照」

にせんり 二千里〔名〕 次條を見よ。
二千里の外(リ) 〔句〕 次條を見よ。増
二千里のほかも、殘なき心地する。今更め
きたり」

二千里の外(リ)の故人の心 〔句〕「支
那唐の白居易の八月十五日夜、禁中獨
直對月憶三九」と題する詩に「三五
夜中新月色、二千里外故人心」とあるに
本づく「月の光に對して、遠方にある友
も、この同じ月を仰ぎ眺むるならんと
思はれて、その友を懐しく感ずる意。
源氏合背は十五夜なりけりとおぼし出
でて、殿上の御遊戀しく、ところどころ
ながめたまふらんか」と思ひやりたま
ふにつけても、月の顔のみまもられた
まふ。二千里の外(リ)の故人の心と誦(リ)
じたまへるに、例の涙もとどまらず」

にせめい 似銘、偽銘、贋銘〔名〕 酒味増

にせも

醬油などの銘を、いつはり似せたるもの。
朝露酒に、味増桶のにせ銘を書きつけ」
にせもの 似物、偽物、贋物〔名〕 一
つはり似せて作りたる物。偽造の品。まがへ
もの。偽物(リ)。贋物(リ)。

にせもの 似者、偽者、贋者〔名〕 その人
らしく見せかけた人。川中島合戦二人の
中、一人は似者、何方(リ)か誠の信玄」

にせやまぶ 似山伏、偽山伏、贋山伏
〔名〕 山伏らしくよそへる者。そらや
まぶし。つくりやまぶし。

にせやう 似野郎、偽野郎、贋野郎〔名〕
「やう(野郎)を見よ」(臺)などをか
ぶりで、狂言物真似などをなすことか。
寛文六年六月十一日町屋町内に、にせ野郎を
拵へ、附髪(リ)装束など持參致し、方方
へ參り、又借裝束などにて、狂言させ候
由、相聞」

にせる 似繪〔名〕 人又は動物などを寫
生せる繪。〔鎌倉時代の語〕 書聞似繪を
御好みありけるに」機記「畫二牛馬之
似繪」

にそ 二鼠〔名〕 二匹の鼠。兩鼠。日
「佛」毛色の白きと黒きとの二匹の鼠の
義。次條参照。晝夜又は日月の譬。兩鼠。
「月の鼠」日の鼠参照。

二鼠、藤(リ)を齧む 〔句〕「實頭盧突羅
闍爲院延王說法經に「昔日有、人行
在二曠野、逢二大惡象、爲象所逐、狂懼
走突、無所依怙、見二丘井、即尋二樹
根、入二井中、一藏。有白黑鼠、一牙齧二樹
根、此井四邊、有四毒蛇、傍齧三人。而
此井下、有大毒蛇、欲飲三人。下
畏毒蛇、所攀之樹、其根動搖、樹上有二
蜜三滴、墜其口中、于時動樹、樹上二
蜂窠、衆蜂散飛、咬三人。有二野火起、
復來燃樹。乃至曠野者、噓三生死。彼男
子者、噓三夫人象、噓三無常、丘井、噓三
人身、樹根、噓三人命、白黑鼠、噓三晝夜、
齧二樹根、噓三念滅、四毒蛇、噓三四
大、蜜者、噓三欲、衆蜂、噓三惡觀、野火
燒者、噓三老、下毒蛇、噓三死」とあるに
本づく。又、名義集の卷五に「大集云、昔

有二人、遊三醉象、生死、緣、藤(命
根)、入井、無常、有黑白二鼠、日月、二
曠、藤將、絕、傍有四蛇、欲、蜜、四大、
下有二龍、吐火、張爪、拒之、三毒、其
人仰望、二象已臨井上、憂惱無託、忽
有蜂、過、蜜、滴、入、口、五欲、是人
噓、蜜、全亡、危懼、三、あり」人生のは
かなく無常なる譬。

にそ 二會〔名〕「人」會我前成と、その弟
時致(リ)と。會我兄弟。

にそ 二祖〔名〕 高祖と世祖と。日「人」
「支那に於ける禪宗の第二祖なるよりい
ふ」(臺)の異稱。〔見よ、
二祖斷臂(リ)〕〔句〕「佛」(臺)可(リ)を
にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ

有二人、遊三醉象、生死、緣、藤(命
根)、入井、無常、有黑白二鼠、日月、二
曠、藤將、絕、傍有四蛇、欲、蜜、四大、
下有二龍、吐火、張爪、拒之、三毒、其
人仰望、二象已臨井上、憂惱無託、忽
有蜂、過、蜜、滴、入、口、五欲、是人
噓、蜜、全亡、危懼、三、あり」人生のは
かなく無常なる譬。

にそ 二會〔名〕「人」會我前成と、その弟
時致(リ)と。會我兄弟。

にそ 二祖〔名〕 高祖と世祖と。日「人」
「支那に於ける禪宗の第二祖なるよりい
ふ」(臺)の異稱。〔見よ、
二祖斷臂(リ)〕〔句〕「佛」(臺)可(リ)を
にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

にそ 二祖 〔名〕 二祖。比丘尼(リ)。

法然上人、教旨弘通の場とし、高足信空
その後を受けてより、また興隆す。本尊
は、快慶作の釋迦と彌陀(二)と。

に「さんおん」えんき 二尊院縁起(一)の
「美」前條の二尊院の縁起を描けるもの。
畫は狩野元信、詞書は伏見貞教親王及び
三條西公條(二)又、外題は後奈良天皇の
宸翰と傳へらる。「と、又その物。

に「名」濡ひしめりて、粘りけのあるこ
に「仁多」(一)「地」出雲國六郡の一。郡
役所を三成(二)村に置く。

に「た」荷駄(一)「名」(佛)眞諦(出世間門)
と俗諦(出世間門)。眞宗にては、佛法、
王法をこれに配して、盛んに鼓吹せり。
眞宗(二)「忍辱」(三)二諦の衣(四)。

二諦相資(一)「句」(佛)眞諦と俗諦と
相資(二)けて、圓滿なる結果を生ずること。
眞宗の要旨とする所なり。

に「たいくわん」二諦觀(一)「佛」空觀
成就する時は、單に空觀を成(二)ずるの
みならず、俗諦も歴然として顯現するに
よいていふ。

に「だいしほり」二代縛(一)「次條に同じ。
に「だいぜつ」二代絶(一)「あざつ後絶」
に同じ。

に「だい」のきさき 二代后(一)「人」近
衛天皇と二條天皇との二代の皇后となり
たまひしよりいふ「ふちはらますこ(藤原多
子)の異稱。

に「だいふ」仁太夫(一)「名」江戸時代に、諸浪
人の頭(二)にて、江戸中の門附(三)渡世
の者に、鑑札を出だすことを掌りし者。

に「たう」二刀(一)「りやうたう(兩刀)二箇
に同じ。

に「たう」二桃(一)「二箇の桃の實。
二桃三士を殺す(一)「句」晏子春秋
の諫下篇に見ゆ支那齊の景公に、公
孫捷・田開疆・古冶子の三勇士あり。皆、
功を誇りて、我儘なりしかば、景公患へ
て、宰相晏子の計を用ひ、三人に二箇の
桃を與へて功の大なる者二人、これを
食ふべしといひしに、公孫捷は虎を搏

に「さんおん」

ちし功ありとて、一桃を取り、田開疆は
三軍を禦ぎし功ありとて、一桃を取り
しが、古冶子の、その水に入りて、鱗を
殺しし功ありといふに及び、捷と開疆
との功、これに及ばず、まづ桃を取りし
ことを恥ぢて、共に死し、古冶子も、一
人生きんは不仁なりとて、やがて亦、死
にきといふ故事。奇計を用ひて、人
を自殺せしむる譬。

に「たう」二島(一)「地」壹岐(二)島
と對馬(三)島と。さうじうくかこ(六十
六箇國)參照。

に「たう」二道(一)「文道と武道と。文
藝と武藝と。文武兩道。佛道統紀の
卷三十に「殘穢在身、爲欲斷除、便在二
道、成男女根」とあり。身體の内、大
小便の通ずる道。正統記の稻米を食せ
しにより、身に殘穢出て來ぬ。この故に、
始めて二道あり。佛、難行(二)道と
易行(三)道と。四(佛)有漏(四)道と無漏
(五)道と。

に「たうてつじんりう」二刀鐵人流(一)「
鐵人は青木金家の號(二)劍道の流派の一。
宮本武藏(三)の門人青木城右衛門金家を
祖とするもの。

に「たうりう」二刀流(一)「劍道の流派
の一。左右兩手に、大小の刀を執りて闘
ふもの。宮本武藏(二)を祖とす。二天(三)
流、武藏流。政名(四)流、圓明流。神免
流、(五)りやうたうたか(兩刀遣)に同じ。

に「たがひ」似貝(一)仁田貝(二)「動」に
たがひ(似貝)を見よ(三)かか(似貝)に同じ。
に「たか」よったか(二)似たか(三)寄ったか
(一)「句」に(二)る(三)の條下を見よ。

に「たき」煮焚(一)煮炊(二)「食物を煮又は焚
くこと。飯を炊(三)き、菜(四)を煮ること。
炊事(五)。

に「たじ」荷出(一)「荷物を送り出すこ
と。略。

に「たじ」煮出(一)「にだしる(煮出汁)の
にだし(二)から煮出(三)煮出(四)したる殘
のかす。にから。

に「たじ」煮出汁(一)「削りたる鰯節
を煮出したる汁。にだし(二)から煮出(三)煮出(四)したる殘
のかす。にから。

に「たう」

又は昆布などを、湯にてよく煮出したる
汁に、味を附け、流(二)して、滓(三)を去れ
るもの。吸物などの汁に用ふ。にだし
だしじる。だし。煎汁。

に「だじちやう」荷出帳(一)「送り出したる
荷物の名・數量などを記入する帳簿。
に「だす」煮出す(一)「動四他」湯にてよく煮
て、味を出す。

に「たつ」煮立つ(一)「動二他」煮え立つや
うにす。沸す。

に「たつ」煮立つ(一)「動四自」にたつ(煮立つ)
にたつ(二)「動四自」にたつ(煮立つ)
にたつ(三)「煮立つ(一)煮立つること。

に「た」にた(一)「うす氣味わるき類つきし
て、續けて笑ふさま。にやにや。にたり
にたにた(二)らひにたにた(三)笑(一)にた
にた(二)と笑ふこと。うす氣味わるき笑。平
假名盛装記(三)乳房離れて、そそそと這ひ出
て、ひとりにたにた笑。

に「たふじやう」二答狀(一)「鎌倉室町兩
時代に、訴人(原告)の提出せし二問狀に
對して、論人(被告)の提出せる陳狀。重
陳狀。

に「たん」二端(一)「りやうたん(兩端)に同
じ。二端を持(二)す」。

に「たん」二短(一)「名」二つの短所。「二不能
(二)短」參照。

に「たん」二短(一)「名」二つの短所。「二不能
(二)短」參照。

に「たん」二短(一)「名」二つの短所。「二不能
(二)短」參照。

に「たん」二短(一)「名」二つの短所。「二不能
(二)短」參照。

に「たん」二短(一)「名」二つの短所。「二不能
(二)短」參照。

に「たしち

べし」といふべきを、その一段を略して、
「すべて人は死す。故に彼は死すべし」と
いふ類。

に「たもの」がらす 似物鳥(一)「誰か鳥
の雌雄を知らん」の意なるべし互に似
て、區別しかねること。魔氣(二)しやがの
葉が似たものからすあふぎかな」。

に「たもの」がらす 似た者夫婦(一)「句」に
(二)る(三)の條下を見よ。

に「たやま」仁田山(一)新田山(二)丹田山(三)丹太
山(四)「次條の略。仁田山(五)山(六)の
他の山に似てはをれど、性質の劣れるよ
りふないべしといふ。又仁田と似
た、音の同じきよりいへる點もあるべ
し」似て非なる物。えせもの。により。

に「たやま」おり 仁田山(一)新田山(二)丹田山(三)丹太
山(四)「次條の略。仁田山(五)山(六)の
他の山に似てはをれど、性質の劣れるよ
りふないべしといふ。又仁田と似
た、音の同じきよりいへる點もあるべ
し」似て非なる物。えせもの。により。

に「たやま」おり 仁田山(一)新田山(二)丹田山(三)丹太
山(四)「次條の略。仁田山(五)山(六)の
他の山に似てはをれど、性質の劣れるよ
りふないべしといふ。又仁田と似
た、音の同じきよりいへる點もあるべ
し」似て非なる物。えせもの。により。

に「たやま」おり 仁田山(一)新田山(二)丹田山(三)丹太
山(四)「次條の略。仁田山(五)山(六)の
他の山に似てはをれど、性質の劣れるよ
りふないべしといふ。又仁田と似
た、音の同じきよりいへる點もあるべ
し」似て非なる物。えせもの。により。

に「たやま」おり 仁田山(一)新田山(二)丹田山(三)丹太
山(四)「次條の略。仁田山(五)山(六)の
他の山に似てはをれど、性質の劣れるよ
りふないべしといふ。又仁田と似
た、音の同じきよりいへる點もあるべ
し」似て非なる物。えせもの。により。

に「たやま」おり 仁田山(一)新田山(二)丹田山(三)丹太
山(四)「次條の略。仁田山(五)山(六)の
他の山に似てはをれど、性質の劣れるよ
りふないべしといふ。又仁田と似
た、音の同じきよりいへる點もあるべ
し」似て非なる物。えせもの。により。

に「たやま」おり 仁田山(一)新田山(二)丹田山(三)丹太
山(四)「次條の略。仁田山(五)山(六)の
他の山に似てはをれど、性質の劣れるよ
りふないべしといふ。又仁田と似
た、音の同じきよりいへる點もあるべ
し」似て非なる物。えせもの。により。

に「たやま」おり 仁田山(一)新田山(二)丹田山(三)丹太
山(四)「次條の略。仁田山(五)山(六)の
他の山に似てはをれど、性質の劣れるよ
りふないべしといふ。又仁田と似
た、音の同じきよりいへる點もあるべ
し」似て非なる物。えせもの。により。

に「たやま」おり 仁田山(一)新田山(二)丹田山(三)丹太
山(四)「次條の略。仁田山(五)山(六)の
他の山に似てはをれど、性質の劣れるよ
りふないべしといふ。又仁田と似
た、音の同じきよりいへる點もあるべ
し」似て非なる物。えせもの。により。

に「たもの

譽に敬を受け、後、三井寺に學び、文應元年以後、日蓮の弟子となり、日蓮流さるるや、日向等四人と、交も佐渡に省し、池上にて病むや、晝夜看護を怠らず、遺骨を身延山(妙心)に納めて後、同門六人、輪番を定めて、祖塔を守る。延慶元年入寂す。年八十八。

にちこそう 日小僧(名)「人」にちれん(日蓮)を、他宗より諱りていふ稱。

にちさう 日像(名)「日」の形象。圓形にて示し、又はその中に三足の鳥の形をあらはして示す。(月像(名)に對して)

にちさう 日藏(名)「人」高僧。三善清行(妙心)の弟。十二歳にして、金峰山(妙心)の椿山寺に出家し、精修六年、母の病を開きて歸省し、籍を東寺に隸して、密教を良鄰に學ぶ。金峰に往來すること二十六年、天慶四年金峰の室に斷食祈念すること三七日、藏王(善勝)菩薩を感見して、延壽の法を得、後大和國室生(妙心)の童門寺に遷り、靈應多かりきと傳ふ。寛和元年寂す。年百餘歲。

にちさうくわん 日想觀(名)「佛」日没に、西方に向ひて正坐し、落日を觀じて、心を移らざらしむる法。十六觀法の第一。

にちさうどう 日像幢(名)「仗旗」の一日像をあらはしたる錦旗。古、元日、御即位などの大儀に、大極殿の庭上に、鳥形(妙心)幢の東に建てしもの。(月像(名)に對して)

にちじ 日時(名)「日」と時と。時日。をり。

にちじ 日次(名)「日」日なり。

にちじき 日食(名)「日」の食物。著國「日食すこしきにして、飢を忍びがたきは、餓鬼の悲を報ふなり」

にちじふ 日什(名)「人」日蓮宗妙滿寺派の開祖。又、妙滿寺の開山。會津の人。父は石堂太郎覺知母は會津城主盛名盛宗の女清玉姫。俗名は權太夫重國。比叡山に學び、玄妙と稱し、建徳二年羽黒(妙心)山東光寺に入りしが、日蓮の説に感發して、その弟子となり、名を日什と改む。京都に上りて、洛中弘宗の勅許を得、元中三

年妙滿寺を創立し、八年將軍義滿に謁したれども、言、用ひられず、妙滿寺を弟子日義に譲りて、會津に歸り、妙法寺を創立し、九年寂す。年七十九。

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名)に對して)

(日輪 参照) 日天子の城郭(句)「佛」次條に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

日本駐佛特命全權大使栗野慎一郎、佛國の外務大臣ビション(Viscount)の記名調印す。この協約によりて、佛露日英の兩同盟系統の結合成立せしめたり。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國。

にちやう

にちやうだて 二挺立「名」小早(ヤ)の、
鱧の數二挺を用ひて滑ぐもの。にちやう
だち

にちやうなげ 二挺投「名」投(セ)とも
附かず、掛(セ)とも附かぬよりいふ「相撲
(分)の手の一。わが足を相手の兩足に掛
けて投ぐるもの。にちやうなげ」

にちやうのゆみ 二張の弓「句」ゆみ(弓)
の條下を見よ

にちやうまじ 二丁町「名」[地]「[二]ち
やま(五丁町)を見よ」江戸日本橋の堺
町(ヤ)と葦屋町(ヤ)との併稱。葦屋町
はもと上(ヤ)堺町といひ、堺町は下(ヤ)堺
町といひしを改稱せしにて、兩町何れも
劇場の所在地として榮えたり。さかひちや
う堺町(参照。八笑入樂屋の者は、たまり
かね、呑(セ)をひつ捕へ、有無を言はず、
下座(ヤ)へ引きずり込む。そのさま、二丁
町にて、とんちを引出す様なり」根兩
本其佐二丁町の賑賑しき、中村座市村座、
外記(ヤ)座辰松肥前、軒を並べ入(ヤ)
を爭ふ。分けて歌舞妓兩座を以て、根元
とし、大劇場(ヤ)と稱す」和合(ヤ)吉原や
二丁町の茶屋から、己(ヤ)が家(ヤ)の、團扇
や扇を持て来る」日次條を見よ。日駿
河國静岡市安倍川町(ヤ)の俗稱。遊樂の
在る處。藝藝(ヤ)これから二丁町とやらへ
見物に行きてえもんだが、どつちの方だ
ね。……、かの安倍川町といへるは、安倍
川(彌勒(ヤ)の手前にて、道筋より少し引
き込みて、大門(ヤ)あり。……兩側に軒を
並べて彈き立てる清(ヤ)の聲賑はし
く、見世つきの趣は、東部の吉原町に、大
よそ似たり」

にちやうまち 二長町「名」[地]「東京市
下谷(ヤ)區の町。東は三味線堀に接す。
もと對馬國の宗(ヤ)、伊勢國久居(ヤ)の藤
堂兩家の邸地。その他、幕府諸士の宅地等
を合併して、明治初年より町名を加へし
ものにて、町内にて二丁町と呼ぶ所ありし
に基き、文字を變へたるなりといふ」

にちやうめ 二丁目「名」次條の略。
二丁目の芝居「句」葦屋町(ヤ)の
芝居」を見よ。

にちやう

にちやうつく「動四自」にちやにちやとす。
にちやにちや「貌」物の油きりなどして
粘るさま。藤栗毛茶碗を……嗅ぎて見て、
臭い、臭い。……、酒でにちやにちやす
る。……と云はれて」(「星」に同じ)

にちやや 荷茶屋「名」にちややや「荷茶
にちやう二重「名」二つかきなるこ
と、又二つかきなりである物。ふたへ。
日一つにて足るべき物の、二つあり、又
一度にて可なる事を、二度行ふこと。にぎ
い。重覆。日昔、年始、元服、大迫物(ヤ)等
などの時、菓子やを臺に盛りて、神に供へし
もの。日(にちやうふたい)二重舞臺の略。

にちやういひ 二重意識「名」[哲]「英
Double consciousness」意識が、同時に二
様に働くこと。例へば人と談話を交へ
ながら、畫を書くなどの類。

にちやうあり 二重賣「名」一旦賣約調ひ
て金を受け取りたる物を、更に他人に賣
ること。重賣(賣)は、こへ身を賣つて、
先から連れに來た時は二重賣(二重賣)
にちやうおりもの 二重織物「名」[經]「
絲に、表の物と裏の物との二種を用ひ、
又、緯(ヤ)絲も、表の經絲と組織せしむべ
き表の緯絲と、裏の經絲と組織せしむべ
き裏の緯絲とを用ひて、表裏二重の組織
とし、且つその表裏を分離せぬやうにし
たる織物。例へば風通織などの類。

にちやうかい 二重書入「名」一度書き
入れたる文書(ヤ)に、更に書き加
ふること。書入(ヤ)を一旦行ひたる田
畑家屋を、更に他に書入すること。

にちやうくわん 二重火山「名」[地]
ふくわん(復火山)に同じ。

にちやうくわん 二重課税「名」にちや
う(二重税)に同じ。

にちやうくわん 二重結婚「名」前の
配偶者と離婚せずして、更に他の者と結
婚すること。二重コイル「名」[理]
「英 Double coil」大なるコイル(通常、極め
て細き絶緣導線を用ふ)の中に、小なるコ
イル(前者よりも太き絶緣導線を用ふ)を

にちやう

入れて、組み合はせしもの。後者に電流
を通ずるを通例とし、その場合、後者を第
二コイル(二次線輪、二次同線)といふ。

にちやうこん 二重根「名」[農]禾穀類
を深く播種又は移植する時、最初に發生
したる根の、僅かに發育して、枯死したる
後、更に地に近き節より發生する冠根。

にちやうさう 二重像「名」眼の病的原
因により、又は人爲的方法によりて、外界
に存する一箇の物體の、二箇存するがこ
とに見ゆること。左右兩眼の何れか一
方によりて見たる場合と、雙方の眼によ
りて見たる場合との二種類あり。

にちやうさう 二重雙晶「名」[礦]
「英 Double twin」一の式に従ひたる雙
晶の、更に他の式にて、雙晶を構成せるも
の。斜長石に、その例多し。

にちやうさう 二重下緒「名」二本と
なりて垂るやうにしたる下緒。

にちやうさう 二重式火山「名」
「地」にちやうくわん(二重火山)に同じ。

にちやうさう 二重質「名」一旦質入(ヤ)
を行ひたる田畑家屋などを、更に他に
質入すること。

にちやうさう 二重人格「名」[哲]
「英 Double personality」自我の分裂」
を見よ。

にちやう

かんせつせんきよ(間接選舉)に同じ。

にちやうさう 二重底「名」箱などの
底の下に、更に底を重ね設くること、又そ
の造り方の底。日(率直に眞意を吐露する
ことなく、偽りたる言行を爲すこと)。

にちやうさう 二重違棚「名」四十
八棚の一。棚板を上下二重に設けたる
違棚。

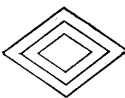
にちやうさう 二重抵當「名」一旦
抵當品としたる物を、更に他に對して抵
當品とすること。

にちやうさう 二重電信法「名」
「英 Duplex telegraphy」一條の電線によ
りて、雙方より同時に送信と受信とをな
す方法。

にちやうさう 二重電話法「名」
「英 Duplex telephony」重信法の二。二
回線の實回線より、一回線の二重電話回
線を組織するもの。

にちやうさう 二重綴子「名」模様の
周囲に、他の色の絲を繰り込みたる綴子。
にちやうさう 二重砲彈「名」[兵]
一箇の砲彈の中に、小さき砲彈を仕込み、一
定の距離にて、外側の破裂する時中なる
小砲彈は、更に空中を進みて、倍距離に達
するやうにしたるもの。

にちやうさう 二重橋「名」東京市丸の
内なる宮城の正門に架れる橋。上下の二
つより成り、上なるは、舊の書院門の橋に
て鐵にて造り、下なるは、舊の西丸大手
門の橋にて、石を以て積み、遠望すれば、
上下相重れるが如く見ゆ。



にちゆうふたい 二重舞臺「名」芝居の
大道具の一。縁側又は土手などの場面を
見するために、舞臺の上に床(こ)を構へ
て高くすること。縁側の場合は、高足(たかあし)
と常足(じょうそく)との二種ありて、前者は御殿
向又は大茶屋場に適するやう高く構へ、
後者は商家又は農家に適するやう低く構へ
ふ。二重。又はたい(平舞臺)参照。

にちゆうばいん 二重母音「名」(語)ち
うばいん(重母音)に同じ。

にちゆうまほし 二重廻「名」さんびがっば
(蓋合羽)に同じ。

にちゆうやき 二重焼「名」寫眞にて、雲
と景色人物とを、同一紙面に現す等の場
合に、兩者の濃淡の度を適當ならしむる
必要上、別別に撮影し、二枚の種板を重ね
て焼き付くこと。

にちゆうゆか 二重床「名」音響の傳達
又は寒氣の侵入を防ぐ等の目的にて、床
板を、上下二重に設けること、又その造り
方の床。

にちゆうわ 二重輪「名」紋所の輪の一。
大小二つの輪を、二重に描けるもの。

にちゆうを 二重緒「名」二重に取附け
たる鼻緒。八笑(はっしょう)朱の二重緒の雪踏(ゆきふみ)
を穿(く)き。

にちよう日用「名」毎日用ふること。

にちようひん 日用品「名」毎日用ふる
物品。

にちようぶん 日用文「名」しよかんぶん書
にちらい日來「副」ひら(日頃)に同じ。

にちらう 日期「名」(人)日蓮宗の僧。六
老僧の一人。下總國本土寺の開基。筑後
房と稱す。下總國の人。千葉氏の族印東
治郎右衛門尉有國の子。幼名吉祥慶。父
の命によりて、日蓮の弟子となる。日蓮の教
に流されて、獄に下され、日蓮の教に
に會ふや、その教を佐渡に致し、從ひて
鎌倉に歸る。日蓮の身延(みん)山に去るや、
比企谷(ひきや)なる妙本寺の法席を承け、後
又、武藏國池上(いけがみ)の本門寺をも兼ねた

りしが、弟子日像に二寺を譲りて退隱し、
文保二年、池上の南窪に庵居し、元應二年
寂す。年七十八。〔註〕國と。

にちらん 日蘭「名」(地)日本國と和蘭
にちりん 日輪「名」(佛)たいやう(太陽)
に同じ。(佛教にては、日天子の宮殿の外
貌なりと説く)(月輪(げつりん)に對し)

にちりんさう 日輪草「名」(植)ひまわり
(向日葵)に同じ。

にちりやう 日粮「名」古、圖書寮
等に、日、大炊寮(おほいけ)の飯を賜ひしこ
と。日料(にちりょう)。

にちる 動上「自」色道大鑑に「にちる。
ねちるに同意。五音相通なり」とあり。ね
だり事を言ふ。にち参照。追善清十郎奴能繼
「佐保姫にいかなる奴(やつ)かくどくらん
(さいふ)に役みそめてやにちる千話文(せん
ご)」。心中萬葉集「さあ證據を出せとにち
れば」。

にちれう 日料「名」にちりやう(日粮)に同
にちれん 日蓮「名」(人)日蓮宗の
開祖。安房國小湊(こみなと)の人。實名(なりな)重
忠の子。十二歳の時、國內なる清澄(きよさだ)
寺に入り、十六歳(といふ)に説に十八歳(といふ)薙髮し
て、蓮長といひ、後、日蓮と改む。二十一
歳、比叡山に登りて、天台の玄旨に通じ、
法華經所説の真理に基きて、當時流行の
諸佛教を邪法と斷ず。三
十二歳、故郷に歸省し、地
頭の迫害に遭ひて鎌倉に
入り、立正安國論を
草して、執權
北條時頼に
呈したれど
も顧みられ
ず、ますます諸宗
を誹謗せしため、北條
時宗の命にて、龍口(りゅうぐち)
に斬られんとせしが、輕減せられて、佐渡
に流さる。時に年五十。建長十一年赦さ
れ、甲斐國身延(みん)山に住し、弘安五年武
藏國池上(いけがみ)に赴き、その十月寂す。年
六十一。上足に、六老僧、又十八中老僧



(にちれん)

あり。その遺文に、高祖遺文あり。大正
十二年立正(りっしやう)大師の號を勅號せらる。
にちれん 日蓮宗の略。

にちれんき 日蓮忌「名」おめい(御影供)
に同じ。

にちれんじやうにん 日蓮上人「名」(人)
にちれん 日蓮の敬稱。

にちれんじゆう 日蓮宗「名」(佛)佛
教の一派。日蓮の創めしもの。事理不二
なるを以て、一心に妙法蓮華經の題目を
唱ふれば、一經所詮の諸法實相の功德、自
ら圓融して、即身に常寂光(じやうじやうくわう)
を成(なり)ずといひ、他宗の如く、成佛のみ
を最終の目的とすることなく、凡夫の身
直ちに佛として、各自、分に應じて、社會
に活動すべきを説き、又、天台宗を、迹門
(しやくもん)と評し、我は本門(ほんもん)本化(ほんけ)の法華を弘めしもの
といへり。現今は日蓮宗顯本法華宗本
門宗本門法華宗法華宗本妙法華宗不
受不施派不受不施講門派の八派に分る。
經宗。題目宗。唱題宗。法華宗。日宗。
にちれん 日蓮宗の一派。甲斐國
身延(みん)山久遠(きよとん)寺を本山とし、初
身延派といひ、又會て一致派と稱せしを、
明治九年今の名に改む。日蓮を初代とし、
日向(みか)を第二代とす。一致派の名は、
法華經中の本門と迹門(しやくもん)との間に勝
劣の差を設けざるによる。廣義の日蓮宗
中、他の七派は、それぞれ小異はあれど
も、すべて、迹門未得道の説を主張する勝
劣派に屬す。

にちれんじゆうこうもんは 日蓮宗興門
派「名」(佛)こもんは(興門派)を見よ。

にちれんじゆうふじは 日蓮宗富士派
(名)(佛)ふじは(富士派)を見よ。

にちれんじゆうき 日蓮主義「名」日蓮の
教義に基き、凡夫の身そのまゝ佛たる眞
理に立脚し、生命改造の信念の下に、勇猛
精進の氣魄を以て、文化宣傳の勢力たらし
んことを期する主義。

にちろ 日露「名」(地)日本國と露西亞
日露の役(にちろ)「名」にちろせんさう(日露

戰爭)に同じ。

にちろく 日録「名」にき日記に同じ。

にちろけふく 日露協約「名」明治四
十年七月三十日、同四十三年七月四日、大
正元年七月八日の三回に締結せられたる
日露兩國締結の協約。第一回のは、兩
國締結の條約より生ずる一切の權利を互
に尊重し、支那の領土保全列國の機會均
等主義を支持すべき旨を約し、第二回の
は、滿洲に於ける、各自鐵道の改善聯絡、
業務整備のため、相互に友好的協商を興
へ、且つ從來、締結の一切の條約約定に基
き、滿洲の現状を維持尊重すること、及び
右現状侵害の事件發生の場合には、隨時
商議すべき旨を約し、その他に、附屬秘密
協約あり。第三回は、全然秘密に付せら
れたれども、滿洲及び蒙古に於ける兩國
の利益範圍を分るものといふ。にちろ
けふく(日佛協約)参照。

にちろせんさう 日露戰役「名」次條に
にちろせんさう 日露戰爭「名」北清事
件後、露國兵を滿洲に進めて、東洋の平和
維持を欲する我國の誠意を無視せしよ
り、明治三十七年二月三日、國交を斷絶
し、爾後約一年半繼續し戦争。陸には、
三十八年三月二日より十日に亘るは奉
天の大戦、海には、同年五月二十八兩日
に於ける日本海の大戦に至るまで、概ね
我國の連捷に歸し、米國大統領ロオゼベ
ルト(Roosevelt)の斡旋により、九月一
日休戰條約成立し、十月十六日、本條約の批
准交換完了し、我國にては、十月二十三日
に於ける横濱沖の大觀禮式、三十九年一
月三十日の東京青山原頭に於ける大觀兵
式を以て、その終を告げたり。はちろつすて
らう(ポツダム條約)参照。

にちろき 日域「名」(地)魏書の李約子傳
に「世祖太武皇帝、英猷自天、籠三單日
域」とあり。日光の照す區域。天下。日
「前漢書の楊雄傳に「東征三域」とあり
て、註に「日域、日出之處也」とあり。太
陽の出づる處。日域。我國の異稱。じつ
ろき。日域。日出國。平遙日域に行きて、
那智山といふ所に赴けり」。

費用。にづくりちん。

にづくわ 日貨【名】日本より生産輸入したる貨物。「日貨排斥」

にづくわ 日課【名】日毎に割りあつる仕事。日目の課程。

にづくわ 日會【名】「天」『英Solidary』同じ日が同じ週日に當る時の、一回循環し來る期間、即ち二十八年間。

にづくわ 日光【名】「日」のひかり。太陽の光線。ひ。「佛」にちくわ(日光)に同じ。

にづくわ 日光【名】「地」明治の初年設置の縣の一。二年始めて、下野國日光に置き、これより先、元年同國眞岡に置きし眞岡縣をも併せ、三年喜連川(喜)藩を廢して、亦、これを併せ、四年七月藩を縣に改正し、十一月同國壬生(吹上)佐野足利の四縣及び上野國館林(喜)縣も併せて、栃木に栃木縣を置き、下野國足利、利、寒川、安蘇、都賀の五郡と上野國田邑(喜)新田の三郡とを管し、六年宇都宮(喜)縣を併せ、九年上野國三郡を群馬縣に移し、十七年、治所を宇都宮に移ししもの、即ち今日の栃木縣なり。「地」

日光山、もと二荒(喜)山と稱せしを言讀して、日光の雅字を充てたるもの『下野國上都賀(喜)郡日光山の麓大谷(喜)川の畔にある町。山水秀麗にして、二荒山神社、東照宮等あり。附近に、中禪寺湖及び華嚴峯、見霧降など諸瀑の勝あり。』にづくわ(日光廟)の畧。

日光を見れば結構を言ふ勿れ【句】次條に同じ。「諺語」

日光を拜まぬ内は結構と言ふな【句】下野國日光の廟を、天下無二の美觀なりと譽めていふ語。「諺語」

にづくわ いたや 日光板谷【名】「植」めいけつ(て)明月(植)に同じ。

にづくわ づつき 日光漫疏【名】「植」ふち(づ)藤(漫疏)に同じ。

にづくわ おみやはん 日光御宮番【名】にづくわ おみやはん 日光奉行の舊稱。

にづくわ おみやはん 日光御宮守【名】にづくわ おみやはん 日光御宮守【名】

前條に同じ。

にづくわ かいだう 日光街道【名】「地」徳川時代の五街道の一。江戸より下野國日光までは、奥州街道と共通す。

にづくわ おくもん 日光學問所【名】萬延元年、下野國日光に設置し、日光山内の各寺院坊中を始とし、各樂人・社家及び百姓町人に至るまで有志の者を入所せしめし、幕府直轄の學問所。

にづくわ かい 日光櫻【名】「植」いまが(今)今(櫻)に同じ。

にづくわ からまつ 日光唐松【名】「植」はるからまつ(春唐松)に同じ。

にづくわ ぎく 日光菊【名】「植」いはぎ(岩菊)に同じ。

にづくわ ぎやう 日光鏡【名】へりおすた(岩鏡)に同じ。

にづくわ げた 日光下駄【名】日光の櫓の材にて作り、竹の皮の表を附けたる、粗造なる下駄。下野國日光より製出す。

にづくわ くてん 日光御殿番【名】にづくわ おみやはん 日光奉行を見よ。

にづくわ さん 日光山【名】「地」なんた(さん)男體山に同じ。『下野國上都賀(喜)郡の西北部にある山。男體(喜)大眞名子(喜)・小眞名子(喜)・白根・月(喜)山女貌(喜)・赤雄(喜)の群山の總稱。那須火山脈の一部。高きは、白根山第一なれども、ほぼ中央に位して、端麗なる火山の特相を發揮せるものは、男體山なり。山中に、東照宮・中禪寺湖等あり、鬼怒(喜)大谷(喜)・渡良瀬(喜)の諸川、この間に發し四方に放流す。』

日光山の守護職【句】にづくわ さん(日光山守護職)に同じ。

にづくわ さん 日光山縁起【名】『書』下野國日光山中の二荒山(喜)神社・中禪寺・瀧尾神社・寂光權現等の事蹟を述べたる縁起。五卷。詞書は、弘仁九年に成りし補陀洛山(喜)建立修行日記、天長二年に成りし瀧尾建立當山日記、齊衡二年に成りし圓仁和尙入當山日記、三月會記等に據り、東山法皇の添削を經、初段

は法皇の宸筆、その他は、皇族公卿の寄合書。繪は狩野洞春の筆。享保五年完成す。一名、補陀洛山縁記。『さうせう(えん)き(東照宮縁起)に同じ。』

にづくわ さん 日光山守護職【名】にづくわ おみやはん 日光奉行の舊稱。

にづくわ じ 日光寺【名】上總國市原郡月田村字風月にある寺。聖武天皇の御宇、光明皇后の創建。

にづくわ じ 日光羊齒【名】「植」いは(て)て(岩人)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光石南【名】「植」ひめじやくなげ(姫石南)に同じ。

にづくわ づつ 日光漬【名】鹽押(づ)にして、種子を除きたる唐辛(喜)を、細く切り、紫蘇の葉にて巻きて、鹽を振り、二十日餘漬けたる上、日に干して、壺に貯へたる食品。下野國日光にて製し初めしもの。日光ちうがし。

にづくわ じやくなげ 日光殿【名】「佛」にちくわ(日光殿)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光塗【名】春慶塗の一種。下野國日光町に産するもの。製品の種類は、膳・厨・箱・盆・鉢等。粗製なれども、堅固にして、雜用に適す。慶長年中、徳川家康が工人に命じて製せしめしに始るといふ。

にづくわ じやくなげ 日光奉行【名】徳川幕府の遠國奉行の一。老中管轄の下に、専ら下野國日光東照宮警衛の任に當り、法會・祭禮等を掌り、上野・下野の兩國を管し、日光町の政務を行ひしもの。定員は二人、屬吏に支配組頭二人、支配吟味役一人、日御殿番四人、同心三十六人あり。初、半年毎に交替せしが、寛政六年以後、一年交替となり、文政以後、一年は必ず日光に在住す。舊稱、日光定番、日光山守護職、日光御宮守、番日光御宮守。元祿十三年この名に改めらる。

にづくわ じやくなげ 日光附子【名】「植」や(夜)夜(附子)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光廟【名】下野國日光にある徳川家康及び家光の靈廟。

にづくわ じやくなげ 日光菩薩【名】「佛」にちくわ(菩薩)に同じ。『月光菩薩に對して。』

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光祭【名】下野國日光町なる二荒山(喜)神社又は東照宮の祭禮。前者は四月十三日、後者は六月一日行はる。『だけ松(祭)に同じ。』

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にづくわ じやくなげ 日光松【名】「植」からまつ(日光松)に同じ。

にやがら

となる

にやがら

にやがら

にやがら(鬼矢幹に同じ。
「にやがら」よく日光浴(名)日光を身體に直射せしめ、その紫外線的作用を利用して、健康を増進せしむること。肺病患者などに、特に奨励せらる。

にやがらふせき日光燭石(名)「燭」下野國日光山・足尾山邊より産出する、一種の燭石。質よからず。

にやがらん日光蘭(名)「植」しゆるさ(棕櫚草)に同じ。

にやがらんぼそば日光蘭細葉(名)「植」前條に同じ。

にやがられいひ日光例幣使(名)徳川時代に、下野國日光なる東照宮の四月十六日の例祭に奉幣のために差遣せられし勅使。京都より例幣使街道を経て、四月十五日、日光に著し、翌日、拜殿に幣帛を奉り、宇都宮を経て、江戸に出て、直ちに路を東海道に取りて歸洛せり。

にやがらん日光槐(名)日光塗の樹。

にやがらん日官(名)「左傳」桓公十七年の條に「天子有日官、諸侯有日御」とありて、杜預の註に「皆典三歷數」者」と見ゆ。にやが(日者)参照。古支那にて、天文を司りし官吏。日本官史。

にやがもん日華門(名)古の内裡の春興殿と宣陽殿との間に在り、東面して、月華門と相對し、紫宸殿の大庭に出入する時通過すべき小門。左近衛の陣座に充てられしより、左近衛の陣とも呼びたり。

にやが煮附(名)煮附くること、又、煮附けたる食品。にしめ。「よ」。

にやがい日景(名)にちえい(日景)を見につけい日計(名)日目の計算又は計畫。日計足らずして歳計餘(ひ)有り。

にやが「莊子の庚桑楚篇に「今吾日計之而不見、歲計之而有餘」、文子の精誠篇に「其起福也、不見其所以而禍起、其除禍也、不見其所以而禍除、計之不得、察之不虛。日計不足、歲計有餘」とあるに本づく。日目の計算よりすれば損失なれども、結局は利益

となる。「諺語」
につけい肉桂(名)にけい(肉桂)を見につけいへう日計表(名)毎日の計算を表示せるもの。

につけうま荷附馬(名)荷を貢へる馬。荷駄。若馬、町人百姓も、荷附馬を引きのけ「よめあ」行き行きて、荷附馬の追分に至れば」。

につけがはせ荷附爲替(名)「商」にがはせ(荷爲替)に同じ。

につけさかな煮附肴(名)煮附けたる肴。八笑人「こなたで一つ食べよう」と存じまして、煮附肴を一種持参しましたたが」。

につけもの煮附物(名)煮附けたる食品。鰯、鰯、半紙十帖、煮附物一重」。

につける(英訳)「名」「鑛」金屬元素の一。砒素と化合して産す。色は銀に似て微に黃色を帯び、比重は八九にして、鐵よりやや重く、銅と伯仲す。他の金屬に混合して用ひ、又、空氣に酸化して、鑄を生ずること少く、容易に光澤を失はざるにより、鍍金に用ふ。硬くして、融點高く、鐵の如く少しく磁性あれども、熱すれば、その性を失ひ、且つ展性延性を有す。その合金に白銅、洋銀等あり。價は銀よりも廉し。白銅(銀と銅の合金)に同じ。

につけるいたニッケル板(名)ニッケルを板状にしたるもの。

につけるえんニッケル鹽(英訳)nickel salt(名)「化」酸の元素を、ニッケルにて置き換へたるもの總稱。

につけるニッケル鋼(名)「英訳」nickel steel(名)約百分の三のニッケルを含める鋼鐵。特殊鋼材中、主要なるものの一。抵抗力強くて、用途は大砲の地金、プロペラの軸、汽車自動車等の車軸、水雷防禦網に用ふる針金、軍艦の汽管艦部に用ふる管又は甲板鐵等、頗る廣し。

につけるくわニッケル華(名)「鑛」「英訳」nickel ore(名)ニッケルの諸鑛石の分解にて生ずる、綠色の鑛物。

につけるどうニッケル銅(名)はくどう(白銅)に同じ。
につて莞爾(貌)にや(和やか)に同じ。平造俊綱、莞爾(と)笑ひて」。

につて莞爾(貌)にや(和やか)に同じ。平造俊綱、莞爾(と)笑ひて」。

につてう日工(名)日やと仕事。ひてま。につく。

につてう日功(名)日目の手間料。三代宣長「諸司、諸衛府仕丁、衛士日功、收」長年錢二十文」。

につて莞爾(貌)にや(和やか)に同じ。狂言「那須與一」列官たのもしげに見やりたまひ、につてこつこつ笑ひたまふ」。

につて莞爾(貌)にや(和やか)に同じ。伊勢國の方言。

につて莞爾(貌)にや(和やか)に同じ。似つこらし(形)につかはし(似附かはし)に同じ。百日食我「入りもせぬ長口上、紛らわして通らんとや、熊野山にて見たると、似つこらしく言ひまはす」無八軒屋層不思議立つたを、似つこらしう嘘(うそ)つて」。

につて莞爾(貌)にや(和やか)に同じ。にやがらん煮轉(名)にや(和やか)に同じ。煮轉の音便。

につて莞爾(貌)にや(和やか)に同じ。にやがらん日想觀(名)「佛」にちやうど日想觀に同じ。

につて莞爾(貌)にや(和やか)に同じ。にやがらん日想觀(名)「佛」にちやうど日想觀に同じ。

につて莞爾(貌)にや(和やか)に同じ。にやがらん日想觀(名)「佛」にちやうど日想觀に同じ。

につて莞爾(貌)にや(和やか)に同じ。にやがらん日想觀(名)「佛」にちやうど日想觀に同じ。

につて莞爾(貌)にや(和やか)に同じ。にやがらん日想觀(名)「佛」にちやうど日想觀に同じ。

につて莞爾(貌)にや(和やか)に同じ。にやがらん日想觀(名)「佛」にちやうど日想觀に同じ。

調庸物、本司勘訖、諸司會集之日、使國司引郡司、進就版、進日收文上」。

につてう日州(名)「地」ひらが(日向)に同じ。にやがらん日週運動(名)「天」まにやがらん(毎日運動)に同じ。

につてう日就月將(句)「詩」經の周頌敬之篇に出づ。日に就(り)月將(る)む義。學問又は事業などの、日毎月に進歩すること。

につて日誌司(名)明治元年閏四月、議定官の被管として設けられ、翌年五月行政官に屬し、同年七月行政官と共に廢せられし役所。職員に知司事判司事權判司事ありて、太政官日誌の編輯・印行に關する事を掌りしもの。

につて入室(名)にや(入室)に同じ。慶應義塾弘法大師は、……善無畏(と)不空より五代、入室の孫弟なり」。

につて日神(名)ひのかみ(日神)に同じ。太平記日神と申すは、天照大神(と)月讀(と)の明神なり」。

につて日新(名)「大學」に「苟日新、日日新、又日新」とあり。毎日に、舊來の惡習を去りて、自ら新になりゆくこと。

につて日進(名)日毎に進歩すること。「日進の功」。

日進月歩(句)日毎月毎に進歩すること。常に發達すること。

につて日清(名)「地」日本國と清國日清の役(と)にや(にやせんさう)日清戦争)に同じ。

につて日新館(名)江戸時代に、會津藩内に設けたる學校。寛永二十年藩祖松平正之の文教を布きしに創り、初の名は稽古堂、元祿三年町講所といひ、天明八年この名に改む。教科は、漢學・算學・筆術・醫學後に洋學を加ふ。在學者の年齢は十二歳より十八歳まで。

につて日心視差(名)「天」「英訳」heliocentric parallax(名)の惑星に對して、差視を生ずる二つの場所の一を、太陽の中心と假定したる時の方向の差。恒星

の研究に必要なり。(地心視差に對して)
に「しんせんえき」日清戰役「名」次條に同じ。

に「しんせんえき」日清戰爭「名」明治二十七年六月より二十八年四月に亙りたる日清兩國間の戰爭。朝鮮京城駐劄の清國公使袁世凱、朝鮮の君臣を壓伏して、同國を屬邦たらしめんとし、二十七年四月、同國に東學黨の亂あるや、韓廷、討伐の力無きに乗じ、救援の兵を出して、明治十七年の天津條約を破りしより、七月二十五日の豐島(豊島)沖の海戰、同二十九日の牙山の陸戰を経て、八月一日、宣戰の大詔發せられ、翌年三月に至るまでに、直隸灣の海港並びに遼河の南岸一帯及び威海衛澎湖島を占領し、清國遂に屈服して、四月十七日、塘沽條約を締結す。ばくわんてらや(馬關條約)參照。

に「しんせんえき」日心位置「名」「天」「英Heilo-centro position」太陽の中心より見たるものと假定したる、一天體の位置。(地心位置に對して)

に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。

に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。

に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。

に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。

に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。

に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。

に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。に「しんせんえき」日者「名」「史記の日者傳に」ト筆占候時日、通名日者「名」あり。

あき。(日没に對して)
日出の邦(日)「句」「元史の伯顏傳に」梯航日出之邦、冠帶月支之域」とあり。東方に在る國。「地」我日本國の異稱。日東。日域。

に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。

に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。

に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。

に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。

に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。

に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。

に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。

に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。

に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。に「しんせんえき」日出國「名」前條に同じ。

十五度二十一分以内に在る時は、必ず生じ、十八度三十一分以外に在る時は生ぜざる、その二つの境界の間の角。この角の間に、太陽の中心の在る時は、日食の生ずる場合と、生ぜざる場合とあり。

に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。

に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。

に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。

に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。

に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。

に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。

に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。

に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。

に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。に「しんせんえき」日所行「名」毎日の所作。

朝の忠臣義貞、義助、同郡鹿屋の地に居りて、(陽屋姓を稱す)義興等、皆その裔にして、支流に、山名・里見・田中・徳川・吉良田(吉良)・大館(大館)・堀口・岩松等あり、又、義重の弟義康は、足利氏の祖たり。岩松氏は、江戸時代、新田郡の地を食み、頗る優遇せられしが、明治維新後、新田氏に復し、男爵を授けらる。

に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」。

に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」。

に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」。

に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」。

に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」。

に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」。

に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」。

に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」。

に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」に「しんせんえき」日帶食、日帶蝕「名」。



(りぎたつに)

につたな

の命に因り、密かに、和田義盛と共に、北條時政を誅せんとし、事成らずして加藤景廉に殺さる。

につたなかくろ 新田中黒「名」『新田氏の定紋なるよりいふ』おほなかくろ(大中黒)に同じ。

「に同じ」

につたひとつびき 新田一引「名」前條に同じ。

「に同じ」

につたや 新田屋「名」東海道川崎驛に在りし掛茶屋。和合「六郷の川端」へ近づく。……この驛の内に、船は、向の岸に著く。……新田屋が萬年屋へ連れて行(つけばい)。

につたやま 新田山「名」『地』かなやま(金)に同じ。

につたよひおき 新田義興「名」『人』武將。幼名は徳壽丸。義貞の第二子。後村上天皇の寵を得て、左兵衛佐となり、源顯家に従ふ。顯家の薨後、その弟顯信に従ひて、屢は尊氏の軍と戦ひ、大にこれを破る。延文三年(山國清)の巨竹澤良衛に、武藏國在原(山)郡矢口(山)の渡にて俾り殺さる。につたじんじや(新田神社)に參照。

につたよき 義田義貞「名」『人』武將。通稱は小太郎。上野國新田郡の人。新田義重第八世の孫。元弘の亂に、南朝に屬し、兵を郷里に起し、元弘三年鎌倉に進みて、北條氏を全滅せしめ、或は皇太子恒良(尊良)と、兩親王を奉じ、越前國金崎(山)城に據りて、足利高經と戦ひ、功多し。延元三年越前國藤島島の戰に、流矢に中り、自ら劔にて死す。年三十八。ふちしまじんじや(藤島神社)に參照。

につたり 「貌」にに同じ。

につち 丹土「名」赤色の土。「古語」に「ちもさつちも」二進も三進も「句」に「いかにしても、金錢の融通のつかぬ形容。うごきが取れず。窮す。

につちゆう 日中「名」ひなか。晝間。白晝。「史記の平原君傳に「日出而晝之、日中不決」とあり。日の中(ひ)する時の義」日が中天に至りたる時。正午。「佛」

ろく(六時)を見よ。源氏書つかた、日中の御加持果てて」

につちうきやうじ 日中行事「名」一日の間にふべき事。「書」禁中に於ける日中の行事及び毎月の月奏・祭祓の事などを記せるもの。一卷。後醍醐天皇の御撰。

につちやく 日直「名」毎日宿直すること。中より選ばれて任命せらるる勘當。舍營大尉大尉隊に在りては、佐官これに任じ、風紀衛兵及び外衛兵の長官となる。ぶたいに「ちやく」部隊日直に參照。

につちろく 日知録「名」『書』書を読み得る所あれば、隨ひて筆記せるによりて、大成せる隨筆。三十二卷。清の黃汝成、これが筆註を作り、日知錄集釋三十二卷を著せり。

につつじ 丹躰躰「名」『種』躰躰の最も普通なる品種。花色は濃紅又は淡紅にして、五月(一)躰躰と露島躰躰とはその變種なり。をかつつじ。あかつつじ。高葉「龍田路の岡邊の路に丹つじの句はむ時の」

につつじ 苜蓿「名」『種』みましきみ(深山樺)に同じ。和名「苜蓿、通豆豆」。一云、手加豆豆之」

につちめ

につちうきやうじ 日中行事「名」一日の間にふべき事。「書」禁中に於ける日中の行事及び毎月の月奏・祭祓の事などを記せるもの。一卷。後醍醐天皇の御撰。

につちやく 日直「名」毎日宿直すること。中より選ばれて任命せらるる勘當。舍營大尉大尉隊に在りては、佐官これに任じ、風紀衛兵及び外衛兵の長官となる。ぶたいに「ちやく」部隊日直に參照。

「に同じ」

につちろく 日知録「名」『書』書を読み得る所あれば、隨ひて筆記せるによりて、大成せる隨筆。三十二卷。清の黃汝成、これが筆註を作り、日知錄集釋三十二卷を著せり。

につつじ 丹躰躰「名」『種』躰躰の最も普通なる品種。花色は濃紅又は淡紅にして、五月(一)躰躰と露島躰躰とはその變種なり。をかつつじ。あかつつじ。高葉「龍田路の岡邊の路に丹つじの句はむ時の」

につつじ 苜蓿「名」『種』みましきみ(深山樺)に同じ。和名「苜蓿、通豆豆」。一云、手加豆豆之」

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

「に同じ」

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

「に同じ」

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

につつじ 日佛「名」『地』にちふつ(日佛)に同じ。

にっぽんこうげふきんかう 日本興業銀行「名」にほんこうげふきんかう(日本興業銀行)に同じ。

にっぽんさる 日本猿「名」(動)にほんさる(日本猿)に同じ。

にっぽんさるもん 日本左衛門「名」(人)強盗。本名は濱島庄兵衛。もと京都の浪人。諸國を横行して、頗る人を悩ましし。幕府の搜索嚴重にして、遂に京都の町奉行永井丹波守に自首し、江戸町奉行館勢(肥後守の手を経て、延享四年、その徒黨六人と共に、遠江國見附(一)に刑せらる。年二十九。

にっぽんしん 日本寺「名」安房國安房郡保田(一)町(一)の山腹にある曹洞宗の寺。本尊は藥師佛。聖武天皇の勅奉じて、僧行基創立。五百羅漢の石像有るによりて、俗に羅漢寺と稱す。境内、今は公園となれり。下總國香取郡中村にある日蓮宗の寺。四十四箇本山の一。正東山と稱す。開山は日常といふ。

にっぽんじん 日本人「名」にほんじん(日本人)に同じ。狂言唐人相違「なうなう」日本人をりやるか。「刀」に同じ。

にっぽんたう 日本刀「名」にほんたう(日本刀)に同じ。日本魂「名」にほんだま(日本魂)に同じ。

にっぽんちゆうけ 日本虫「名」にほんちゆうけ(日本虫)に同じ。日本血吸蟲病「名」にほんちゆうけきぶ(日本血吸蟲病)に同じ。

にっぽんばれ 日本晴「名」にほんばれ(日本晴)に同じ。萬葉千載の日本ばれの景色より雨の夜ゆかし唐崎の松

にっぽんふう 日本風「名」にほんふう(日本風)に同じ。「本米」に同じ。

にっぽんみなみあるぶす 日本南アルプス「名」(地)にほんみなみあるぶす(日本南アルプス)に同じ。

にっぽんやくきよくほう 日本藥局方「名」にほんやくきよくほう(日本藥局方)に同じ。

にっぽんらいん 日本ライン「名」(地)にほんらいん(日本ライン)に同じ。

にっぽんらふ 日本蠟「名」にほんらふ(日本蠟)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

にっぽんしん 日本繪師「名」にほんしん(日本繪師)に同じ。

「人」書經の大禹謨篇の疏に「禹承三堯舜二帝、故云「敬承」云、小學紺珠に「二帝堯舜」とあり。支那古代の天子なる堯と舜と。「二帝三王」曰人「小學紺珠に「國語二帝、黃帝炎帝」とあり。黃帝と炎帝と。二帝(五帝)參照。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

二庭を踐む「句」再び嫁入(一)す。

成の、六條家と反目せしに始り、俊成の子定家、一家の歌風を立て、孫爲家に至りて、家學を固め、爲氏その風を襲きしもの。爲家の第二子爲教の後なる京極、第三子爲相(一)の後なる冷泉(一)と共に、歌道流派の一として著れ、殊にその正統として重んぜられたり。爲氏の後、爲世爲定爲遠を經、爲衡に至りて統絶ゆ。にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

にうんじゆ(二條傳授)みことたり(御子左)參照。

upac

織田信長新館を營みて、義輝の弟義昭を置く。尋いて義昭を逐ひ、自ら上洛の居第に充つ。天正七年歿して、東宮御所とせしより、誠仁親王の居所となり、同十年本能寺の變に、信忠、妙覺寺よりこれに入り、皇太子を禁裏に移し奉り、賊に圍まれり。自盡し、城も亦兵火のために廢墟となれり。一名、二條御所。二條御所(二條離宮)を見よ。

にとうじやうだい 二條城代「名」徳川幕府の職制の一。京都二條城の警衛を掌りしもの。寛永二年設置、與力十騎同心三十人、これに屬せしが、元祿十二年廢したり。にとうじやうばん(二條城番)参照。

にとうじやうちやうばん 二條城定番「名」次條に同じ。

にとうじやうばん 二條城番「名」徳川幕府の職制の一。京都二條城の城門を警衛せしもの。京都所司代支配に屬し、定員も一人なりしが、元祿十二年二條城代の廢止後二人となり、各與力十騎、同心二十人、これに屬したり。一名、二條城定番。二條城門番頭・二條門番頭・二條定番。にとうじやうばん(二條在番)参照。

にとうじやうもん 二條在番参照。

にとうじやうもん 二條城門番頭「名」前條に同じ。

にとうじやうばん 二條俊成「名」(人)にとうじやうばん(二條俊成)を見よ。ふちばら(二條俊成)に同じ。

にとうじやうばん 二條高倉殿「名」にとうじやうばん(二條高倉殿)を見よ。ふちばら(二條高倉殿)に同じ。

にとうじやうばん 二條爲家「名」(人)にとうじやうばん(二條爲家)を見よ。ふちばら(二條爲家)に同じ。

にとうじやうばん 二條爲氏「名」(人)にとうじやうばん(二條爲氏)を見よ。ふちばら(二條爲氏)に同じ。

にとうじやうばん 二條定家「名」(人)にとうじやうばん(二條定家)を見よ。ふちばら(二條定家)に同じ。

にとうじやうばん 二條定番「名」にとうじやうばん(二條定番)に同じ。

にとうじやうばん 二條定番「名」にとうじやうばん(二條定番)に同じ。

にとうじやうばん 二條定番「名」にとうじやうばん(二條定番)に同じ。

にとうじやうばん 二條定番「名」にとうじやうばん(二條定番)に同じ。

upac

にとうじやうばん 二條傳授「名」僧頼阿、二條家の門に出て盛名あり、二條良基と力を協せて、二條家の歌風の興隆を計り、頼阿の後、經賢孝、孝忠、孝孝を経て、常祿に至り、常祿二條家の正統を得たりと稱せしに因る。古今傳授の一。東(常祿)の唱道に傳り、宗祇、三條西實隆、同公條、同實登、細川玄旨、法印と相傳へ、八條中院(宇)鳥丸の諸家に傳はりしもの。二條家傳。

にとうじやうばん 二條天皇「名」(人)二條殿を皇居とせられしよりいふ。第七十八代(天皇)。御名は守仁(仁)。後白河天皇の第一の皇子。御母は大納言藤原家經の女、贈皇太后懿子。御在位七年(紀元一八一九年—一八二五年)。永萬元年崩す。壽二十三。

にとうじやうばん 二條殿「名」藤原道長の、京都二條の南、押小路(宇)の北、高倉の西、東洞院(宇)の東に建てし邸宅。その子、教通(宇)これを傳へしが、後冷泉天皇、大内裏焼失のため、ここに移りて御所とせられ、白河天皇に傳はり、崇徳天皇の里内裏となりて、一旦焼失し、後、後醍醐天皇、龜山天皇、後宇多天皇等傳領せられ、弘安元年また焼失し、同六年更に皇居となり、後、大覺寺派に傳はり、鎌倉時代まで存せり。一名、二條高倉殿。又、内裏としては、二條の内裏と呼ばれたり。五攝家の一なる二條家の第宅。押小路(宇)の南室町の東に在り。南北朝の初、光明、崇光二主の居第となり、又その泉殿は、光嚴院退隱後の御所たりしことあり。一名、押小路烏丸殿、押小路殿。目(人)ふちばら(藤原道隆)に同じ。目(人)ふちばら(藤原道隆)に同じ。目(人)ふちばら(藤原道隆)に同じ。

にとうじやうばん 二條道隆「名」(人)にとうじやうばん(二條道隆)に同じ。

にとうじやうばん 二條道隆「名」(人)にとうじやうばん(二條道隆)に同じ。

にとうじやうばん 二條道隆「名」(人)にとうじやうばん(二條道隆)に同じ。

にとうじやうばん 二條道隆「名」(人)にとうじやうばん(二條道隆)に同じ。

にとうじやうばん 二條道隆「名」(人)にとうじやうばん(二條道隆)に同じ。

にとうじやうばん 二條道隆「名」(人)にとうじやうばん(二條道隆)に同じ。

にとうじやうばん 二條道隆「名」(人)にとうじやうばん(二條道隆)に同じ。

にとうじやうばん 二條道隆「名」(人)にとうじやうばん(二條道隆)に同じ。

にとうじやうばん 二條道隆「名」(人)にとうじやうばん(二條道隆)に同じ。

upac

にとうじやうばん 二條后「名」(人)ふちばら(藤原高子)に同じ。

にとうじやうばん 二條内裏「名」にとうじやうばん(二條内裏)を見よ。二條内裏(二條殿)を見よ。二條内裏(二條殿)を見よ。

にとうじやうばん 二條武具奉行「名」にとうじやうばん(二條武具奉行)を見よ。

にとうじやうばん 二條武具奉行「名」にとうじやうばん(二條武具奉行)を見よ。

にとうじやうばん 二條武具奉行「名」にとうじやうばん(二條武具奉行)を見よ。

にとうじやうばん 二條師基「名」(人)ふちばら(藤原師基)に同じ。

にとうじやうばん 二條良貴「名」(人)ふちばら(藤原良貴)に同じ。

にとうじやうばん 二條良貴「名」(人)ふちばら(藤原良貴)に同じ。

にとうじやうばん 二條良基「名」(人)朝臣。本姓は藤原。關白道平の嫡男。光明、崇光後光嚴後關白の四朝に歷事して、北朝に重きをなし、關白氏の長者從一位、太政大臣に進み、二條關白と稱せらる。聰明博學にして、詞藻に富み、和歌を善くす。僧頼阿と和歌の奥旨を論じ、墨問賢註を著し、又、連歌の書苑政波(宇)集を撰す。嘉慶元年薨す。年六十九。にとうじやうばん(二條傳授)参照。

にとうじやうばん 二條流「名」筆(宇)の一流。藤原敦家四世の孫定能を祖とす。楊梅流と共に應仁の頃に至りて絶ゆ。

にとうじやうばん 二條堀河「名」京都都市上京區二條堀河の西岸にある離宮。舊稱、二條城。慶長七年徳川家康の築造に係り、寛永三年後水尾天皇の行幸あり。又、將軍上洛の時の駐在所となり、慶應三年徳川慶喜此處に在りて、大政を奉還せり。東西五町餘、南北四町餘、面積八萬〇三百餘坪、本丸と二ノ丸とに分れ、結構壯麗なり。今は宮内省の所管に歸し、明治十七

にとうじやうばん 二條堀河「名」京都都市上京區二條堀河の西岸にある離宮。舊稱、二條城。慶長七年徳川家康の築造に係り、寛永三年後水尾天皇の行幸あり。又、將軍上洛の時の駐在所となり、慶應三年徳川慶喜此處に在りて、大政を奉還せり。東西五町餘、南北四町餘、面積八萬〇三百餘坪、本丸と二ノ丸とに分れ、結構壯麗なり。今は宮内省の所管に歸し、明治十七

にとうじやうばん 二條堀河「名」京都都市上京區二條堀河の西岸にある離宮。舊稱、二條城。慶長七年徳川家康の築造に係り、寛永三年後水尾天皇の行幸あり。又、將軍上洛の時の駐在所となり、慶應三年徳川慶喜此處に在りて、大政を奉還せり。東西五町餘、南北四町餘、面積八萬〇三百餘坪、本丸と二ノ丸とに分れ、結構壯麗なり。今は宮内省の所管に歸し、明治十七



upac

年以來離宮に充てらる。

にとうじやうばん 二條院「名」古、京都市二條の北、堀河の東にありて、初、皇太后隱子(藤原基經の女、醍醐天皇の皇后)の御領なりしを、盛明(宇)親王に傳へ、更に藤原兼家に傳へ(宇)明(宇)法興院参照。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

にとうじやうばん 二條院「名」(人)にとうじやうばん(二條院)に同じ。

〔二傳〕の三篇と。

にてん 二傳〔名〕天竺にありし佛像などの支那に傳はり、又更に我國に傳はること。著國生身〔名〕二傳の釋尊、清涼寺におはします。解盤かの如來二傳の御かたみのむつまじきに、嵯峨の清涼寺に詣てり。

にてんりう 二天流〔名〕宮本武藏の法名を、玄信二天といひしに本づくにたうりう〔二刀流〕に同じ。

にてもつかない似ても附かない〔句〕にる(似る)の條下を見よ。

にてもやいても煮ても焼いても〔句〕にる煮るの條下を見よ。

に二都 二都〔名〕二つの都。兩都。〔地〕大和國の平城〔名〕と山城國の平安と。兩都。南北二京。

に二兔 二兔〔名〕二匹の兔。

二兔を追ふ者は一兔をも獲ず〔句〕二匹の兔を追ひかけて、捕へんとする時は、一匹をも捕ふること能はず。

二目的を二途に分くる時は、却つて、その何れをも成し遂げ得ざる〔語〕

に二度 二度〔名〕ふたたび。二回。再度。

二度ある事は三度〔句〕次條の略。

二度ある事は三度ある〔句〕二度まで續きて發生したる事は、大抵、なほ一回反復せらる。物事は再三繰返さるる事多し。〔語〕

二度三度〔句〕たびたび。數回。再三。

二度と再〔句〕ふたたび(再)に同じ。

今後二度と再、斯かる事は致し申さず。

二度の月〔句〕八月十五夜の月と、九月十三夜の月見と。〔後の〕の月參照。

二度の月見〔句〕八月十五夜の月見と、九月の十三夜の月見(後の月見)ともいふ。江戸時代には、十五夜に、他人の家の月見の宴に招かれたる時は、十三夜にも、必ずその家に行くならはしありて、十五夜にのみ行き、十三夜に行かぬを、片月見(片見)とて、忌み

り。俗曲北洲「二度の月見に逢ひとて、見とて、合鏡(あがた)の姿見に」

二度の勤〔名〕一度廢業せる遊女が、再び遊女となること。一度役に立ちし物が、再び需要に充てらるること。

二度の御祝〔名〕齊宮(みよ)の、初齋院(はつさいいん)に入る時、及び野宮(ののみや)に入る時、鴨川の河頭にて行はれし御祝。

にどより 二度入〔名〕三度入より小き土器(かき)。

に二頭 二頭〔名〕二つの頭部。二頭類にさうらびんきや二等郵便局〔名〕郵便局として取扱ふ事務の外、通信大臣指定の區域内に於て、一等郵便局の管理事務の一部を分掌し得るもの。

にさうきへんじ 二等機關士〔名〕一等機關士に次ぐ機關士。

にさうきへんじ 二頭筋〔名〕羅(ら)にさうきへんじの二箇に分裂せる筋肉。

にさうきへんじ 二頭股筋〔名〕羅(Musculus biceps femoris)大腿筋の後側に在りて、下腿の屈折を掌る、一箇の二頭筋。

にさうじん 二等親〔名〕さうじん(等親)にさうじんや二等車〔名〕二等の客車。

にさうじんや 二等症〔名〕軍隊にて、軍人の病氣を三等に分ちたるものの一。職務上の負傷・疾病を一等症とし、花柳病を三等症とするに對して、普通の疾病。

にさうじんや 二等主計〔名〕一等主計に次ぐもの。中尉相當官なり。

にさうじんや 二等測候所〔名〕一等測候所の如く、毎時に測候を行ふこととなく、一日六回を限りて行ふ測候所。

にさうじんや 二等卒〔名〕陸軍の兵卒の、最下に位する者。〔引〕に同じ。

にさうじんや 二頭立〔名〕にさうじんや(二等)にさうじんや 二頭膊筋〔名〕羅(Musculus biceps brachii)上膊筋の前後に在りて、前膊の屈折と、橈骨(てうこつ)の迴後運動とを助くる、一箇の二頭筋。

にさうじんや 二頭馬車〔名〕二頭びきの馬車。

にさうじんや 二頭挽〔名〕車を、馬二頭に挽くこと、又その馬車。二頭だて。

にさうじんや 二等分〔名〕二つに等分すること。

にさうじんや 二等分線〔名〕二(數)ちゆうせん(中線)に同じ。

にさうじんや 二等分點〔名〕二(數)ちゆうせん(中點)に同じ。

にさうじんや 二等邊三角形〔名〕二邊の相等しき三角形。等脚三角形。

にさうじんや 二等邊梯形〔名〕二邊の相等しき梯形。

にさうじんや 二等おぼ子〔名〕老いて、ふたたび小兒のやうになること。

にさうじんや 二度刈〔名〕穀物を、一年の中に、二度刈り取ること。再收。

にさうじんや 二度咲〔名〕かへりき(返咲)に同じ。

にさうじんや 二度櫻〔名〕櫻の一品種。二度咲なるもの、即ち一度咲きたる後、花の中心より、再び蕾生じて、花咲くもの。

にさうじんや 二度十六〔名〕植(いんげん)さき(陰元紅)を云ふ、上總國の方言にさうじんや 二度添〔名〕のちぞひ(後添)に同じ。

にさうじんや 二度炊〔名〕一日の内に、飯を二度炊くこと。二ふたき(二炊)に同じ。

にさうじんや 二度手間〔名〕手間のかかりたる上に、更に手間のかかること。八笑人「まことに、はや、世話の焼けた事だ。どうも仕方が無ええ。二度手間だけれど、船宿でまた漁りなほさうから」

にさうじんや 二度生〔名〕或植物が、一年に二度、果實を結ぶこと。二植(いんげん)さき(陰元紅)を云ふ。「伊勢國・駿河國・伊豆國の方言」

にさうじんや 二度寝〔名〕朝、一度目覺めて、また眠ること。

にさうじんや 二度駈〔名〕謡曲の一。源義經の、鶴越に向はんとし、鶯尾經春を得る物語を前段とし、梶原景時、生田の森の戦に、わが子景季を救ひ出さんために、再び敵中に斬り入りし物語を後段とせるもの。かけ(駈)參照。

にさうじんや 二度拂〔名〕二度の支拂。

にさうじんや 二度吃驚〔名〕初に見聞せし時は、感嘆敬慕のために驚き、後に實際に接するに及び、豫想に反せるにより、更に驚くこと。例へば後姿(ごそ)の好き女、又は聲の麗しき男女の、面貌意外に醜きなど。鷹爪(ていそう)「初なれど二度びっくりや蟲食(むしく)」

にさうじんや 二度ふらう〔名〕植(いんげん)さき(陰元紅)に同じ。

にさうじんや 二度目〔名〕第二回。二回目。にさうじんや(二挺)に同じ。目(さいこん)に同じ。

二度目は馬の鞍〔句〕災の二度目の發生に際しては、馬に鞍を置きて逃ぐる暇すら得られず。〔語〕

にさうじんや 煮鳥〔名〕煮たる鳥、又、煮たる鳥の肉。

煮鳥・生猪(なま)〔句〕食合(せが)を忌む物を列擧してゐる語。〔語〕

にさうじんや 煮取〔名〕せんじ(煎脂)に同じ。鯉節を鹽煮にしたるもの。〔阿波國の方言〕

にさうじんや 煮湯かす〔動四他〕煮て、とろけるやうにす。にくたらす。

にさうじんや 煮りせりん(英 Nitrobenzene)〔名〕「化」濃硫酸と強硝酸との混合液中に、グリセリンを加へて攪拌し、その漸次溶解せる液を、多量の水に注入して得る無色・油狀の重き液。化學的組成よりいへば、硝酸グリセリンにして、甘味を有し、やや辛烈にして、甚しき毒性あり。爆發力強きが故に、ダイナマイト・無烟火藥製造の原料とし、或は、その酒精溶液を、麻醉

ニクニ

鎮痛藥とす。西曆一八四六年、ソブレロ (A. Soltero) の發見に係り、一八六二年、ダイナマイトの發明者ノオベル (A. Nobel) 始めて工業的に製造してより、爆發藥としての用途盛んなり。のべる油。

にぞろりせりんえき ニトログリセリ

液 (Nitroglycerin) 一分を酒精百分に溶解したる液。無色・澄明にして、比重〇・八四、中性の反應を示し、酒精の蒸發によりて濃度を増す時は、爆發の虞あり。劇藥に屬し、二乃至十滴を水に和し、偏頭痛・神經痛・心胸部絞痛・船乗等に用ふ。

にぞろせるるおず (英 Nitrocellulose)

「名」【化】硫酸と硝酸との混合液中にセルロースを浸して得る物。但し浸漬時間の長短、その時の温度、その酸の強弱等によりて、組成を異にし、コロイドの原料となる種類と綿火藥との別を生ず。綿花の如き外觀を呈し、點火すればよく燃ゆ。せうくわめん。

にぞろへんせん (英 Nitrobenzene) 【名】

「化」ベンゼンを、四十度以下の温度にて攪拌しつつ、濃硫酸と濃硝酸との混合液を加へ、後加熱して、多量の水の中に注入する時、器底に沈降する、黄色・油状の重き液。主にアニリンの製造原料とし、又や有毒なれども、苦扁桃油に類する快香あるにより、香料とし、劣等なる石鹼に和して用ふ。にとろへんぞおる油。

にぞろへんぞおるゆ ニトロベンゾール油

(英 Nitrobenzol) 【名】【化】前條に同じ。

にぞろへんぞおるゆ 蝸蠃【名】【動】『みな(蝸)』

の轉、腹足類に屬する軟體動物。殻は厚くして、長さ一寸五分、分、筒状をなし、螺層長く、頂端は尖り、各螺層の中央に、一列の小突起あり、表面に黒き表皮ありて、平滑又は種種の斑紋を有し、一對の觸角を具ふ。我國、九州より中國に互りて、淡水に産し、肉は賤民の食用となり、又、養魚の餌に供せらる。種類多く、デス



(な に)

にたる

トマの中間寄宿主となるものあり。いな。いつまでがひ。かはにな。みな。

にないろ 蝸色【名】『襲(さ)』の色目の

一。表は黄、裏は青。『青黒き染色。

にながはしんさるもん 蝸川新左衛門

【名】『人』次條に同じ。

にながはちかまき 蝸川親當【名】『人』

歌人。帶刀(せ)丞親後の子。通稱は新左衛門。足利幕府に仕へて、伊勢守となる。武術に精しく、猿を善くし、兼ねて和歌をも巧にし、集外三十六歌仙の二に數へらる。晩に發心して、一休和尚の弟子となり、庵に發心して智恵と號す。文安五年(一説に四年)寂す。

になし 似無し二無し【形】『には、似

の義とも、二の義ともいふ、二ならば史記の韓信傳に「功無二於天下」などある「無二」より出でしなるべし「二つ無し」参照二つとなし、類なし。無變なふ。源氏「儀式、いとなく、もてかしづたまふ」同「御目に近くは、げに及ばぬ機」のたたまひ、になく書きあつたまへり」

になは 荷繩【名】物を荷造(に)し、又は

になふために、その物に結びつくる繩、八笑(笑)繩(に)の荷繩ぢやあねえが、大丈夫にしておかねえと、始末の悪い(に)い事が出来るて」

になはひ 蝸貝【名】(動)腹足類に屬する軟體動物。長さ約三分、殻は卵形をなし、螺塔短くして、紫褐色を呈す。我國、各地の沿海に多し。

になひ 擔荷【名】『になふこと。』

になひき(擔荷)の略。『世世(に)擔て、水をかたがれあきさる』

になひてあきさる 擔商荷商【名】荷をになひて、物を賣りあること、又その人になひり。三河物語になひ商をして、

にひいたす 擔出だす荷出だす【動

四他】になひて運び出だす。土佐(に)人の口綱も諸持(に)て、この海邊にてになひだせる歌」

になひちり 擔賣荷賣【名】になひあきな

になが

ひ(荷商)に同じ。『常盤(に)小行燈(に)きへ身の油、荷賣する身代は』

になひか 擔籠荷籠【名】物を入れて、背負ひ運ぶに用ふる籠。

になひがひ 荷買【名】女郎を、青樓又は遊廓以外の場所に運出すことなるべし。

になひからびつ 擔唐櫃・荷唐櫃【名】にからびつ(荷唐櫃)に同じ。

になひつる 擔連る荷連る【動下二目】

にみたる 地下(に)の人の乗用に供せしもの。

になひこぶ 擔瘤荷瘤【名】平生物をになふために、肩に生じたる瘤。にこぶ。川中島(に)柴刈では無けれども、斯く荷瘤出来(に)せしは」

になひこむ 擔込む荷込む【動四他】せ

になひしやう 擔鉦鼓荷鉦鼓【名】鉦鼓【の、道樂(に)の、際棒にてになひ、歩みながら打鳴すもの。眞鍮製にて、形は、鉦鼓【に]同じく、徑八寸。高さ、厚さ、これに準ず。

になひすおる 荷水風

呂【名】になひら(荷風呂)に同じ。

になひだいこ 擔太鼓

の、道樂(に)の時棒にてになひ、歩みながら打鳴すもの。の、草は、徑二尺七寸、朱地に牡丹唐草などの花彩を施し、縁に徑八分の孔十箇あり、孔に調緒(に)を通ず。框の長さ一尺三寸、徑一尺八寸。調緒の色と革面の模様とは、すべて、大太鼓(に)に同じ。

になひちやう 擔茶賣荷茶賣【名】次條



(こ い だ ひ な に)

になひち

に同じ。太閤(に)荷茶うり」

になひちやう 擔茶屋荷茶屋【名】茶釜と器物とを、天秤棒の前後に附けてになひ歩き、客の求に應じ、料金を受けて茶を立つること、又その商人。にちやや。大草(に)床脇(に)は梅咲く方(に)荷茶屋」

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。

になひつ 荷旋毛【名】次條に同じ。



(結 蠅)

になん

「四美具、二難并」とあり二つの困難なる事。『文選』の謝靈運の文に本づく「賢主と嘉賓とは、同時には得がたきこと」になん二南「名」『文』詩經の國風中、周南と召南との二篇。「よ」。

になん煮膏「名」おになめ(御煮膏)を見に「煮膏」名「物を煮ること。いにいに」。「小供の語」

になんきのみこ 通達藝尊 瓊瓊杵尊「名」あめにきしくにきしまつひだかひこのにきのみこ(天通岐志國通岐志天津日高彦火之通達藝尊)に同じ。

になんがかり 二人掛「名」二人にて、一つの事を爲すこと。『繪』一挺を、二人にて押すこと。二人こき。『おほろ(大繪)』に同じ。(二人掛に對して)

になんくわい 二人會「名」演奏會 講演會 落語會などの、二人にて演ずるもの。にんここき 二人漕「名」にんがかり(二人掛)に同じ。(二人漕に對して)

にんにん だうじやうじ 二人道成寺「名」おもむきむすめだうじやうじ(百千鳥娘道成寺)を見よ。

にんにのり 二人乗「名」一輛の人力車に二人乗ること。又二人乗り得る大きな車。あひのり。あひばこ。

にんにんばかま 二人袴「名」『能』の狂言の一。己が袴の習入に、從者と稱して附き添ひゆきしに、男に見あらはされ、二人揃ひて、座敷に出てねばならぬ場合となりたれど、親は袴の用意なきため一著の袴を二つに裂き、各前面にのみ著けて、體裁を繕はんとし、遂にまた看破せられ、赤面して逃ぐる趣を作れるもの。相合袴(袴)の曲に似たり。『前記の能』の狂言より脱化せる喜劇。親の名を高砂尉兵衛(高砂)と、聲を馬之助として作り、九代目市川團十郎が明治二十七年歌舞伎座にて演じたるを初とす。

にんにんばり 二人張「名」一人が押し掬め、他の一人が張を掛くる程の強弓(弓)なり。三人張 四人張 五人張 七人張 などもあり。本年記職員、……、二人張に十三東二

になん

伏(ふし)に、飽くまで固めて引き絞る」にんにんびく 二人比丘尼「名」『書』鈴木正三の著せる假名草子。二卷。下野國の住人須田彌兵衛といふ者、二十五歳にて戦死し、十七歳なるその妻、一周忌過ぎて後、戦死の跡を訪ねし時、姑と夫とに死に別れて悲しめる女の家に宿り、春にならば、共に修行に出てんと約せしに、その女もやがて世を去りし由を記せるもの。

にんにんわんさう 二人婉久「名」長唄に合はせて演ずる舞踊。一中筋及び義太夫節にある「婉久末松山(のうた)に本づき、遊女松山の、片身は女、片身は男にて踊るもの。作曲は松島庄五郎、阪田兵四郎。後、唄を改作して、名を「面影二人婉久(のうた)」といふ。後には、「婉婉久」名、「四季の婉久」といふも作られたり。

にぬ 布「名」ぬの(布)を云ふ。「東國の古の方言」萬葉筑波に雪か降らるいなをかまかなしけ子るがにぬ干(ぬ)さるかも」。

にぬき 煮拔「名」水を多くして炊きたる飯より取れる粘液。糊などに用ふ。おねば。『生垂』に、鑊を入れて、煎じて漉したるもの。『煮貫』。『次條の略』。

煮拔の玉子「句」次條に同じ。長町安親(山葵)におろしに煮ぬきの玉子」。

にぬきたまこ 煮拔玉子「名」ゆてたまこ(茹玉子)に同じ。『煮つむ』。

にぬく 煮抜く「動四他」十分に煮る。にぬくも 布雲「名」布を引き延べたる如くたなびける雲。「東國の古の方言」萬葉夕さればみ山を去らぬにぬ雲のあぜか絶えなればみし子らぬ」。

にぬい 荷主「名」荷物の持主。『におくりにん(荷送人)に同じ。』

にぬり 丹塗「名」丹(に)にて塗ること、又その塗りたる物。さぬり(狹丹塗)参照。『古語』。

にぬりや 丹塗矢「名」矢幹(や)を丹塗(に)したる矢。『古語』 聖美和(のうた)の大物主(のうた)の神……丹塗矢になりて」。

にぬん 二念「名」二にん(二心)に同じ。

になん

にぬん(餘念)に同じ。

にぬんこん 二年根「名」(植)二年生草本の根。二年生根。二年根多年根に對して。

にぬんさう 二年草「名」(植)にぬんせいさう(二年生草本)に同じ。(一年草多年草に對して)

にぬんじよくぶつ 二年植物「名」(植)にぬんせいさう(二年生草本)に同じ。

にぬんせい 二年生「名」(植)にぬんせいさう(二年生草本)の略。二年生多年生に對して。『第二級に屬する生徒。』

にぬんせいこん 二年生根「名」(植)にぬん(二年根)に同じ。(一年生根多年生根に對して)

にぬんせいさう 二年生草「名」(植)次條に同じ。(一年生草多年生草に對して)

にぬんせいさうほん 二年生草本「名」(植)種子より發芽して、漸次生長し、その翌年、花を開き、實を結びて枯死する草本。例へば大根、蕪人參(のうた)などの類。越年生草本。二年植物。二年生草。二年草。(一年生草本多年生草本に對して)

にぬんせいじよくぶつ 二年生植物「名」(植)前條に同じ。(一年生植物多年生植物に對して)

にぬんへい 二年兵「名」入營してより二年目の兵士。(初年兵に對して)

にぬん 二足「名」二の(二)に同じ。『古語』字彙、爾乃」。

にのあひ 二足「名」進むをためらふこと。しりごみ。躊躇。猶豫。國姓爺「二の足になる所を、疊み寄せて」。『あじ(足)圖を見よ』太刀の鞘の足の「。太刀を腰に佩ぶるに當りて、後方に位するもの。(二足(のうた)に對して)

二足を踏む「句」ためらふ。躊躇す。尻尾(のうた)を踏む。小町踊「二の足も踏まて來にけり一時雨」。

にのいた 二板「名」兜又は鍔の胴、草摺袖小手(のうた)などの、上より數へて、二枚目の板。保五草摺ならば、一の板とも、二の板とも、矢蓋をたしかに承て仕らん」。

にのいぞ 二絲「名」に(二)に同じ。

になん

にのう 二卵「名」はつち(初卵)を見よ。

にのうて 二院「名」肩と臂との間。太平記御類先二の御腕」。

にのうま 二午「名」はつちま(初午)を見よ。

にのうら 二裏「名」(文)にのをり(二折)を見よ。『折』を見よ。

にのおもて 二表「名」(文)にのをり(二)を見よ。『條下を見よ。』

にのかたな 二の刀「句」に(二)の條下を見よ。

にのかっせん 二の合戦「句」に(二)のにかはり 二替「名」顔見世狂言の次の替狂言。陰曆正月に興行す。はるきやうげん。さんのかはり(三替)参照。太馬婆婆連れた爺も來にけり二の替」。

にのきざ 二の木戸「句」に(二)の條下を見よ。

にのきざ 二切「名」に(二)番に同じ。朱儀通目録面體も、姿も大かたなり。これも、御心、二のきれ、二十八外には高直なり」。

にのく 二句「名」二度目に言ふ言葉。

にのくち 新口「名」地大和國磯城郡多田村の大字。もと新口ノ莊と呼び、近松の戯曲「冥途の飛脚」によりて、その名、世に知らる。『文』近松の戯曲「冥途の飛脚」又それを改作せる「傾城大和往來」の一部。忠兵衛が、梅川と共に、己の故郷なる大和國新口村に赴く段。

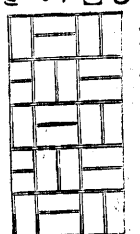
にのこ 二子「名」初雪や下駄の足跡「二の字か」といふ古句に本づきていふ。足駄にて歩みたる足跡。和合「二番の飛石を踏みはづし、はい、これはしたり、ついに二の字を、二箇所附けた」。

にのじく 二子崩「名」模様の二下。の圖を見よ。いぢのじつなき

(一字整)参照。

にのくるわ 二郭「名」にのまる(二九)に

にのしま 似島「名」(地)安藝國安藝郡二保島(のうた)村に屬し、字品(のうた)港の前面にある島。周圍二里半。大規模なる檢



移り、子孫相承く。明治維新後、子爵を授けらる。
にはあけ 庭上〔名〕稻の刈りをさめの
にはあふき 丹羽扇〔名〕『今の丹羽子爵の家の定紋なるよりいふひあき(楯扇)』に同じ。

にはい 二拜〔名〕さいはい(再拜)に同じ。禁裏中行事北辰を拜する座にて、二拜に

にはい 庭石〔名〕庭に据あおく石、即ち飛石を敷敷石又は風致を添ふるための黒木(石)などの類。

にはい 庭石傳〔名〕庭石を歩み傳ひて行くこと。

にはい 庭石屋〔名〕庭石をあきなふ家、又その人。

にはい 二杯酢〔名〕魚貝類を生食するために浸す酢と鹽と、或は酢と醬油とをまぜたるもの。(三杯酢に對して)

にはう 二方〔名〕二つの方角。『古』物を載するに用ひし、一種の臺。三方に似て、前後の二方に孔ありしものといふ。

にはう 二寶銀〔名〕『寶の字の極印二つあるによりていふ』はうじぎん(寶字銀)に同じ。

にはう 二荒神〔名〕にはうくわうじん(二寶荒神)に同じ。『五元集』松に薄を二方荒神。『豊後』いかにま。戻なら乗るべし……二方荒神で、百五十道るべし。

にはう 二方白〔名〕兜の鉢の、左右二方に、金銀又は白銀(の)を張りたるもの。(三方白四方白八方白などに對して)

にはう 二寶丁銀〔名〕はうじぎん(寶字銀)に同じ。

にはう 庭梅郁李棠棣〔名〕「植」薔薇(の)科に屬する落葉喬木。高さ二三尺に達し、枝條繁生す。葉は互生し、廣披針形にして、李(の)に似て小さく、鋸齒を有す。早春、形梅のに似て、淡紅色を呈し、往往重瓣をなす。小形の核果を結び、熟すれば、紫赤色を呈し、食ふべし。庭園に栽培して觀賞に供す。こらめ。にはざくら(庭櫻)参照。

にはう 庭漆枹(臭椿)〔名〕「植」苦木(の)科に屬する落葉喬木。高さ數丈に達し、葉は奇數羽狀複葉をなし、各小葉は卵狀披針形にして、鋭尖頭と粗齒とを有し、葉脚歪形なり。夏季、帯緑白色の小花、圓錐花序をなし、開く。原産地は支那。我國、各地に栽培し、又、歐米にては、道路樹とす。葉は枹蠶(の)を飼ふに用ふ。

にはか 俄(名)にはきやうげん(俄狂言)の略。

にはか 俄か 遠か 貌 俄(はしく)俄(し)を見よ だしぬけ。たちまち。きふ。突然。俄然(の)。急遽。倉卒。

にはか あんどん 俄行燈〔名〕俄狂言を行ふ者の携ふ行燈。

にはか あめ 俄雨〔名〕俄かに降り来る雨。ゆふだち。はやさめ。急雨。驟雨。

にはか いれい 俄幽霊〔名〕俄かに幽霊となりて現るること。『若風』俄幽霊になる事。

にはか いじや 俄醫者〔名〕俄かに醫者になりたる人。柳屋(の)醫者もしものためになりたる人。

にはか かせ 俄風〔名〕俄かに吹き起る風。五人(の)思ひもよらぬ俄風……これに焼けとまります程に。

にはか がは 俄川〔名〕俄かに生じたる川。『若風』急きりとは深く恨みまらんと、泪また俄川かと思はれ。

にはか きやうげん 俄狂言〔名〕「座」興のために、俄かに趣向を考へ出して行ふ、滑稽なる狂言。にはかしら。遊廊にて催す、一種の茶番狂言。さまざまに扮したる男女と囃子(の)方とを、各別箇の小さき舞臺に分ち配り、廊内の家家を、順次に流し歩く。にはか。

にはか 庭神樂〔名〕神社にて、舞臺を設けず、庭に篝火を焚きて奏する神樂。

にはか 庭隠る 動下目 庭の物に在りて、見えぬ。『古語』六點、咲きはてて今はあらじと思ひしを庭がくても、何ひぬるかな。『梅』に同じ。

にはか ころへ 俄拵〔名〕きやうげん(俄狂言)にはかころへ 俄事〔名〕にはかに起りたる事。急事。保馬(の)俄事に待てる上。平家(の)思ひも設けぬ俄事に待てあり。柳屋(の)「親船」内裡をくづす俄事。『する者』にはか 俄師〔名〕俄狂言(の)職業とにはか 俄仕込 俄仕込 商品を、急に仕込むこと。『急に覺え込むこと』。

にはか 俄死 俄死 俄かに死ぬること。頓死。急死。

にはか 俄芝居 俄芝居 にはかきやうげん(俄狂言)に同じ。『たる身代』にはか 俄身代 俄身代 俄かに起しにはか 俄攻 俄攻 俄かに攻め立つること。急襲。

にはか 俄刺 俄刺 俄かに刺突すること。刺突してより間のなきこと。世間(の)子息(の)醫學も一年に足らずして、俄刺の頭を振り。

にはか 俄大臺 俄大臺 俄大臣 にはかきやうげん(俄分限)に同じ。『若風』金山(の)にばかりて、思の外なる俄大臣となり。

にはか 俄道心 俄道心 俄かに發心して、出家すること、又その人。今道心。にはか坊主。そうはち。

にはか 俄底 俄底 俄かに思ひ立ちてする旅行。『七夕』や裸足の俄底。

にはか 俄長者 俄長者 にはかきやうげん(俄分限)に同じ。『若風』この者、俄長者となりぬ。

にはか 俄辻風 俄辻風 俄かに吹く辻風。十圓にはか辻風出て来りて、かの經を巻きて、悉く虚空(の)へ吹き上げけり。

にはか 俄成 俄成 俄かになること。狂言(の)布席(の)にはかなりの出家。

にはか 俄坊主 俄坊主 にはかきやうげん(俄道心)に同じ。五人(の)様子あつての俄坊主。『若風』江戸から尋ねて俄坊主。

にはか 俄日和 俄日和 降り続け、又は曇り續けたる空の、俄かに晴天になること。

にはか 俄富裕 俄富裕 俄かに富裕の身となること、又その人。いちじぶげん。にはかだいじん。にはかきやうげん。なりきん。てきぶげん。博多(の)小娘(の)昨日まで端(の)せせりし我我俄分限は、見らるる通り、今日からは太夫(の)るひ。

にはか 俄普請 俄普請 俄かに普請をすること、又その普請。一代(の)聲の方にはは俄普請。

にはか 俄祭 俄祭 神事の時、遺物(の)などを、俄かにこしらへて出すこと。にはか 庭籠 庭籠 昔、正月三箇日の間、庭園に新しく籠を築き、釜をかけて、火を焚き、又、庭に敷物して、一家の家族、召使(の)集り、雑煮(の)を食ひ、酒飲みなどして遊びしこと。大和國奈良には、今も、この風俗傳はれり。中古の地火爐(の)の遺風なるべしといふ。小町(の)師知秋(の)世はなべて帝の歌に庭籠。

にはか 俄盲 俄盲 俄かに盲目となること、又その人。にはか 俄病 俄病 俄かに病(の)きふやう(急病)にはか 俄病 俄病 前條に同じ。『若風』今年も、人多くにはかきやうげんして死ぬる中に、帥(の)の御子、重く悩ませたまひて。

にはか 俄闇 俄闇 俄かに闇になること。聖徳太子(の)神傳(の)俄闇に、度(の)を失ひ。

にはか 俄雁金 俄雁金 にはかきやうげん(二羽雁金)に同じ。

にはか 俄狂言 俄狂言 にはかきやうげん(二羽雁金)に同じ。

にはか 庭木 庭木 庭に植うる樹木、又庭に植ある樹木。庭樹(の)若風(の)若衆と庭木と、大きにならぬ物ならば。

にはか 庭木戸 庭木戸 庭口に設けてある木戸。

にはか 庭馬 庭馬 馬の四肢の中、二股の下端に、白き毛の生えめぐりてあること。『手紙』の文句の末尾に、本文の補足として、行を改めて書き足すこと、又その補足せる文句。おつてがき。なほなほがき。二伸。追啓。追白。

にはか 庭草 庭草 庭に生えたる草。

にはさき

萬葉庭草にむら雨降りてきりぎりす鳴く
聲聞けば秋つきにけり」**庭**「植」にはさき
(庭柳)に同じ。**庭**「植はさき(草木)」に
同じ。「地膚」和名「地膚」通波久佐一云、
末木久佐」

庭口「名」庭の出入口。和合人
「かの取締なき庭口を引き寄せたまま駈
け出す」

庭くさき庭婿「名」(動)くさき(婿ぐ)
を見よ」せまれ(鶴鶴)に同じ。日本振袖始
「あの鶴鶴を庭くさき庭たき、極致鳥
とも云ふ」

庭くさき庭くさき「名」(動)前
條に同じ。「古語」庭くさき、ニハクナブリ
にはけり庭下駄「名」庭を歩むにはく
下駄。齒なく、材の中央を刳(くり)りあけた
る、粗製なるもの。

庭子庭兒「名」「庭」庭を見
よ」農家にて、僕と婢とが夫婦になりて
生みたる子の、引續き、その家に仕ふりも
の。かまご。爺譜代。にはさき(庭)参照。

庭籠「名」庭に置きて、小鳥を入
れおく籠。五人玄熊籠むらむらとして、
その奥に庭籠ありて、白雁(ハシ)唐鳩金
雞、さまざまの聲なして」若鳥三十七
羽すぐりて、これを庭籠に入れさせ」

荷箱荷宮「名」荷物を入るるに
用ふる箱。

庭木陰「名」庭木の陰。若鳥
庭木陰の闇き中へ入りたまひしは、文
記「見んため心あてなるべし」

庭古草「名」(植)たちばな(橘)
の異稱。「古語」裏傳抄「植あおきし頃
は昔の庭古草咲ける花のみ今の思を」

庭舌「名」庭に生えたる舌。
にはさき庭舌小舌「名」形、左官職
の用ふるものに似て、それよりも鐵部の
肉厚き錢。小草木を移植するに用ふ。

庭土間「名」庭の土間など、人の往来繁き地面に生ず
る凸凹。「著庭庭」被
にはさき庭庭「名」庭上の座席。江次第「被
にはさき庭庭除「名」庭を掃除する

にはさき

こと。にはさき。
にはさき庭庭前「名」庭の、縁側に近
き部分。えんさき。庭庭前(庭庭除。鬼貫
「庭庭きに白く咲いたる椿かな」

庭庭「名」庭に植ゑたる
櫻。いへさき。後拾遺思ひおく事なから
まじ庭庭散りての後の船出なりせば」

庭庭「名」(上不見櫻)に同じ。
和名朱櫻。波波加。一云、爾波佐久良」**庭**
「植」の一品種。葉や大く、花は重
瓣をなし、紅白の二種ありて、麗美なる
がために、庭園に栽ゑる觀賞に供す。「多
葉郁李」庭庭(庭庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。

庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。
にはさき庭庭「名」(場庭)に同じ。



(めずすはに)

にはさき

に達し、葉は銅狀にして、全縁、葉間より
花莖出で、春、莖頂に、紅紫色の條を有す
る六瓣の華花を著く。亞米利加よりの船
載に係り、庭園に栽培す。いとあやめ。き
んしやうぶ。

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

にはさき

はだち。百練抄申す高麗人夢掠鎮西之
由、仍止「音楽庭立奏」**庭**「御曆」
の奏に同じ。

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

庭庭「名」庭に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔、京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭庭撒き散
らば、楊屋の庭庭、埃になつて、廢ります」

を記したる帳簿。

には「つくり庭作」[名]「樹石を按排し、

築山・泉水などを造ること、又それを職

業とする人。うゑまき。新六、宿しめか

ひこそなけり。苔の上の庭つくりせぬ山の

岩かど」よゑのあか妙隆寺の庭より修性

院の山つづきは、寶曆六の年、庭つ

くりのたぐみ同扇軒が造る所にして」

徳川幕府の職制の一。作事奉行の配下に

屬し、庭園の樹石・泉水などを造る事を掌

りしもの。目くづりややく(露次作役)に

同じ。

には「つげ庭黄楊」[名]「植ひめつげ(姫黄

には「つたひ庭傳」[名]「庭を傳ひあるこ

と。和合入庭つたひに、奥の座敷に至る」

には「つち地膳」[名]「動つちはんめ(土斑

猫)に同じ。名義抄地膳、蟲類、ニハツツ

には「つづき庭續」[名]「庭が、鄰家のと接

續せること。〔深山樞〕に同じ。

には「つづり庭廊」[名]「植みやましきみ

には「つづり庭津島」[名]「動」〔次條の

枕詞より轉じたる語には「つづり庭」に同じ。

正治元年二年百長き夜の夢覺むかとや庭

つ鳥明行く空を人に告ぐらん」便。

には「つづり庭雞」[名]には「つづり庭」の音

には「つづり庭津島」[名]「庭の鳥の意な

るより、人家の庭に棲むかけ(雞)にかけて

いふ。いへつづり(家津島)おきつづり(津津

島)じまづり(鳥津島)ぬつづり(野津島)參

照。鳥にはつとりかけは鳴く」

には「つづり庭」[名]「庭に積むこと。

庭積の机代(ツツ)の物(句)大嘗祭の

時、一般臣民より奉納せる地方特産の

品を、案に載せて、神前に供するもの。

び朝鮮臺灣樺太等より、各、精米一升、

精粟五合及び魚類、海藻、野菜、雜穀、果

實などの奉獻を允許せられたり。

には「つる二羽鶴」[名]紋所の一。翼を

張りたる鶴二羽を、頭と頭の向ひあふ

やうに、圓くあがきたるもの。

には「つら洞石」[名]「庭さきの築

山の邊なる假瀧の右側に立てたる石。

には「つぎ接骨木」[名]「植忍冬(ツツ)科

に屬する落葉灌木。幹は、ねぢれて、高

約一丈に達し、枝條四方に繁茂す。葉は

奇數の羽狀複葉にして、藤のに似て、大

きく、對生し、各小葉は長卵形をなし、細

齒を有す。早

春、小形白色

の花、圓錐花

序をなして

開き、果實は

小球狀にして

赤色を呈

す。我國、各

地の山野に自生し、又、人家にも植う。果

實及び莖は藥用とし、又、この木の朽幹に

生ずる木耳(ツツ)は、品質良好とす。こぶ

のき。せつこつばく。たづのき。みやつこ

ぎ。みやとこき。

には「つづり庭雞」[名]「動」庭鳥の義。に

には「つづり庭津島」[名]「庭の鳥の意な

るより、人家の庭に棲むかけ(雞)にかけて

いふ。いへつづり(家津島)おきつづり(津津

島)じまづり(鳥津島)ぬつづり(野津島)參

照。鳥にはつとりかけは鳴く」

には「つづり庭」[名]「庭に積むこと。



(こ と は に)

愛玩種の三とし、品種多し。あけつげど

り。いへつどり。うすべりどり。かけ

ときつげどり。ながなきどり。にはつど

り。ゆふつどり。

雞の口となるとも、牛の尻となるな

(句)「雞口(ツツ)となるとも、牛後とな

る勿れに同じ。〔諺語〕

雞を割(ツツ)くに、焉(ツツ)んぞ、牛刀を

用ひん(句)「論語の陽貨篇に「子之

武城聞弦歌之聲、夫子莞爾而笑曰、

割雞焉用牛刀」とあるに本づく」小

事を處理するに、大人物又は大仕掛な

手段を用ふる必要なき(諺語)

雞を割(ツツ)くに、牛刀を用ふ(句)小

事を處理するに、大人物又は大仕掛な

手段を用ふる(諺語)

には「つら洞石」[名]「庭さきの築

山の邊なる假瀧の右側に立てたる石。

には「つぎ接骨木」[名]「植忍冬(ツツ)科

に屬する落葉灌木。幹は、ねぢれて、高

約一丈に達し、枝條四方に繁茂す。葉は

奇數の羽狀複葉にして、藤のに似て、大

きく、對生し、各小葉は長卵形をなし、細

齒を有す。早

春、小形白色

の花、圓錐花

序をなして

開き、果實は

小球狀にして

赤色を呈

す。我國、各

地の山野に自生し、又、人家にも植う。果

實及び莖は藥用とし、又、この木の朽幹に

生ずる木耳(ツツ)は、品質良好とす。こぶ

には「つづり庭雞」[名]「動」庭鳥の義。に

には「つづり庭津島」[名]「庭の鳥の意な

るより、人家の庭に棲むかけ(雞)にかけて

いふ。いへつづり(家津島)おきつづり(津津

島)じまづり(鳥津島)ぬつづり(野津島)參

照。鳥にはつとりかけは鳴く」

には「つづり庭」[名]「庭に積むこと。

庭積の机代(ツツ)の物(句)大嘗祭の

時、一般臣民より奉納せる地方特産の

品を、案に載せて、神前に供するもの。

明治四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

大正四年の大嘗祭にも、道(ツツ)府縣及

にはま

り。庭火にて、常の御膳をば仕うまつる」庭火の笛「句」禁中の御神樂に、庭火を燒きて吹奏する笛。右京太夫堂「聞くからにいと昔の戀しくて庭火の笛のねにぞ泣きぬる」

にはふぎやう庭奉行「名」『庭中の掃除の役をも兼ねしよりいふ』ふじんぶぎやう（普請奉行に同じ。『室町時代の語』）にはふぢ庭藤「名」『植』いふぢ岩藤（に同じ。『さよふぢ（土用藤）に同じ。』）

にはほこり畫眉草「名」『植』禾本科に屬する一年生の草。高さ一尺前後に達し、葉は甚だ細長く、茎も、葉も、紫ばみ、花は小穂相集りて、更に分岐せる穂をなし、秋季に至りて、帶紫色を呈す。各地の庭園、路傍等に自生す。

にはまはり庭廻「名」『庭の周圍。にはまはり。』庭に關する仕事。にはまり庭鞠「名」庭上にて行ふ蹴鞠。著聞「庭鞠は御好み候ふまじ」

にはみんさ庭見草「名」『植』たばな（橘）の異稱。「古語」はさ（萩）の異稱。「古語」はせ（芭蕉）に同じ。『漢傳抄』「垣根には朝顔かかる庭見草をりに立ち寄る人の多きよ」

にはむ鈍む「動四自」鈍色（にび）になる。喪服を着る。にむ。「古語」選兵にばめる御衣（に）たてまつれるも、夢のこちして」

にはん二半「名」にはんば（二半場）の略。『物事の、何れとも決定せぬこと。どちらつかず。なまはんか。』二判」

にはん二番「名」勝負を二回行ふこと。『二番の次。第二。』智者を一番としていふ「思ふなる者の異稱。にのきれきみであら（紀三井寺）参照。『醒睡笑』二番に構へられたる聖殿。』「りたる聖。』

にはんあお二番藍「名」第二回に刈取にはんいか二番烏賊「名」二番鰯（にしん）に製する烏賊、即ち御先（おき）烏賊に非ざる烏賊。にはんうけ二番受「名」敵の來襲に對して、二番目の列に陣取ること。

にはんが

にはんがひ二番貝「名」二回目吹き鳴らす陣貝。にはんくひ二番首「名」戦場にて、二回目に取つたる敵の首。二の首。にはんご二番子「名」二番目に生れたる子、即ち次男又は次女。東海道名所記「庄屋殿の二番子」『動』なつこ（夏）に同じ。『目づき種』を云ふ。『伊勢國白子（し）の方言』

にはんとえ二番肥「名」最初に施したる肥料（基肥、又、一番肥）に次いで施す肥料、即ち第一回の補肥。にはんごさぶね二番御座船「名」御召替（ごさぶね）の料とする御座船。（一番御座船、三番御座船に對して）

にはんごこみ二番仕込「名」二度目の仕込。『世風』此の節、薪高直（せきたかぢき）に付、前篇の餘材を載めて、二番仕込の女湯なれば烏の行水（こすい）、早拵（はやぢき）、ざつとながして云爾（うが）

にはんするめ二番鰯「名」一番鰯より小きによりていふ「御先（おき）烏賊以外の烏賊にて製したる鰯。にはんいか（二番烏賊）参照。にはんせい二番勢「名」一番勢の次位に陣せる軍勢。二番ぞなへの軍勢。にはんて二陣、二の手。』船に同じ。にはんせん二番船「名」にはんおね（二番にはんせん）二番煎「名」一度煎じて使用する物を、今一度煎じて用ふること。『一度用ひたる物事を、また用ふること。和合（わが）自園の手製で、二番煎じまで利（き）くお茶番なら』に同じ。にはんせなへ二番備「名」にん（二陣）にはんたちあひ二番立會「名」商（しやう）後場（ご）の立會。『取引所の語』

にはんちや二番茶「名」二回目に摘み取りて製したる茶。二番煎（にしん）の茶。にはんて二番手「名」にはんせい（二番勢）に同じ。にはんどり二番鳥・二番鶏「名」一番どりの次に鳴く鶏。なかり。若風（わかぜ）大

にはんね

かたの人には留守と、二番鶏の鳴くまで通れ、とかく無い袖は振らぬといへども」前記二番どりの鳴く時刻、即ち午前四時頃。にはんね二番寝・二番寐「名」一度目さめて、また眠ること。（多く曉にいふ）またね。

にはんば二半場・二半場「名」徳川幕府の御目見（ごめい）以下の士の一。徳川家康より四代の間に西丸留守居與力同心御賄、六尺本丸奥表坊主等の職に居りし者の子孫の内に、譜代とも稱しがたく、又、抱入にも入るべからざる中間の格式、又その格式の人。にはんばえ二番生「名」ひばえ彦生（ひばえ）に同じ。にはんば（二番子）に同じ。にはんわ（南華）に同じ。『板城三味線』「平家の二番ばえ、宗盛といへる、元の大匠」

にはんび二番火「名」ひざび（火）を「に出帆する船。にはんぶね二番船「名」その日、二回目にはんめ二番目「名」第二番。にはんめ（二番目）の略。にはんめかんばん二番目看板「名」江戸の芝居の顔見世に、二番目狂言のさまを描きたる看板。とはしかんばん。にはんめきやうげん二番目狂言「名」芝居にて、數種の脚本を交へて舞臺に上す場合に、その日の一番目狂言の次又は一番目狂言、及び中幕の次に演ずる狂言。にはんめ（一番目狂言に對して）『多く二番目に演ずるよりいふ』世話物の狂言。にはんめ（二番目物に對して）

にはんめもの二番目物「名」前條に同じ。（一番目物に對して）にはんめやくしや二番目役者「名」二番目役者に對して）にはんめもの二番物「名」能樂の定期として、二番目に演ずべきもの、即ち修羅（しやら）物とて、武士を主人公としたる曲。にはんやり二番槍「名」一番槍に次ぎて、槍にて、敵陣に突入すること、又その人。

にはんよ

にはんより二番縫二番捻「名」うはより（上縫）に同じ。にはもせ庭面「名」庭も狭（せま）にの「狭」を誤解して用ひたる語。の（もせ）（野面）参照庭のおも。庭上。鶴（つる）松（まつ）さふの聲聞けば、俊成卿の庭もせも、懐しくにはもせに庭も狭に（句）には庭の條下を見よ。

にはやなぎ庭柳「名」庭に屬する一年生の草。葉は節ありて、直立或は横臥し、高さ尺餘に至る。葉は互生し、葉の内に似て厚く、長楕圓形にして、先端丸く、六七七月頃、帶紅白色の小花を開く。各地の路傍に自生す。いはやなぎ。うしやなぎ。たちまちやなぎ。まきやなぎ。にはやま庭山「名」庭にある築山（けんざん）。一代男手銅の鶯を取放させ、庭山には、せはしり、申し申しと聲を立つる」にはりんだう庭龍膽「名」植（りんだう）（龍膽）に同じ。にはるくぐさ「名」植（はるくぐさ）（帶木）に同じ。無葉（むよう）地膚子（ぢふし）、ニハコグサ」にはおど庭井戸「名」庭園に、その風致を添ふために設けたる井戸。にひ新「接頭」新しき。新なる。初（はつ）の意。にひ新（にひ新）にひ草「名」にひ手枕（てしき）にひ鈍（にひ鈍）にひ鈍色の略。（熟語として用ふ）青鈍（せいどん）薄鈍（はくどん）にひいと新絲「名」今年取りたる新しき絲。『古語』夫木（つまき）たなばたに眞麻（ま）のにひ絲引きかけて繰ること絶えぬ星あひの空」

にひいろ鈍色「名」どんじき（鈍色）を見よ染色の薄黒きもの、即ち濃き鼠色。古喪服には、この色を用ふる習なりき。つるばみいろ。どんじき。にはむ鈍む參照。『古語』空（くう）濃きにび色の紙（し）（源氏）にび色のこまやかなるが、打（うち）（た）えたるものを著たまひて」にひがた新湯「名」地（ち）北陸道の最北に位し、越後佐渡兩國を管轄する縣。縣廳を越後新潟市に置く。初、明治元年、

新潟裁判所の設置あり、これを越後府と改め、又、新潟府と改め、二年新潟縣と改め、尋いで水原縣と改め、再び新潟縣に合す。又、元年設置の柏崎縣をも合し、長岡、新發田、黒川、三日市、村松、桑田、村上、高田、清崎、興板、椎谷の諸藩のすて縣とせしをも合し、高田以下の四縣佐渡國の相川縣及び越後國東蒲原(今羽)郡の福島縣の所管なりしをも合して、今日に至る。 新潟縣に屬する市。西蒲原(今羽)郡の北部。信濃川の河口西岸に在り。北陸第二の都會にして、縣廳の所在地。

にひがたから 新潟港【名】「地」越後國新潟市の前面にある港。信濃川の海門たり。明治元年十一月始めて開港し、五港の一に數へられたれど、今は外國貿易は振はず。河口西岸に、燈臺の設あり。

にひがたぶきやう 新潟奉行【名】徳川幕府の職制なる遠國奉行の一。老中支配の下に、越後國新潟に駐在して、当地の民政を行ひ、又その港に出入する船舶等の事務を掌りしもの。佐渡奉行の次席にして、定員一人、支配組頭二人あり。

にひかづ 新冠【名】「地」日高國七郡の一。浦河支廳の所管。

にひかは 新川【名】「地」越中國の舊郡の一。明治十三年、分ちて上新川、下新川の二郡とし、同三十年上新川を割きて、中新川郡を置けり。「にふかは」とも稱す。

にひきひよこ 二匹鎌【名】紋所の一。二の鎌を描きたるもの。

にひくさ 新草【名】わがさ(若草)に同じ。舊草面白き野をばな焼き古草に新草まじり生ひ生ふるがに。「葉」

にひくは 新桑【名】新しく採りたる桑の

にひくは まゆ 新桑繭【名】新しく取りたる繭。今年取りたる繭。「古語」想みつき物にひくは繭の絲をもて練る手もたゆく供へるかな」

にひくは まよ 新桑繭【名】前條に同じ。「古語」舊桑根(今羽)のひくはまよの衣(今羽)はあれど君がみけししあやに著ほし。

にひくら 新座【名】「地」武藏國の舊郡の一。上古の新羅(今羽)郡にて、和名鈔には、すてに新座とあり。後世、その稱區區となりて「にひざ」とも「しんざ」とも呼びしが、明治二十九年廢して、北足立(今羽)郡に合す。

にひくろも 新衣【名】新しく仕立てたる衣服。新衣(今羽)。「古語」夫衣紫の初入染(今羽)のひくろも程なく色のあかれとぞ思ふ」

にひき新座【名】「地」にひくら(新座)を見にひききもり 新防人【名】あらたに派遣せられたるさきもり。「古語」舊防人かはるにひきききもりが船出するうなばらの上に浪なさきとぞ」

にひきさ 新里【名】まだ住みなれぬ里。「古語」對して、會殿は、故里をも、新里をも詠めたまへ、時致は、親の敵より外に、心にかかるとも候はす」

にひし 新し【形】「あらたし(新し)に同じ。「古語」又、甲斐國の方言」記「新駒、ニヒシキハリ」

にひしね 新稻【名】今年出来たる稻。しにひしほり 新搾【名】新に醸したる酒。舊語「にほ島の葛飾早稻(今羽)のひしほり酌みつづをれば月かたぶきぬ」

にひしま 新島【名】「地」伊豆七島中、その第三に在る島。三宅島の西北海路十三里、東京より西南五十一里に在り。東西三十町、南北三里、周回七里餘。屬島に早島式根島地内(今羽)島鵜渡根島あり。島内に、本村若郷(今羽)の二村あり。

にひしまより 新島守【名】新に島守となりたる者。舊島われこそは新島守とおきの海の荒き波風心して吹け」

にひす 新巢【名】屋根に新しく設けたる、煙出(今羽)の簀(今羽)。みす(御巢、參照「古語」

天の新巢【句】神代の新巢。記「この我(今羽)が燧(今羽)れる火は、高天の原には、神産日巢御祖命(今羽)のとだる天(今羽)の新巢の燧煙(今羽)の、八尋(今羽)垂るまで燒裂(今羽)げ」

にひそ 甘途【名】「道」なつどう(夏燈臺)に同じ。本草和名甘途、爾波實。一名爾比實」

にひた新田【名】「地」陸前國の舊郡の一。舊陸奥(今羽)五十四郡の一にして、足利尊氏大將家兼奥羽の探題に任じて、この郡に治せしめし時、附近の地を大崎郡と私稱せしより、新田の稱亡ぶ。その舊地今、東半は登米(今羽)郡、西半は栗原郡に入る。「にふた」とも稱す。田にた(新田)の舊稱。

にひたかやま 新高山【名】「地」臺灣の我領土となりてより、富士山よりも高きこの山を加へたる意にて、明治三十年七月、明治天皇の命じたまへる名。臺灣本島の脊梁をなせる中央大山脈の西側に分岐する山脈の主峯。北山南山中峯の三峯より成り、高さ一三〇七五尺。我國第一の高山。もと支那人は玉山(今羽)、西洋人はモリソン山と呼びたり。

にひたし 煮浸【名】鰯などの小魚を、焼きて砂糖醤油味噌味醃節などに煮なほその汁に浸し置きて、骨まで食ひ得るやうにしたるもの。

にひたじんじや 新田神社【名】薩摩國

薩摩郡東水引村大字宮内に鎮座せる國幣中社。祭神は瓊瓊杵(今羽)尊。社地は尊廟御の地に於て、可愛之山陵(今羽)も、この地に存す。一宮(今羽)八幡。

にひたまくら 新手機【名】にひまくら新枕に同じ。「古語」舊草若草の新手機をまきそめて夜を隔てむ憎くあらなく」

にひたまつさ 新玉章【名】新に送り來れる手紙。最初の書づれ。「古語」夫衣この秋のひ玉づさのことづても今こそあれと雁は來にけり」

にひたやま 新田山【名】「地」上野國にある山。今の新田(今羽)郡太田町の金山(今羽)に。歌には、小新田(今羽)山とともへり。一説に、仁田山(今羽)なりと。舊葉「にひた山嶺(今羽)には附かなな我(今羽)によりしはしなる兒らしあやにかなしき」

にひつ 新津【名】「地」越後國中蒲原(今羽)郡に在る町。油田にて著れ、郡役所の所在地、又鐵道信越線越後西線村上線の會合點たり。

にひつ 荷櫃【名】種種の荷物を納めたる櫃。舊語「御衣櫃(今羽)一かけ、荷櫃一かけ持たせたまふ」

にひつくり 新作【名】新に作れること、又その物。武家舊稱「櫓屋敷とて、……にひ作致せし」

にひづま 新妻【名】結婚してまもなく妻。娶りたるばかりの妻。

にひな 新字【名】「かな(假字)まな(真字)を見よ」新しく作れる文字。「古語」聖傳「造新字一部十四卷、ハジメテニヒナ……ツクラシム」

にひなへ 新宮【名】「新(今羽)の櫻(今羽)の約なるべし。に(新櫻)參照にひなめ(新宮)に同じ。「古語」新新宮、ニヒナへ」

にひなへや 新宮屋【名】前條に同じ。「古語」記「にひなへやに生ひ立てる百(今羽)足る規(今羽)が枝(今羽)は」

にひなめ 新宮【名】「にひなへ(新宮)の轉、しんじや(新宮)參照」古、その年

ををわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねねにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

にふきよ入渠〔名〕船艦を修繕するた
めに、船渠(ドック)に入るること。

によぎよ

によん

によつ

によん

にふぎよ 入御〔名〕貴人の奥御殿に還り入りたまふこと。じゆぎよ。
にふきりやう 入寄留〔名〕いりきりやう〔入寄留〕に同じ。
にふきりやうじや 入寄留者〔名〕入寄留にふきりやうば 入寄留簿〔名〕いりきりやうば〔入寄留簿〕に同じ。
にふくつお 二幅對〔名〕二つあふく〔對幅〕に同じ。二つのよく釣合ひたる物の聲。
にふくわ 入花〔名〕いれはな〔入花〕に同じ。
にふくわい 入會〔名〕或會に加入すること。會員になること。
にふくわいけん 入會權〔名〕法にいりあひけん〔入會權〕に同じ。
にふくわん 入棺〔名〕死骸を棺に納むること。じくわん。入窆。納棺。棺斂。
にふけい 入京〔名〕にふきやう〔入京〕に同じ。
にふけうじゆ 二部教授〔名〕學校の校舍教員が不足せる場合、又は貧民の兒童の就學時間不足せる場合などに、兒童の一部又は全部を、午前と午後との二部に分ちて教授すること。單式混式及び複式の三種あり。獨逸などの半日學校に倣へるもの。
にふく 入庫〔名〕倉庫に預け入ること。くらいれ〔出庫に對して〕。汽車、電車などを、車庫に入ること。〔出庫に對して〕。
にふく 入戸〔名〕にふき〔入籍〕に同じ。
にふく 入貢〔名〕外國より入朝して、貢物を奉ること。すこと。使進。
にふく 入寇〔名〕群をなして來り侵入すること。入國〔名〕國內に入り込むこと。領土の始めて、その領地に入ること。入部。入境。
にふく 入獄〔名〕新に監獄に拘禁せらるること。入監。入牢。〔る貨物。にふくくわぶつ 入庫貨物〔名〕入庫せにふくくわぶつじやうじや 入庫貨物證書〔名〕入庫貨物に對して、倉庫營業者の發

する有價證券。預證券。〔じ。にふく 入魂〔名〕じゆん〔入魂〕に同じ。ふきりやう 入藏〔名〕或佛經を藏經の一部として數へ入ること。西藏〔名〕國に入る。にふさつ 入札〔名〕さう〔入札〕に同じ。〔徳川時代及び明治初年の語〕和合人、どんな紙屑屋に札をさせたて、己事など先づ座頭、役者の役者、和事師〔名〕と見立てられるから。還來使日記。合衆國は、字内二の大國なれども、大統領は總督にて、四年ごとに、國中の札にて定められる由なれば、工事の請負、又は物件の賣買貸借等に就き、各自にその見積價格を札に記入して申し出で、なる契約者、落札者とす。いれふだ。にふさつ 二分札〔名〕みんじやうきんさつ〔民部省金札〕を見よ。にふさつ 入札賣〔名〕商にふさつにふさつ 入札買〔名〕見よ。にふさつ 入札額〔名〕入札の際、入札者の申し出でたる價額。にふさつ 入札買〔名〕商にふさつにふさつ 入札賣〔名〕見よ。にふさつ 入札期日〔名〕入札をなすべき期日。にふさつ 入札者〔名〕入札者にふさつ 入札書〔名〕入札者が自己の見込の價格を記して差出す文書。にふさつ 入札人〔名〕入札をなす人、又それをなしたる人。入札者。にふさつ 入札買〔名〕商にふさつにふさつ 入札賣〔名〕直〔名〕取引又は延〔名〕取引に於ける賣買方法の一。見本又は銘柄及び數量等を市場に掲示し、直取引又は延取引の期日を指定し、豫定の時刻に、記名投票によりて、その價格を競争せしめ、開札の上、入札賣の場合には、最高價を附せる者を確定の買主とし、入札買の場合には、最低價を附せる者を確定の賣主とすること。にふさつ 入札拂〔名〕入札の

方法によりて賣拂ふこと。にふさつ 入札保證金〔名〕入札の際、入札人の差出す保證金。にふさつ 入市〔名〕都市に入り込むこと。にふさつ 入寺〔名〕或寺に入りて、新にその僧と住持となること。〔住持となる場合のは、又進寺進院入院など呼ぶ〕しんざんしき〔晉山式〕參照。盛記。何事に入りしきまへるぞと返し問ひたまへば、同親王の御入寺は、寺門の繁昌、衆徒の面目なり。佛中古以來、眞言宗の間に於ける僧侶の階級の。衆分の上、阿闍梨〔名〕の下。今東寺の入寺に成りて拜堂しけるに。にふさつ 鈍利〔名〕刃物の切味。わること。鈍利ならず。鈍敏ならず。痴鈍なり。のろし。鈍利に對して。商相場、騰貴の勢なし。〔取引所の語〕にふさつ 入色〔名〕出仕の人員に入る者。類聚三代格自入色二至初位に。にふさつ 入市税〔名〕或都市に移入する消費貨物に對し、その都市の行政費の一部を支辨する目的にて賦課するもの。佛蘭西・伊太利などに行はるれど、一般に弊害あるものと認めらる。入府税。にふさつ 入室〔名〕室に入る。を見よ。學問藝術などの奥儀を極めたこと。にふさつ 入室〔名〕佛祖庭事苑の卷八に「五祖大師、至夜密令三侍者、於三昧坊召諸行者入室、遂傳衣鉢」ことあり。禪宗にて、弟子の道を問ふに、師の室に入りてすること。久參の弟子に非ざれば許されず。にふさつ 戒室。佛眞言宗にて、灌頂の室に入りて、受法灌頂すること。にふさつ 戒室。盛記。弘法大師の入室灌頂の弟子、瑜伽の灌頂の補する處。にふさつ 入津〔名〕にふさつ〔入港〕に同じ。にふさつ 入神〔名〕神に入る。を見よ。藝術などの靈妙の域に達すること。〔入神の妙技〕入神の作。にふさつ 入信〔名〕基信仰に入ること。

にふさつ 入社〔名〕新に或社團に加入すること。始めてその社の一員となること。にふさつ 入舍〔名〕塾舎などに入る。にふさつ 入射〔名〕理。英。Incidence。光などの反對屈折などをなす場合、或媒質の通過して、これと相接する他の媒質の面上に向ふこと。投射〔反射に對して〕。〔聲〕を見よ。にふさつ 入聲〔名〕語にのしやう〔入聲〕に同じ。にふさつ 入城〔名〕城中に入ること。にふさつ 入射角〔名〕理。英。Angle of incidence。入射線と入射點に立てたる法線とがなす角。投射角。〔反射角に對して〕に同じ。にふさつ 入寂〔名〕佛にゆつ〔入滅〕に同じ。にふさつ 入射線〔名〕理。英。Ray of incidence。光の入射線。投射光線〔反射光線に對して〕にふさつ 入射點〔名〕理。英。Point of incidence。光などの入射する方向。投射線。反射線に對して。にふさつ 入射點〔名〕理。英。Point of incidence。光などの入射して、兩媒質の境界面上に當りたる點。投射點。〔反射點に對して〕にふさつ 入射面〔名〕理。英。Surface of incidence。光などの入射して當りたる面。投射面。にふさつ 入手〔名〕物を受取る。わが所有物となること。落手。にふさつ 入衆衣〔名〕佛ちゆうげ〔中價衣〕に同じ。にふさつ 入塾〔名〕新に或塾に入りて寄宿すること。その塾の塾生となること。にふさつ 入塾記〔名〕書にのしやにふさつ 入水〔名〕水中に沈みて死ぬること。じゆす。にふさつ 入籍〔名〕一家の戸籍に入る。にふさつ 入籍〔名〕一家の戸籍に入る。轉じて、他家の戸籍に加入すること。入戸。

にふせん 入船〔名〕港に入る船舶。いりふね。著船。出船に對して。

にふせん 入選〔名〕出品などの、審査に合格すること。當選。落選に對して。

にふせん 荷不足〔名〕荷物の員数が不足すること。

にふた 新田〔名〕「地」にひた(新田)を見にふた。荷札〔名〕荷送人の名、又はその肩先などを記して、荷物に附く札。木片又は布片を用ふ。

にふた 入隊〔名〕軍隊に編入せらるること。にふた(除隊に對して)。

にふた 二分代〔名〕「にふ」(二分)を見にふた。古、年給の場合に目(分)の代りに、内官たる内舍人(分)又、諸司の助(分)充(分)屬(分)の中を任せしこと。

にふた 入湯〔名〕湯に入ること。ゆあみ。入浴。

にふた 入唐〔名〕にたつ(入唐)に同じ。運歩色葉集。入唐、ニフタウ。

にふた 入黨〔名〕或黨に加入すること。その黨の黨員となること。

にふた 入道〔名〕「佛」佛道に歸入して、一身をこれに捧ぐることに。出家。大鷲肥前の條(佛)摘良利殿に候ひけるが、入道して、修行の御供にも、これのみぞ仕うまつりける。目「佛」在家(佛)のままにて、剃髮染衣(佛)せる者(寺)に、平安朝の中頃より區別するに至れり。目「佛」三位以上の人、在家(佛)のままにて、剃髮染衣(佛)せる者(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にふた 入道(新發意(佛)に對して)。

にへ 贅(名) 前條の語の轉義「朝廷

又は神社に獻る土產(殊に食用の魚など)。「牲」にけ(生贅)参照。「古語」夫木「養降る玉野の原に御狩して天」の日文(元)の贅たてまつる。おくりもの。みやげ。進物。苞苴。大連人の奉りたる贅などいふ物は、御前の庭に置かせ給ひて「牲」に赴く羊「句」屠所(す)の羊に同じ。「語」太宰記に赴く羊の、驅られて、廟に近づく思をなす。

贅の土師(す)「句」雄略天皇の十七年、日用の清器を作らしめられし、攝津山城、伊勢、丹波、但馬、丹後の土師。贅の初刈(は)「句」贅に用ふるその年の稻を、始めて刈取ること。にへがり(贅狩)参照。「古語」數本「こり果てぬ贅の初刈あさりする宿にもあらで人罵しつる」

にへ 鰐(名)「動」硬骨類に屬する魚。石首魚(す)の成長したるもの。深海の泥底に棲み、形、甘鯛(す)に似て、長さ三尺餘に達し、背に紅と淡黒との斑あり、腹は黄色を呈し、脊鰭は灰色にて、鰭は細やかなり。肉は食すべく、腹中の鰾(は)は、優良なる魚膠の材料となる。くち。和名「鰐」通倍一云、久知」



にへ 魚膠(名)「名」鰐(す)の鰾(は)を始とし、鰐(す)鰾(は)鰐(す)鰾(は)鰐(す)鰾(は)などの鰾、狸の皮などにて製する膠(は)普通の膠よりも粘着力強く、薬用として、刺戟緩和の目的にて、内服又は注射に供し、又、食料品の製造等、工業上の用途頗る汎し。にへには。人(に)にやさしくいふこと。つや。愛敬。世辭。雙生(田川)詞ににへも輕薄も、荒木を伐つて投出したり」

魚膠も無い「句」愛想無し。愛敬に乏し。すげなし。あはつけれ。諸國物語「にへもなく言ひ切つて」

にへ(名)「植」さるあざ(黃蜀葵)に同じ。にへ。二柄(名)「韓非子の二柄篇に「明主之所導、制其臣一者、二柄而已矣。二柄者、刑德也。劉勰新論に「以賞罰爲二柄、賞勸功、罰懲過」とあり。君主の、臣下を賞するのと、罰するのと。政治と兵馬との二つの権力。

にへうみ 贅海(名) 次條の略。贅海の神事(す)「句」昔、伊勢神宮の御寶物の料として、毎年六月十五日、福宜(引率)の下に、伊勢國二見(す)の浦と志摩國答志(す)島の西なる群礁阿原岐(す)島との間の海上にて、鰐(す)海松(す)の三種を採りし神事。

にへがり 贅狩(名) 贅(す)の料とするために、狩獵をなすこと。「贅の初刈(は)」参照。「古語」蘇軾言「贅狩の日なみの今日は來にけりとはつとやだしの鷹のかりぎぬ」

にへくひばうず 贅食坊主(名) 次條を贅食坊主の布施好(す)「句」なまぐさ坊主、とかくに布施を得ること。を好む。「語」

にへくむにへ込む「動四自」にえむ(にへ)「語」多きさま。さは。澤山。「古語」馬多、ニヘサニ。肥後長門、俗見多物、即云三兩倍佐爾」

にへく二別(名) 名乗を書くに、上の字を常體にて、下の字のみを、草體にくづすこと。にへふ(二合)参照。

にへくかひ 贅使(名) 贅(す)を奉進する使者。男儀集「壬生忠岑、日次(す)の贅使として、葛野(す)川の贅殿にあり」にへくたい 二別體(名) 二別の書き方にせる押字(す)。一字體。

にへく 贅殿(名) 贅(す)を納めおき、又は調理する建物。朝廷のは、内膳司に屬し、職員に別當藏人(す)預(す)出納ありて、諸國より貢進し、供御の料とする物を納めおき、又は調理し、攝關大臣家のは、別當・預膳夫(す)等の職員ありて、

饗饌を納めおき、又は調理したり。又、大嘗會の時、悠紀(す)主基(す)の内院の中に設けて神供を納むる所をもいへり。にへや。著聞、妙音院入道殿、……贅殿の別當なりける侍を召して、麥飯(す)に觸合せて煮て、只今調進すべき由仰せられれば、宇並茂經、大殿に参りて、贅殿に居たる程に、淡路守頼親の朝臣の許より、鯛の苞苴(す)を多く獻りたりけるを」

にへり 贅殿にて、調理の業に従ふ人。庖丁の人。贅世(す)然るべき贅(す)など仕れと催しければ、後綱、今、贅殿に参り侍りなむと申しければ」

にへどり 贅(名)「動」にへ(場)に同じ。にへにかは 魚膠鰐膠(名)にへ(魚膠)に同じ。

にへうら 贅浦(名)「地」伊勢國度會(す)郡鵜飼(す)村の大字。鵜飼(す)浦の一支瀕に臨み、古は、南海、船舶の上下するもの寄泊し、妓樓などありて賑はしかりきと傳ふ。遠江國濱名郡に在りし地といふ。萬葉とほたあふみしかはの磯とにへ浦とあひてしあらば言(す)も通はむ」

にへうき 贅櫓(名) 古、出羽に在りし櫓。藤原泰衡の將河田次郎ここに居り、泰衡を襲殺せし所。羽後國北秋田郡三井田村は、その址なりといふ。能代(す)川の左岸、大館(す)町の南に近し。又大館町がその址なりともいふ。

にへうき 魚膠木(名)「植」のり(す)にへ(糊洩琉)に同じ。

にへびと 贅人(名) 贅(す)に供する魚鳥などを捕る人。にへりする人。「古語」神樂歌(鳥歌)こも枕高瀬の淀にや誰(す)がにへ人ぞ鳴突きのぼる網おろし、さてさしのぼるあひ誰がにへ人ぞ」

にへん 二掃(名) 一つはること。兩舌。「豊後國の方言」「尿と。兩便。にへん 二便(名) 大便と小便と。糞とにへや 贅屋・管屋(名)にへ(贅殿)にへ(贅屋)にへ(管屋)にへ(管屋)に集まり、初獻(す)の御有を始として、皆皆請

取り、持參せらるる」

にへたり 魚膠折・鰐膠折(名) 管をも切らず、拗めもせざる弓を、疊又は板などに當て、未答(す)を人に持たせて、押し試みること。七・職人歌合「この弓は、弦をきらはんずるぞ。にへをり大事なるべき」

にへ堆(名) いなむら(稻選)に同じ。にへ 鵠(名)「動」鵠は、水中に入る鳥の義にて作りたる和字。游禽類に屬する鳥。湖沼に棲み、鴨に似て小く、長さ七八寸、尾、極めて短く、兩翼も亦短く、足、尾部に偏在し、各趾扁闊にして、板狀の蹼あり。體色、背面は黒褐、胸部は黄色を帯び、腹部は灰色、嘴短けれども堅硬・尖鋭、基部は黄綠色、先端は黒色、頬と頭上とに長毛あり。巧に水を潜りて、魚を捕へ食ひ、又、藻樹葉などを集めて、水上に巢を營み、鵠の浮巢(す)の稱あり。「にへ」は古名にて、今は「かいつぶり」又は「かいつむり」と呼ぶ。にへどり。むぐり。むくつ。うよめ。しながどり。つぶり。字鏡「鵠、爾保」無名抄にほの、巢をくふには、葉の莖を中に籠めて、しかも枯小葉をくつろげて、めぐりにくひたれば、潮満てば、上へあがり、汐干れば、隨ひて下(る)なり」

「地」にほ(鵠海)の略。猿蓑(去來)「螢火や吹飛ばされて鵠の團」

鵠の浮巢(す)「句」前條を見よ。鵠政集子「思ふ鵠の浮巢のゆられ來て捨てじとすれやみがくれもせぬ」

鵠の下道(す)「句」鵠は巧に水を潜る性質あるによりて、下道に言ひかけたるなり「物の陰にある通路。續載「えぞ知らぬ鵠の下道みがくれて通ふ心のありやなしと」

にほうくわん 二寶荒神(名)「さんぼうくわん(三寶荒神)にもとづきて呼べるもの」馬の鞍の左右に、框(す)又は箱やうの物を取附けて、二人にて乗り、又は二つの物を乗すること。にはうくわんじん。藤原馬、その荷を附けてお一人、この旦那と二ほう荒神に乘らんせんかいな」

にへふは ねねにな とてつちた そせすしさ こけきか おえういあ

にほかは

にほかは 仁保川「名」「地」にほのうみ(海)を見よ 近江國日野川の下流。
にほじ 煮乾「名」煮て乾すこと、又、乾したるもの。 鰯(魚)などの煮て乾したるもの。

にほす 句す「動四他」にほす(句はす)に同じ。「古語」萬葉奈良山を丹(こほす)紅葉をたをり来て」

にほつひめの一みこ 兩保都比賣命「名」にほつひめのかみ(丹生津比賣神)に同じ。

にほてる 鴈照る「動四自」「にほどり(鴈鳥)の轉訛にて、古事記の中卷なる「鴈鳥」の近江の海にかづきせな吾(こほす)は、鴈鳥の、……かづき」と、句を隔ててかかる枕詞なるを「近江」にかかるものと誤解し、その枕詞を、直ちに近江國の意に用ふるに至れるなりとの説もあり」にほの海、照りかがやく。 續後撰唐崎やにほ照る沖に雲消えて月の水に秋風ぞ吹く」月清志賀の海の汀ばかりは米にてにほ照る月を寄する白波」

にほてるうみ 鴈照海「名」「地」近江國琵琶湖の別稱。 新後撰山の名を分けてはいはじ月影のにほてる海も鏡なりけり」

にほどり 鴈鳥「名」「動」にほ(鴈)に同じにほどりの鴈鳥の「枕」鴈鳥は水鳥なるより、あしぬらす(足濡らす)にかけていふ。 萬葉思ふにも餘りにしかば鴈鳥の足ぬらしくを人見けむか」鴈鳥は小魚を捕へ食はんとて、水に潜(ひそ)く鳥なかり、かつて(潜)又はそれに發音近きかつにかづきせな吾(こほす)鴈鳥の淡海(うみ)のかづきせな吾(こほす)萬葉鴈鳥のかづしか早稻(こほす)をにへすともそのかなしきを外(へ)に立てめやも」鴈鳥は水に著く鳥なるより、なづきふにかづきいふ。 萬葉「鴈鳥のなづきふ行けば」四鴈鳥は潜(ひそ)きたる後、水面に首を出して、長く息づくより、おきなが(息長)にかけていふ。 萬葉「鴈鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむこと盡きめやも」鴈鳥は雌雄並び居るより、ならびる(並居)にかけていふ。 萬葉「鴈鳥のふたりならびる、語らひし心そむきて」

にほのう

にほのうみ 鴈海「名」「地」もと、その一部、仁保川日野川の下流仁保村を流るるによりていふの川口邊の名なりしなるべしといふ。 近江國琵琶湖の別稱。にほてるうみ。 千鶴わが袖の涙や鴈の海ならんかりにも人みるめなれば」

にほはし 句はし「形二」にほひやかなり。「古語」源氏鼻なども、あざやかなる所なうねびれて、句はしき所も見えず」

にほはす 句はす「動四他」にほふやうにす。 本草又は赤土などの色を染(そ)附かせて、色どる。 萬葉草枕旅行く君と知れさせば岸のはにふににほはさましと」

にほはす 句はす「動四他」にほふやうにす。 本草又は赤土などの色を染(そ)附かせて、色どる。 萬葉草枕旅行く君と知れさせば岸のはにふににほはさましと」

にほはす 句はす「動四他」にほふやうにす。 本草又は赤土などの色を染(そ)附かせて、色どる。 萬葉草枕旅行く君と知れさせば岸のはにふににほはさましと」

にほはす 句はす「動四他」にほふやうにす。 本草又は赤土などの色を染(そ)附かせて、色どる。 萬葉草枕旅行く君と知れさせば岸のはにふににほはさましと」

にほのう

にほひ 句は「文」「句はぬ花」を見よ」連句の名残(なごり)の折の花の句。 この句の時、香(か)をたくを法とす。

にほひ 句は「文」「句はぬ花」を見よ」連句の名残(なごり)の折の花の句。 この句の時、香(か)をたくを法とす。

にほひ 句は「文」「句はぬ花」を見よ」連句の名残(なごり)の折の花の句。 この句の時、香(か)をたくを法とす。

にほひ 句は「文」「句はぬ花」を見よ」連句の名残(なごり)の折の花の句。 この句の時、香(か)をたくを法とす。

にほひ 句は「文」「句はぬ花」を見よ」連句の名残(なごり)の折の花の句。 この句の時、香(か)をたくを法とす。

にほひ

にほひ 句は「文」「句はぬ花」を見よ」連句の名残(なごり)の折の花の句。 この句の時、香(か)をたくを法とす。

にほひ 句は「文」「句はぬ花」を見よ」連句の名残(なごり)の折の花の句。 この句の時、香(か)をたくを法とす。

にほひ 句は「文」「句はぬ花」を見よ」連句の名残(なごり)の折の花の句。 この句の時、香(か)をたくを法とす。

にほひ 句は「文」「句はぬ花」を見よ」連句の名残(なごり)の折の花の句。 この句の時、香(か)をたくを法とす。

にほひ 句は「文」「句はぬ花」を見よ」連句の名残(なごり)の折の花の句。 この句の時、香(か)をたくを法とす。



(れみすひほに)

にほんが

我國在來の構造に依る船舶、即ち帆と櫓とによりて航走する、極めて幼稚なるものと。政府は明治二十年を以て、その五百石以上の建造を禁ぜり。現存するものには、大和船・北前船・段平船・船達摩船・船傳馬船・荷足船・唐牙船等あり。日本形船。

にほんがふ日本樂府「名」(書)「日出處」三轉來「炊烟起」に始まり「夜叉來」に終る樂府六十六首と、每篇の事歴とを記したるもの。一卷。頼山陽の著。李賓の明史樂府に擬したるなり。

にほんぎ日本紀「名」(書)「書にほんしき」(日本書紀)に同じ。我國の歴史。國史。大類「翁らが説く事は、日本紀を聞くとおぼすばかりぞかし」増補の雲林院の著。の菩提講に参りありし翁の言の葉をこそ、假名の日本紀にはすめれ。

日本紀の家「句」古我國の歴史を専門の職とせし家、即ち紀傳道文章の道などの家。本家蜀神代事を書き、いかにも日本紀の家に存じ知るべき事なれば、くはくし尋ねたまはんとて。

にほんぎうたのかい日本紀歌解「名」(書)次條に同じ。

にほんぎかかい日本紀歌解「名」(書)日本書紀の中にある歌を解釋せるもの。三卷。荒木田久老の著。

にほんぎきやうえんのうた日本紀竟宴歌「名」(書)昔、日本書紀の竟宴の折、その書中にある神名人を題として詠める歌を集めたるもの。一卷。

にほんぎくくつ日本紀口訣「名」(書)日本書紀を註釋説明せるもの。尾形正通の著。その一部、神代の卷のみを傳寫せるを、神代卷口訣といひ、五卷あり。

にほんぎさん日本紀纂疏「名」(書)日本書紀の神代の卷を、漢文上に註釋し、勅撰の由來、撰者の事、修史上の舊説、和訓の本末等を、巻頭に詳述せるもの。上下二卷、上卷を五册、下卷を三册に分つ。一條兼良の著。一名、神代纂疏。

にほんぎしき日本紀私記「名」(書)日

にほんき

本書紀の中の語句に訓を附したるもの。昔朝廷にて、日本書紀を講せしめたまひしその時の、博士の私記ありたりとの説あれど、現存のこの書が、即ちその當時のものなりやは、明かならず。十五卷。

にほんきのつぼね日本紀局「名」(人)一條天皇、式部の作りたる源氏物語を見たまひて、式部は、日本紀を熟讀したる者なるべしとの仰ありしに、なにがしの局の妬みて、日本紀の局といひし由、紫式部日記に記せるによりていふ「むろさきしき」(紫式部)の異稱。

にほんぎんかう日本銀行「名」我國金融機關の中心たる中央銀行。株式組織にして、明治十五年に設立せられ、總裁理事等の職員は、政府より任命せられ、政府の特別なる監督の下に、特別の義務を負ひて、普通の銀行業務の外、國庫金の取扱、兌換銀行券の發行、又、公債の募集償還等の業務を取扱ふ。本店は東京市日本橋區本兩替町に在り。

にほんぎんかうかんりくわん日本銀行監理官「名」大藏大臣の命を受けて、日本銀行の業務を監理する職。

にほんぎんかうそうさい日本銀行總裁「名」日本銀行の重役の一。日本銀行事務を總理し、日本銀行が、國庫金を取扱ふ場合に、金庫出納役として、國庫金の出納を掌る勤務に。

にほんきりすといちけうくわい日本基督教一致教會「名」(書)次條に同じ。基督教一致教會「名」(書)次條に同じ。

にほんきりすといちけうくわい日本基督教一致教會「名」(書)我國の基督教の一派。安政六年亞米利加長老教會派遣の宣教師へボン(T. G. Bonner)博士次いで、亞米利加の和蘭改革派教會派遣の宣教師ブラウン(S. R. Brown)、シェンズ(D. B. Shennos)、ナン・ベッキ(G. J. Vanbeck)の諸氏によりて、宣傳せられ、明治九年亞米利加長老派・蘇格蘭派・長老派及び和蘭改革派教會の三派合同して、日本基督教一致教會と稱せしもの、同二十三年今の名に改む。井深堀之助、植村正久など、この派の

名士たり。

にほんき

にほんきりやく日本紀略「名」(書)神代より後一條天皇の長元九年に至るまでの重要な史實を、漢文にて編年的に略記したるもの。二十册。編者詳かならず。宇多天皇以前の部は、大抵六國史の抄出に係る。

にほんぐま二本限「名」芝居の限取の一種。二筋に限取るもの。芝居筋(シバキ)。

にほんぐま日本熊「名」(動)我國に産する普通の熊。體龐大ならずして、毛色純黒、ただ喉の部分に、白色の差毛ありて、月輪(ツキグハ)と呼ばれる。

にほんぐわ日本畫「名」我國在來の畫風、又その畫。

にほんぐわいぐわくわい日本繪畫協會「名」美術學校長岡倉覺三の、後進推奨の目的にて設立せし、日本畫研究の團體。西洋畫の白馬會と對峙して、嘗ては、各その一方を代表したり。にほんびじゅつ(日本美術院)参照。

にほんぐわい日本外史「名」(書)源氏より徳川氏に至るまでの武家の歴史を、漢文にて書き、所所に史論を插めるもの。二十二卷。頼夷(らゐ)の著。

にほんぐわい日本畫史「名」(書)ぜんげん(前賢故實)を見よ。

にほんぐわん日本館「名」『東京市淺草公園の日本館と呼ぶ興行場の歌劇の、飛び跳ぬることにて有名なよりいふ』御轉婆(おはね)娘。おはね。(但語)

にほんぐわんけふぎんかう日本勸業銀行「名」我國の特殊銀行の一。農業と工業との改良發達のために、不動産を抵當として、長期貸付を目的とし、農工債券の引受、勸業債券の發行等の業務を取扱ふ株式會社。明治三十年日本勸業銀行法に基き、資本金壹千萬圓を以て設立す。本店は東京市麹町區内山下町一丁目に在り。

にほんぐ

にほんぐわんけふぎんかうそうさい日本勸業銀行總裁「名」日本勸業銀行の重役の首席として、同銀行を代表し、その事務を總理する職。

にほんぐわん日本硯日本研「名」(書)宋景濂集に「日本硯、夷而華、四海一家、此非文明之化耶」とあり、方遜志にも見ゆ。日本にて製造せる硯を、支那の明人が呼びし稱。

にほんぐ日本語「名」我國の言葉。國にほんぐき日本後紀「名」(書)桓武天皇の延暦十一年正月より、淳和天皇の天長十年二月までの事蹟を、漢文にて記せるもの。六國史の一。四十卷。撰者は、藤原冬嗣なりとも、藤原繼繩なりともいふ。

にほんぐらけふぎんかう日本興業銀行「名」我國の特殊銀行の一。政府の特別なる監督補助を受け、工業を改良進歩せしむる目的にて、國債證券地方債證券株式を質とする貸付、これら證券債券の應募引受、及び信託業務債券の發行等の業務を取扱ひ得る株式會社。明治三十五年日本興業銀行法によりて設立す。本店は東京市麹町區錢堀(かひ)町一番地に在り。

にほんぐらけふぎんかうかんりくわん日本興業銀行監理官「名」大藏大臣の命を受けて、日本興業銀行の業務を監理する職。

にほんぐらけふぎんかうそうさい日本興業銀行總裁「名」日本興業銀行の重役の首席として、同銀行を代表し、その業務を總理する職。

にほんぐらけふぎんかう日本弘道會「名」國民道德の發展を圖らんがために、西村茂樹の主率せし團體。明治三年同氏の阪谷素等と創立せし修身學社の後身にして、同十三年講道會と改稱し、同十七年西村氏の會長となり、二十年更に日本弘道會と改む。

にほんぐらけふぎんかう日本國總追捕使「名」『平家物語の卷十二に、鎌倉殿、日本國の總追捕使を給はりて、段別に兵糧米を宛て行はるべきの由、申されけれ

るをわ

ば、増鏡の新島守に「頼朝、……諸國の總追捕使といふ事承り、地頭職に、我家のつはものどもをなし集めけり」とある等の文意の紛はしきに基づく誤なり。そうある(總追捕使)を見よ。諸國に守護地頭を置いて、自ら總轄せし源頼朝の、地位の俗稱。正しき職名にはあらず。諸國總追捕使。六十六國總追捕使。

にほんごだいむかひばなし 日本五大昔噺 [名] 曲亭馬琴、始めて、この五話を、その著燕石雜話中に、童話と名づけて、考證を試みたり。我國の古來有名なる五つの御伽話、即ち桃太郎、かちかち山猿、合戦、古切雀及び花咲爺(かちかち山猿)。

にほんごへんてん 日本五辯天 [名] 我國にて祀れる辨天の有名なる五箇所、即ち近江國の竹生(たけのう)島、相模國の江ノ島、安藝國の嚴島、大和國の天川(あまがは)及び陸前國の金華山。

にほんごさいごん 日本歳時記 [名] 「書」一年間の故事、雜事を漢土の書によりて、假名文にて記し、又、我國の故實、習俗を、見聞に從ひて述べたるもの。七卷。貝原益軒の著。

にほんごさいもん 日本祭文 [名] 「日本一流の祭文の義」ひたさいもん(常陸祭文)に同じ。

にほんごさじ 二本差 [名] 「二本差す」を見よ。ふし(武士)の異稱。にほんごう(二本棒)参照。「徳川時代の語」。白焼豆腐又は豆腐田樂の稱。

にほんごさんぎふりう 日本三急流 [名] 「地」我國にて最も有名なる、三箇所の急流、即ち羽前國の最上(もがみ)川、駿河國の富士川、肥後國の球磨(たまき)川。

にほんごさんけい 日本三景 [名] 「地」日本全國の中に、景色の絶勝なる三箇所の地、即ち陸前國の松島、安藝國の嚴島、丹後國の天橋立(あまはしだて)。にほんごじけい(日本十二景)参照。

にほんごさる 日本猿 [名] 「動」(動)さる(猿)にほんごさる 日本猿 [名] 我國在來の渡き方にて製したる紙。日本製の紙。和紙。

にほんごし 日本史 [名] 「書」にほんれきし(日本歴史)に同じ。にほんごし(大日本史)の略。

にほんごしき 日本詩紀 [名] 「書」平治以前に於ける我國人の漢詩を、ほぼ年代の順に排纂したるもの。五十卷。外集別集各一卷を附す。市河寬斎の撰。

にほんごしにけい 日本十二景 [名] 「地」日本全國の中に、景色の絶勝なる十二箇所の地、即ち日本三景の外に、駿河國の田子浦、筑前國の箱崎、武藏國の芝浦、金澤、近江國の琵琶湖、羽後國の象潟、伊勢國の朝熊、出雲國の松江、播磨國の明石(あかし)を加へていふ稱。

にほんごじん 日本人 [名] 「日本國の人」にほんじん。三宅雪嶺井上圓了(ごんりょう)賀別川(かへつがわ)棚橋一郎等の、日本主義を標榜して組織せし政教社にて、明治二十一年より發行せる雜誌。

にほんごんえいたいぐら 日本新永代藏 [名] 「書」日本永代藏に倣ひたる浮世草子。六卷。北條國水の著。

にほんごやくみやう 日本釋名 [名] 「書」支那漢の劉熙の釋名に倣ひて、天象地理宮室より、衣服器物、虚字等に至る二十餘目に分ち、日本書紀萬葉集以下の古書を參考し、自語、轉語、略語、借語、義語、反略子語、音語の八綱目を立て、和訓の義を釋せるもの。三卷。貝原益軒の著。

にほんごゆ 日本酒 [名] 我國在來の釀造法に依る酒(殊にその清酒)。和酒。(支那酒西洋酒などに對して)

にほんごよき 日本書紀 [名] 「書」神代より持統天皇の十一年八月までの事蹟を、漢文にて記せるもの。六國史の一。三十卷。その内、一、二の兩卷は神代紀。養老四年(人)親王(太安廣)等、勅を奉じて撰ぶ。外に系圖一卷ありたりといへど、今傳はらず。略して、書紀又は、單に紀とも、又日本紀ともいふ。

にほんごよきしむせ 日本書紀私抄 [名] 「書」日本書紀を註釋せるもの。一冊。淨土宗の第七祖了譽聖因(しやうい)の著。當時す

てに書紀の註釋ありたる點に於て、珍書の二に數へらる。

にほんごよきしむせう 日本書紀通證 [名] 「書」日本書紀の中より、字句を摘出して、漢籍、佛書を引き、又諸家の説を擧げて、漢文にて註釋せるもの。三十五卷。谷川士清(しやうせい)の著。

にほんごよきてん 日本書紀傳 [名] 「書」日本書紀を註釋せるもの。四十一卷、百四十七冊。鈴木重胤の著。

にほんごよく 日本食 [名] 日本風の食事。(洋食に對して)

にほんごよきさう 日本書紀考 [名] 「書」日本紀古事記舊事記より近代の雜記に至る百二十部の作者、卷數及び内容の大意等を記せるもの。一卷。林道春の著。我國最初の解題書なり。

にほんごすぎ 二本杉 [名] 紋所の一。立木の杉の形二つを並べて描けるもの。

にほんごせい 日本勢 [名] 日本軍勢。如斯(ごと)く日本勢一人は伽羅(がら)の目利(めど)なり。

にほんごせい 日本政記 [名] 「書」神武天皇より後陽成天皇に至る百八代二千年間の事蹟を、一代毎に本紀を立て、史實を悉くこれに俵け、その間に自家の論斷を交へ、漢文にて記せるもの。十六卷。賴襄(らいてう)の著。

にほんごせいけうくわい 日本正教會 [名] 「書」我國の基督教中、露國正教會を母教とせるもの。ニコライ(ニコラエ)大主教の開拓によりて發達す。明治五年東京市神田區區河臺に、宣教師を建てて傳道に従事し、二十四年同地に大聖堂落成してより基礎確立し、四十五年ニコライ主教死後のため、ベトコグラド宗教大學總長セルギイ(セルギイ)主教、その後を繼ぎ、露西亞本國の革命後、傳道費の出途を失ひて大打撃を受く、大聖堂は、面積一四六六平方呎、堂宇の高さ一五呎、鐘樓の高さ一二五呎に及び、俗にニコライ堂と呼ばれ、その鐘聲と共に、市内の一名物に數へられしが、大正十二年の震災火災によ

りて、舊觀を失へり。

にほんごせいけうくわい 日本西教史 [名] 「書」基督教の我國への傳來並びにその當時の我國の國狀を記せるもの。佛人クラッセの原著を、太政官にて翻譯、出版せるもの。

にほんごせいけうくわい 日本聖公會 [名] 「書」我國の基督教中、羅馬教會の誤謬を排斥して、教義を立てたるもの。我國新教の率先來朝者なる米人リッギンス(R. Liggins)監督ウィリアムス(Williams)の開創に係り、明治二十年、英、米兩派の合同ありて、今日に至る。

にほんごせんぱく 日本船舶 [名] 我國の國籍を有する船舶。

にほんごそうこくふどき 日本總國風土記 [名] 「書」我國全土の地理の沿革を、國別に記したるもの。山背(やまのへ)和泉、攝津、河津、江、瀨、常陸、近江、信濃、越前、加賀、但馬、備前等三十三國の分存し、今井兼開は、その著書萬葉緯に収められど、實は偽書にして、事實に合はざる記事多し。

にほんごたう 日本刀 [名] 我國固有の鍛錬法によりて作りたる刀劍。

にほんごたうぐ 二本道具 [名] 江戸時代に、諸侯の家格によりて、行列に立てたる二本の槍。ふたつたうぐ。二代男、二本道具の大名。

にほんごたうのうた 日本刀歌 [名] 「文」支那宋の歐陽修が、日本刀の銳利なるを譽めて作りたる七言二十四句の詩。

にほんごたまじひ 日本魂 [名] やまだまじひ(天和魂)に同じ。

にほんごちゆうけつぎふちゆうひやう 日本住血吸蟲病 [名] かたまたまやう(片山病)に同じ。

にほんごちり 日本地理 [名] 我國の地理。(學校の課目などにいふ)

にほんごつみ 日本堤 [名] 「地」二條に築きしより、二本堤の意にて云へりとも、六十餘日を費して築きしより、日本の當時の國數に擬へて名づけしより、又、日本國中の諸大名總掛りにて作りし故ともい

カビネ形より小く、手札形より大く、四時に五時のもの。

にまいがた二枚肩【名】駕籠を、二人にて昇くこと、又その駕籠。俗曲三谷がへり

「二枚肩にもえ乗らいて、焼印(34)編笠うちかざし、丹波口にて蹴つまづいて」

にまいかちのは二枚梶葉【名】紋所の

一、梶の葉を二枚並べて描けるもの。

にまいがひ二枚貝【名】「動」左右二枚の介殻を有する軟體動物、即ち海貝(35)類に属するもの。

にまいかんさつ二枚鑑札【名】一人にて、藝妓と娼妓とを兼ねる女。鳴重新話

「使つ藝妓兼娼妓之業、曲中稱曰二枚鑑札」

にまいぐじ二枚櫛【名】昔、遊女が、櫛二枚を、左右に並べ

挿して、飾とせしこと。

にまいじた二枚舌【名】「舌」を二枚に

使ふ【名】前後矛盾して、二様にいふこと。兩舌。二言(36)。

にまいた二枚舂【名】西内紙(37)に

二枚を用ひて造りたる舂。

にまいつるがひは二枚蔓柏【名】紋所の

柏の一。左右に開ける葉の上方に蔓を配して描けるもの。

にまいど二枚月【名】二枚びらきの月。

若風俗「二枚月をあけて、長廊下、さし足して行く」

にまいどびら二枚扉【名】二枚びらきの

にまいはかぶど二枚葉冑【名】紋所の

冑の一。左右に開ける葉形を、冑の胸上につけたる形に描けるもの。

にまいはたかぶど二枚葉立冑【名】紋所の冑の一。立てたる二枚の葉形を、冑の胸上につけたる形に描けるもの。

にまいびらき二枚開【名】くわんおんびら

き(観音開)に同じ。

にまいみおし二枚水押【名】二枚より

成る、一種の水押。その二枚の間を咽込

(38)といひ、水押の上にある板を、棹走(39)

にまいめ二枚目【名】「まい(枚)」を見

よ「昔の芝居にて、名題役者の内、立役

(40)ならば座頭(41)に次ぐ者、女形(42)ならば立女形(43)に次ぐ者、又、立作者

(44)に次ぐ作者、二枚目の立役(45)、二枚目の女形(46)、二枚目の作者など呼び

たり。



にまいめ二枚目【名】「まい(枚)」を見

よ「昔の芝居にて、名題役者の内、立役

(40)ならば座頭(41)に次ぐ者、女形(42)ならば立女形(43)に次ぐ者、又、立作者

(44)に次ぐ作者、二枚目の立役(45)、二枚目の女形(46)、二枚目の作者など呼び

たり。

にまいめ二枚目【名】「まい(枚)」を見

よ「昔の芝居にて、名題役者の内、立役

(40)ならば座頭(41)に次ぐ者、女形(42)ならば立女形(43)に次ぐ者、又、立作者

(44)に次ぐ作者、二枚目の立役(45)、二枚目の女形(46)、二枚目の作者など呼び

たり。

にまいめ二枚目【名】「まい(枚)」を見

よ「昔の芝居にて、名題役者の内、立役

(40)ならば座頭(41)に次ぐ者、女形(42)ならば立女形(43)に次ぐ者、又、立作者

(44)に次ぐ作者、二枚目の立役(45)、二枚目の女形(46)、二枚目の作者など呼び

たり。

にまいめ二枚目【名】「まい(枚)」を見

よ「昔の芝居にて、名題役者の内、立役

(40)ならば座頭(41)に次ぐ者、女形(42)ならば立女形(43)に次ぐ者、又、立作者

(44)に次ぐ作者、二枚目の立役(45)、二枚目の女形(46)、二枚目の作者など呼び

たり。

にまいめ二枚目【名】「まい(枚)」を見

よ「昔の芝居にて、名題役者の内、立役

(40)ならば座頭(41)に次ぐ者、女形(42)ならば立女形(43)に次ぐ者、又、立作者

(44)に次ぐ作者、二枚目の立役(45)、二枚目の女形(46)、二枚目の作者など呼び

たり。

にまいめ二枚目【名】「まい(枚)」を見

よ「昔の芝居にて、名題役者の内、立役

(40)ならば座頭(41)に次ぐ者、女形(42)ならば立女形(43)に次ぐ者、又、立作者

(44)に次ぐ作者、二枚目の立役(45)、二枚目の女形(46)、二枚目の作者など呼び

たり。

にまいめ二枚目【名】「まい(枚)」を見

よ「昔の芝居にて、名題役者の内、立役

起重機を用をなすやうにせるもの。

にまんごせん【名】二萬五千日【名】京

都・長崎などの清水寺の観音に、毎年七月

十日に諸人の参詣すること。この日詣づ

れば二萬五千日参詣したると同じ功徳

ありといふ。四萬六千日の類。黒谷選七

月十日けふは二萬五千日の功徳とか

や。殊に、女心の頼みおける物語の日なる

べし。

にまめ煮豆【名】大豆・黑豆などの、砂

糖醬油などに煮染めたるもの。

煮豆に花の咲きたる如し【句】「妙

豆(47)に花が咲く」に同じ。【諺語】

にまめ煮豆屋【名】煮豆を賣る家、又

その人。

にまめ煮豆【名】生絲(48)製造の際、繭

を湯にて煮て、互に膠着せる繭絲を分離

すること。

にみな任那【名】「地」みな(任那)に同じ。

にみん二眼【名】「農」みん(眠期)を見

よ。

身より仁を離さざること、重き荷を負

ひて遠き道を行くに等し。【諺語】

にん忍【名】「し」のぶこと。こらふるこ

と。我慢。【佛】已も怒らず、他人に對

しても、憤怒の念を生ぜしめぬこと。【

身を隠すこと。忍術。

にん仁【名】中唐に「仁者人也」とあ

り、佛經中にも、同輩の者を呼ぶに「仁」又

は「仁者」の語を以てせること多し【にん

(人)に同じ。【生】せうか(小核)に同じ。

にん植【名】しゆか(種核)に同じ。

にん人【名】「助數」人数を數ふるに用ふ

る語。【何人】十五人。

にんあん仁安【名】六條天皇の御代の年

號(紀元一八二六年—一八二八年)。

にんい任意【名】心のままにすること。

きまかせ。こころまかせ。隨意。勝手。

任意上の代理人【句】「法」にんいだい

にん(任意代理人)に同じ。

任意の【句】「數」英(39)「何れを選ぶ

よなる。【直線】中(39)の任意の點「任意

の數を取り來りて」

にんいき任意規定【名】「法」にんい

てきてい(任意の規定)に同じ。

にんいきやう任意競賣【名】「法」

【獨Freiwiliges Auction】競賣をなす權利

を有する者が、任意に執達吏に委任して

行ふ競賣。

にんいくみあひ任意組合【名】「法」公

共組合の一種。その設立を、全く組合員

たるべき者の自由意思に放任し、國家は

國家の目的に符合する場合に認可する

外、組合員の加入を強制せざるもの。例

へば、商業會議所の類。(強制組合半強制

組合に對して)

にんい(39)任意公債【名】「經」獨

Freiwiligenanleihe)その募集を應募者

の任意とする公債。(強制公債に對して)

にんい(39)任意國債【名】「經」任

意公債なる國債。

にんい(39)任意債務【名】「法」獨

Freiwilige Obligation)債務者が、その債

2323

務の内容たる給付に代へて、他の給付をなすことを得る場合、又は債権者がその債権の内容たる給付に代へて、他の給付を請求することを得る場合の債務。例へば損害賠償として、金千圓を支拂ふべきを、十日間の謝罪廣告掲載を以て、これに代ふるも可なりといふ類。せんたうきむ(選擇債務)参照。

にんじやうたり任意上代理【名】
【法】にんじやうたり任意代理に同じ。(法律上代理に對して)
にんじやうたり任意出頭【名】
【法】にんじやうたり任意出頭に同じ。(法律上代理人に對して)
にんじやうたり任意出頭【名】
【法】Freiwillige Anwesenheit 訴訟の當事者が、裁判所の召喚を受けざるに、口頭辯論のため、任意に出頭すること。

にんじやうたり任意準備金【名】
【法】Freiwilliger Reservefonds 會社銀行などが、法律の規定によらず、定款の規定に基づき、任意に積立つる準備金。
にんじやうたり任意代理【名】
【法】Freiwilliges Vertretung 代理の一。委任その他の法律行為に基づくもの。任意上代理(法定代理に對して)にんじやうたり(委任代理)参照。

にんじやうたり任意代理人【名】
【法】Freiwilliges Vertreter 本人の意思に基づき、代理権を取得したる代理人。任意上代理人(法定代理人に對して)
にんじやうたり任意代位【名】
【法】Freiwillige Stellvertretung 代位の一種。その債務の辨済をなすに就きて、正當の利益を有せざる者が、債務者のために辨済をなし、これと同時に、債権者の承諾を得て、代位債権者たるもの。任意の代位辨済。(法定代位に對して)

にんじやうたり任意規定【名】
【法】にんじやうたり任意規定に同じ。
にんじやうたり任意給料制度【名】
【法】給料制度の一。官制によりて、官吏の俸給手當等を定め、又は民

2324

法上の雇傭契約によりて、給料を定むるなど、任意的にして、強制的にあらざるもの。(強制的給料制度に對して)
にんじやうたり任意共同經濟【名】
【法】Freie Gemeinwirtschaft 共同經濟の一。會社組合の如く、各自の任意契約によりて組織せる團體の營む經濟。(強制的共同經濟に對して)

にんじやうたり任意共犯【名】
【法】殺人罪、強盜罪などの如く、その犯罪が、一人にて犯すも、二人以上にて犯すも、犯人の任意なる共犯。(必要共犯に對して)
にんじやうたり任意未遂【名】
【法】にんじやうたり任意未遂に同じ。(障害未遂に對して)

にんじやうたり認印【名】
【法】にんじやうたり認印に同じ。
にんじやうたり人衣【名】
【法】人間の著る衣服。諸曲(舊)「花待ちえたる芭蕉葉の、御法(り)の雨も豊かなる、露のめぐみを受くる身の、人衣の姿、御覽せよ」

にんじやうたり認可【名】
【法】にんじやうたり認可に同じ。
にんじやうたり認可【名】
【法】にんじやうたり認可に同じ。
にんじやうたり認可【名】
【法】にんじやうたり認可に同じ。

にんじやうたり人我【名】
【法】他人とわれと。自他。佛(佛)人身に當一の主宰ありと考ふること。「人我の見(み)」徒然(とだ)女性(にょせい)は皆ひがめなり。人我の相(さう)深く、食欲甚しく、物の理を知らず」
にんじやうたり人我無相【名】
【法】人身に當一の主宰者ありて、一定の相を具ふとの誤想を去ること。本經(ほんきやう)道學(だうがく)の者に三機あり。上機は、人我無相なれば、心に懸かる事なし。中機は、人我無理を觀する故に、二念と相續さと思ふ事なし」
にんじやうたり人我無理【名】
【法】(佛)人身は、因縁によりて生ぜざるに過ぎずして、真理の顯現には非ざることを。じり(事理)参照。

にんじやうたり忍界【名】
【法】佛(佛)この世界の者

2325

は、忍びて惡行を爲すよりいふこの世。娑婆世界。忍土。堪忍の境。堪忍世界。
にんじやうたり人界【名】
【法】にんじやうたり人界に同じ。
にんじやうたり人界【名】
【法】にんじやうたり人界に同じ。
にんじやうたり人界【名】
【法】にんじやうたり人界に同じ。

にんじやうたり仁海【名】
【法】仁海に同じ。
にんじやうたり仁海【名】
【法】仁海に同じ。
にんじやうたり仁海【名】
【法】仁海に同じ。

にんじやうたり忍同【名】
【法】忍同に同じ。
にんじやうたり忍同【名】
【法】忍同に同じ。
にんじやうたり忍同【名】
【法】忍同に同じ。

にんじやうたり認可營業【名】
【法】認可營業に同じ。
にんじやうたり認可營業【名】
【法】認可營業に同じ。
にんじやうたり認可營業【名】
【法】認可營業に同じ。

にんじやうたり認可學校【名】
【法】認可學校に同じ。
にんじやうたり認可學校【名】
【法】認可學校に同じ。
にんじやうたり認可學校【名】
【法】認可學校に同じ。

にんじやうたり認可可證【名】
【法】認可可證に同じ。
にんじやうたり認可可證【名】
【法】認可可證に同じ。
にんじやうたり認可可證【名】
【法】認可可證に同じ。

2326

にんじやうたり人柄【名】
【法】にんじやうたり人柄に同じ。
にんじやうたり人氣【名】
【法】にんじやうたり人氣に同じ。
にんじやうたり人氣【名】
【法】にんじやうたり人氣に同じ。

にんじやうたり人氣投票【名】
【法】人氣投票に同じ。
にんじやうたり人氣投票【名】
【法】人氣投票に同じ。
にんじやうたり人氣投票【名】
【法】人氣投票に同じ。

にんじやうたり人氣者【名】
【法】人氣者に同じ。
にんじやうたり人氣者【名】
【法】人氣者に同じ。
にんじやうたり人氣者【名】
【法】人氣者に同じ。

にんじやうたり人形【名】
【法】人形に同じ。
にんじやうたり人形【名】
【法】人形に同じ。
にんじやうたり人形【名】
【法】人形に同じ。

にんじやうたり人形看板【名】
【法】人形看板に同じ。
にんじやうたり人形看板【名】
【法】人形看板に同じ。
にんじやうたり人形看板【名】
【法】人形看板に同じ。

にんじやうたり人形芝居【名】
【法】人形芝居に同じ。
にんじやうたり人形芝居【名】
【法】人形芝居に同じ。
にんじやうたり人形芝居【名】
【法】人形芝居に同じ。

人馬（名）じんば（人馬）に同じ。
 時、朝廷より、その旨を證明して、國府（名）くにふ任符（名）じんぷ古國言の走任す。

「何」・「伏」・「偏」などの字の左方にある
の字の稱。人の字の變體なるを以て、

にんめんちく 人面竹【名】「植」じんめ

にもちこぶ 荷持病「名」にこぶ(荷病)に同じ。又「荷持病」のお婆(お)は荷持病の傳(つ)が婆(お)根拠其田舎から山出(お)と見えて、荷持病しやちこぶた黒鬼の長助」

にもつ 荷物「名」■輸送する貨物、荷に責任となる物事、負擔

にもつ おくりじやう 物荷送状「名」荷物に添ふる送状 「同じ」

にもつ 荷物方「名」にわた(荷方に)にもつ じや 荷物汽車「名」くわじや貨車に同じ

にもつ せん 荷物船「名」くわぶせん(貨物船)に同じ

にもつ せん 荷物袋「名」くわぶせん(貨物袋)に同じ

にもつ せん 荷物船「名」くわぶせん(貨物船)に同じ

にもつ せん 荷物船「名」くわぶせん(貨物船)に同じ

にもつ せん 荷物船「名」くわぶせん(貨物船)に同じ

にもつ せん 荷物船「名」くわぶせん(貨物船)に同じ

にもつ せん 荷物船「名」くわぶせん(貨物船)に同じ

にもつ せん 荷物船「名」くわぶせん(貨物船)に同じ

「大なる猫があるといふに、彼方(あ)に、肝をつぶし、にやうといふべきを打忘れ」

にやき 煮焼「名」食物を煮又は焼くこと

にやき 荷役「名」繁船壁埠頭又は棧橋などに、船の荷の積卸をなすこと

にやき 荷物「名」にやき(荷物)を云ふ 「女にやき」

にやき 荷物「名」にやき(荷物)を云ふ 「女にやき」

にやき 荷物「名」にやき(荷物)を云ふ 「女にやき」

にやき 荷物「名」にやき(荷物)を云ふ 「女にやき」

にやき 荷物「名」にやき(荷物)を云ふ 「女にやき」

にやき 荷物「名」にやき(荷物)を云ふ 「女にやき」

にやき 荷物「名」にやき(荷物)を云ふ 「女にやき」

にやき 荷物「名」にやき(荷物)を云ふ 「女にやき」

にやき 荷物「名」にやき(荷物)を云ふ 「女にやき」

して建てられしもの、聖護院に属し、修驗の道を兼修せり。應仁の亂に堂宇焼失したれど、なほ名勝として開ゆ。

にやけ 若氣「名」■にやけ(若道)に同じ。古語「長手は、宇治殿若氣也。仍大意にて、不令加首服は、久不參之時は、いみじく怨給ひけり。大飲之間、依酒事、御おぼえはきりにけり」

にやけ 若氣「名」■にやけ(若道)に同じ。古語「長手は、宇治殿若氣也。仍大意にて、不令加首服は、久不參之時は、いみじく怨給ひけり。大飲之間、依酒事、御おぼえはきりにけり」

にやけ 若氣「名」■にやけ(若道)に同じ。古語「長手は、宇治殿若氣也。仍大意にて、不令加首服は、久不參之時は、いみじく怨給ひけり。大飲之間、依酒事、御おぼえはきりにけり」

にやけ 若氣「名」■にやけ(若道)に同じ。古語「長手は、宇治殿若氣也。仍大意にて、不令加首服は、久不參之時は、いみじく怨給ひけり。大飲之間、依酒事、御おぼえはきりにけり」

にやけ 若氣「名」■にやけ(若道)に同じ。古語「長手は、宇治殿若氣也。仍大意にて、不令加首服は、久不參之時は、いみじく怨給ひけり。大飲之間、依酒事、御おぼえはきりにけり」

にやけ 若氣「名」■にやけ(若道)に同じ。古語「長手は、宇治殿若氣也。仍大意にて、不令加首服は、久不參之時は、いみじく怨給ひけり。大飲之間、依酒事、御おぼえはきりにけり」

にやけ 若氣「名」■にやけ(若道)に同じ。古語「長手は、宇治殿若氣也。仍大意にて、不令加首服は、久不參之時は、いみじく怨給ひけり。大飲之間、依酒事、御おぼえはきりにけり」

にやけ 若氣「名」■にやけ(若道)に同じ。古語「長手は、宇治殿若氣也。仍大意にて、不令加首服は、久不參之時は、いみじく怨給ひけり。大飲之間、依酒事、御おぼえはきりにけり」

にやけ 若氣「名」■にやけ(若道)に同じ。古語「長手は、宇治殿若氣也。仍大意にて、不令加首服は、久不參之時は、いみじく怨給ひけり。大飲之間、依酒事、御おぼえはきりにけり」

にやけ 若氣「名」■にやけ(若道)に同じ。古語「長手は、宇治殿若氣也。仍大意にて、不令加首服は、久不參之時は、いみじく怨給ひけり。大飲之間、依酒事、御おぼえはきりにけり」

にやけ 若氣「名」■にやけ(若道)に同じ。古語「長手は、宇治殿若氣也。仍大意にて、不令加首服は、久不參之時は、いみじく怨給ひけり。大飲之間、依酒事、御おぼえはきりにけり」

はし)の訛。狂言(文相)「やあ、似やはい者が参った。言葉掛けて見よう」

にやふ 似合ふ「動四自」にあふ(似合ふ)の訛。狂言(文相)「にやうた連(お)ちや。同道致さう」

にやふ 似合ふ「動四自」にあふ(似合ふ)の訛。狂言(文相)「にやうた連(お)ちや。同道致さう」

にやふ 似合ふ「動四自」にあふ(似合ふ)の訛。狂言(文相)「にやうた連(お)ちや。同道致さう」

にやふ 似合ふ「動四自」にあふ(似合ふ)の訛。狂言(文相)「にやうた連(お)ちや。同道致さう」

にやふ 似合ふ「動四自」にあふ(似合ふ)の訛。狂言(文相)「にやうた連(お)ちや。同道致さう」

にやふ 似合ふ「動四自」にあふ(似合ふ)の訛。狂言(文相)「にやうた連(お)ちや。同道致さう」

にやふ 似合ふ「動四自」にあふ(似合ふ)の訛。狂言(文相)「にやうた連(お)ちや。同道致さう」

にやふ 似合ふ「動四自」にあふ(似合ふ)の訛。狂言(文相)「にやうた連(お)ちや。同道致さう」

にやふ 似合ふ「動四自」にあふ(似合ふ)の訛。狂言(文相)「にやうた連(お)ちや。同道致さう」

にやふ 似合ふ「動四自」にあふ(似合ふ)の訛。狂言(文相)「にやうた連(お)ちや。同道致さう」

にやふ 似合ふ「動四自」にあふ(似合ふ)の訛。狂言(文相)「にやうた連(お)ちや。同道致さう」

にやふ 似合ふ「動四自」にあふ(似合ふ)の訛。狂言(文相)「にやうた連(お)ちや。同道致さう」

色體、潰れ出づ。あをじゆく。

にゆうじん乳色【名】にほひいろ(乳白色)に同じ。

にゆうじんがらす乳色硝子【名】半透明にして乳白色を呈せる硝子。

にゆうじん(英Newsの記)【名】新事件の報道。【新新聞紙】に同じ。

にゆうせい乳膏【名】羅 Malt medhi-「乳膏」の幹より浸出せる樹脂の凝固したるもの。芳香を有するが故に、藥物(膏)とし、昔は薬用にも供したり。

にゆうせい乳清【名】「獨 Mollen 又 M. lacteum. けいせ(血清)参照」乳汁より乾酪素と脂肪とを除きて残りたる、やや濁濁せる液質。蛋白質、磷酸石灰、乳糖等を含む。

にゆうせい乳石【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

にゆうせい乳石英【名】「獨」に同じ。

皮の緻密なる上層と表皮の粘質層との接する所。形状も大きさも異なる多くの波状隆起をなし、血管又は神経の末端を露し、前者を血管乳頭といひ、後者を神経乳頭と稱す。乳頭。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。

にゆうじん乳頭【名】乳汁のしぶりて、十分にみだること。【條下を見よ】。



(ちぼうゆに)

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

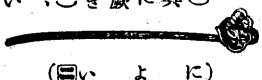
にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。

にゆうじん乳管【名】「獨」に同じ。



(いよに)

し簡。「日給」の簡参照。禁抄「東

倚子、其南女房簡」

女房の奉書書「句」によらうほうし

よ女房奉書に同じ。夏山雜談「勅旨を

受けて、勾當の内侍より書き出される

文を、女房の奉書といふなり。これを内

侍宣と覺えたる人もあり。ひが事なり」

によらうきどり 女房氣取「名」女房

にらしき風をすること。

によらうへるま女房車「名」女房の乗

れる牛車。藤の下より下簾を

出し垂れたり。をんなぐるま。今昔この

女房車の如何なる人の乗りたるに可有

らん」

によらうくわいし 女房懷紙「名」女

房の用ふる懷紙。親長卿記「所詮可被交

女房懷紙中治定せり」

によらうこ 女房子「名」つまこ「妻子

に同じ。日蓮上人御法華「女房子は、なう情

（ひ）なや、悲しやと、川に駆けおり、駆け

上り」

によらうこじ 女房興「名」下簾

など美しく飾りて、女房の乗用に供する

興。をんなかご。をんなごし。をんなのり

もの。女中のりもの。女房のりもの。明

月寫自「鳥羽」御幸八幡「女房興三」

によらうご 女房事「名」女房に

關する事柄。にうらご（女房事）参照。

によらうご 女房詞「名」昔、禁中

の女房、又は御殿女中などが、食物などの

異名に用ひし言葉。豆腐を「おかべ」、團子

を「いしし」、葱を「ひともし」、恥かしを

「はもじ」などいふ類。中古、皇室式微の

餘、後土御門天皇の御代頃より、下品なる

物をも供御に供へまつりたる隠語より始

まれりといふ。女中ことば。大上藤御名之事

「女房ことば」

によらうさんじぶろくかせん 女房三

十六歌仙「名」「人」女房の中、詠歌に

すぐれたる者三十六人、即ち小野小町、式

子（式）内親王、伊勢宮内卿中務（式）周

防内侍、齋宮女藤原俊成女右近少將季

繩女待賢門院堀川藤原道綱女右近少將季

丹後・馬内侍・嘉陽門院・越前・赤染衛門・二

條院・讃岐和泉式部・小侍從女藏人

左近後鳥羽院下野・式部・辨内侍・小式

部内侍・少將内侍・伊勢大輔・殿・富門院大

輔・清少納言・土御門院・小宰相・大貳三位、

八條院・高倉高（式）内侍・後醍醐中納言・典

侍・宮内卿・式部・乾門院・御（式）相模・藻

壁門院・少將・選出したるもの。應安六年

の奥書ある寫本あれば、南北朝頃に選ば

れしものなるべしといふ。

によらうしゆ 女房衆「名」女房た

ち。にうらご（女房衆）の敬稱。

によらうのりもの 女房乗物「名」によ

らう（女房興）に同じ。「代馬」女房乗

物入れれば、勝手手の灯（式）消して」

によらうひてり 女房日照女房早

「名」をんなひり（女日照）に同じ。「二代男

下司つかふ親方もある」

によらうぶん 女房分「名」女房にた

るべき者。五十年忌歌念佛「言ひなづけの女

房分」

によらうぶり 女房振「名」女房に

しての用品。女房としての様子。織加留

多「女房ぶりが上（式）つて」

によらうほうじよ 女房奉書「名」詔

勅の様式手続の、漸次簡略に流れて、内

侍宣となり、内侍宣の文體も、漢文より宣

命體となり、更に假名文のものとなりた

る、その假名文の、更に一變して、假名の

散書（式）となれるもの、長橋局（式）の

散書（式）を奉書して、自ら文書に作製したり

女房の奉書。

によらうみやが 女房冥加「名」よき

女房に得たる幸福。今國姓爺「この美し

い者を、土百姓めが小澤山に抱いて寝た、

その詞、女房冥加に盡きて斬られた」

によらうもち 女房持「名」妻帯してあ

ること、又その男子。

によらうやく 女房役「名」「女房」の

夫を輔佐するに譬へていふ「輔佐の地位

に立つ役。女房「名」によらう（女房）の

によらうこ 女房子「名」によらう（女房

子）の訛。天の御鳥によらう子にも見代へ

しは尤も」

によらうん 女院「名」「にやん（女院）の

音便」國母又は女御内親王等の、佛門に

入りて、特に何某門院の尊號を贈られた

まひたる御方。東三條院（一條天皇の御母

藤原詮子）に始る。も御在所を以て名と

せしが、後には、宮門號に依り、又は地名

を取りたるもあり、又宮門號の上に、後又

は新の字を冠せられたるもあり。例へば、二

條院・建禮門院・新待賢門院など。待遇は

概ね上皇に准じて、院司を置きしが、國母・

准母その他との間には、多少の差別を設

けらる。もんん（門院）参照。衆「おりの

のみかどになぞらへて、女院と開えさす」

によらうんづき 女院附「名」德川幕府

の職制の一。女院のおはします時、臨時

に設けしもの。定員二人。掌る所、禁裡附

と同様に、與力同心・幕屬したり。

によらうのちやう 女院廳「名」女院

の官廳、即ち女院司の政務を執る所。もん

のちやう（院廳）参照。

女院の廳より下す公文書。

によらうのつかさ 女院司「名」女院

に仕ふる官人。概ね上皇の院司（式）に

同じくして、武者所・隨身所を缺きたり。

によかく 女樂「名」ちやかく（女樂）に同じ

女樂の拜（式）「句」「女樂（式）の拜」に

同じ。

によき 女技「名」女のわざ。女の仕事。

によきたん 女喜丹「名」昔の淫藥の一。

一代男「檣床（式）」の下には、地黃丸（式）の

五十壺、女喜丹二十箱」

によきにき 如龜如龜「貌」「にやつきり

（如龜）を見よ。如龜は假借の字、物の點點

と幾つも現れ出づるさま。によきにき。

によくどころ 女工所「名」大嘗會の時、

悠紀（式）方と主基（式）方に設けて、儀式

の設備の一を分擔せしめし所。増廣大

嘗會の頃、信實の朝臣といひし歌よみの

女の少將内侍、大内の女工所にさぶらふ

に」中務内侍・馬女工所の女房を、はしに

出して、御簾のきはへ、かの行事官を召寄

せて、衣の寸法など、こまかにあひしらは

せられたれば」

によぐんせい 女群勢「名」「女群の群と

軍と音相同じきより、軍勢の意にて續け

たる語」群り集まれる女。和合（式）われ口

説（式）き落さん」と馳せ向ひたる女群せい

を、薙ぎ立て、薙ぎ立て、追ひまわれば」

によくらうど 女藏人「名」「男官の藏人

に對しての稱呼」禁中にて、命婦（式）に

次げる下蘭の女房・朝賀白馬節會（式）の

踏歌などに、天皇の出御せらるる時、内侍

に従ひて供奉し、その他、雜役を勤仕し、

踏歌の妓女をも勤めたり。又、御匣殿（式）

御別當に屬して、御服の裁縫に従事せし

御匣殿藏人、東宮所屬の女藏人もありた

り。によくらんど。源氏「うねべ」によく

らうどなど」

によくらんど 女藏人「名」前條に同じ。

によくわん 女官「名」宮中に仕ふる婦

人。奈良朝の頃までは宮人と呼び、平安

朝以後は、多くは女房（式）といひ、現今

は女官（式）といふ。によくわん。

によくい 女系「名」女子の血統。母方の

によけん 如幻「名」「佛」一切諸法は、實

在せるやうに思はれるれども、空（式）にして

はかなきこと、恰も幻（式）のごとくなる

こと。徒然（式）如幻の生（式）の中に、何事をか

成さん。すべ、所願みな妄想なり」

によこ「貌」によこりに同じ。佛藏新選雜

因「によこ」と出す鼻や扇の骨の間（式）」

によこ 女御「名」によこ（女御）に同じ。

簾中抄「女御（式）」これ、別のつかさにはあ

られども、内侍のかみななどになるる折

あり」禁抄「后女御・更衣」

によこう 女工「名」ちよこう（女工）に

じ。によこしめ 女戸主「名」ちよこしめ（女戸

主）に同じ。によてん 女御田「名」京都東山の雙林

じやう

寺の舊境内にある鳥羽院の寵姫祇園女御の館の跡。「語にねよによき」

によよによよ「貌」によよを重ねていへるによよによよ「女護島」(名)「女子のみ住めりといふ想像上の島。一代男女護の島に渡りて、採取(採取)の女を見せんと云へば」(薩摩)おれも、去年怖(おそ)い夢、天狗の鼻に取附いて、女護の島へ渡ると見た」(地)伊豆國八丈島の異稱。

によよによよ「女根」(名)「女子の生殖器(男根)に對して」(如左)「(名)」(如左)に同じ。五代帝主鳥羽院冷泉萬里小路(みづの)の御所へ入らせたまひて、賢所(けんじょ)劍重(けんちゆう)など渡しまらせて、踐祚(せんそ)の儀あり。……、閑院は、この程、なほ如在の儀にて」(物語)事をなほざりすること。事物を疎略(そりやく)すること。禁裏抄(きんりしやう)上下格子奉仕。是藏人等、如在不當故也」

によよによよ「女相」(名)「ぢよさう(女相)に同じ」

によよによよ「女装」(名)「ぢよさう(女装)に同じ」

によよによよ「女三」(名)「次條の略。柳尊老い込んだ女三火鉢の猫を抱き」

によよによよ「女三宮」(名)「第三の皇女の義にて、正しくは、女(三)の宮といふべきなれど、源氏物語のは、古來、斯く呼び習はせり。によよによよ(女二宮)參照」

によよによよ「女三從」(句)「さんじゆう(三從)を見よ」

によよによよ「女首」(名)「みよし(水押)に同じ」

じやう

ること。「世相を、如實に書く」

によよによよ「女性」(名)「女と生れたる者。をみな。をんな。ぢよしやう。女人(にんじやう)。女流。歴代記「女性は何事かあるべきなれば」

永遠(えいゑん)の女性「(句)「次條に同じ。久遠(きうゑん)の女性「(句)「獨(ひとり) Die ewiche Weibliche. 獨逸のゲネテ(Geethe)作「ファウスト(Faust)」の第二部に、その死後の幽魂、よく主人公ファウストをして、完全なる順生涯に入らしめし由記せる女主人公グレンエチエン(Graefin)を形容せる稱呼に本づく」人の心を鼓舞して、常に若若し元氣を以て事業に精進せしむる、愛の精神。永遠の女性。「に同じ」

によよによよ「女將」(名)「ぢよしやう(女將)に同じ」

によよによよ「女性心」(名)「をんなごころ(女心)に同じ。太宰記、女性心に、たとひ如様の事を云はると、義貞、勇士の義を知たまはざる事あるべき」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)を見よ」後宮の内侍司その他の諸司に分屬し、又、縫殿寮掃部(きぬどのさうぶ)寮中官職内教坊などにも置かれて、掃部油等の雑役に從事せし女官。采女(さいにょ)氏女(しにょ)などを以て充てたり。によよによよ。めのわらは。禁裏抄御所中掃部油等役、女嬋所(にんせう)知也」

によよによよ「女嬋」(名)「妃夫人嬪に仕へし女嬋」

によよによよ「女嬋」(名)「妃夫人嬪に仕へし女嬋」

によよによよ「女嬋」(名)「妃夫人嬪に仕へし女嬋」

じやう

如是我聞(ごとく)「(佛)「梵(Brahma) yshanumの譯語」釋迦入滅の後に於ける諸經の編輯は、多聞第一の弟子阿難の手に成りしものなるより、諸經の冒頭に冠せし「是(こゝ)くの如く我聞く」と、釋迦の指教に従ひて述べたる意を示せる語。論語などに「子曰」とあると同意。又「我聞如是」とせるもあり。「信成就(しんじゆじゆ)の句」參照。

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

じやう

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

によよによよ「女嬋」(名)「ぢよしやう(女嬋)に同じ」

べきもの。によさんのみや(女三宮)參照源氏物語に、朱雀院第二の皇女にて、柏木右衛門督の妻となりし由記せる人物。萬葉集「この落葉の宮と申すは、光る源氏の兄(弟)」、朱雀院女二の宮、一條の御息所(女三)の御息女なり」

によんに 女人(名)「佛」をんな。女子。婦人。ぢよんに。によしやう。源氏「女人の惡しき身を受け、長夜の闇に惑ふ」曰つま妻に同じ。大鏡「いで、この翁の女人こそ、いかしこく物は覺えはべれ」

女人禁制(特)「句」寺院にて、修道の障害を避くるために、女の入るを禁ずること。によんだう(女人堂)參照。諸曲(竹生角)「この島は、女人禁制とこそ承りて候ふに」

女人結界(特)「句」女人禁制の結界。醒睡(高野山は、女人結界なれば)女人成佛(野山)「句」佛にによんじやうぶつ(女人成佛)を見よ。きのふはけふの物語彌陀如來の御誓願に、女人成佛の沙汰を申さう」

によんに 女高野(名)むろじ室によんに 女講(名)佛道修行又は信念談合等のために、婦人の結べる會。によんじやうぶつ(女高野) 女人成佛願「名」佛にによんじやうぶつ(女高野) 女人往生願に同じ。

によんに 女入堂(名)古、女人禁制の山寺にて、參詣の女人を、別に門外に堂を建てて、通夜せしめし所。若風俗「草葺の庵あつて、軒に女人堂と、しやれ板に書きつけ」心中萬年草「曉の五障の雲に埋もるる女人堂にぞ著きにける」

によんに 女入拜(名)「傳燈錄に「麻谷作二女人拜」とあり」女子の、膝を屈するのみにて、立ちながら拜すること。によんわうじやう(女入拜) 女人往生願「名」佛阿彌陀佛の四十八願中の第三十五願。男子よりも、罪障深重にして、成佛の器にあらずといふ女人を、特に淨土に往生せしめて、男子の身とならしめん

との悲願。女人成佛願。じやう(五障)へんじやうなんじ(變成男子)「八歳の龍女(三三)參照。によんやう(女若)「名」女と若衆(若)と。女色と男色と。女道と若道(若)と。重難子「諸ひ唯らす美男草、女若二つの戀草を」

によん 如如(名)「佛」諸法皆然るによりて、によ(如)を重ねていふ「諸法の理體の、何れも不二平等なること。八大傳「今、この大が、欲を忘れて、讀經の聲を聴くを樂しみ、如如入歸の友となること、皆、御經の力に依れり」

によん 女筆(名)女の手跡。一代女筆指南の張紙して」によん 呻吟(動四自)次條に同じ。「古語」呻吟(動四自)うめく。うなる。によん 呻吟(動四自)うめく。うなる。によん 呻吟(動四自)うめく。うなる。

によん 如夫人(名)「左傳の僖公十七年の條に、齊公好内、多内寵、内嬖如夫人(者六人)とあり」めかけ(妾)の異稱。によん 女別當(名)古、齊宮寮と齋院司とに仕へし女官。漢書女別當して聞えたまへり」

によん 如法(名)「次條の語の轉義」無量壽經の卷下に「應當信順如法修行」とあり「如來の教法のごとくすること。理に契(こ)ひたること。かたのごとくすること。倡偈の、行狀よきこと。氣だてのよきこと。柔和。「元祿時代の語」今言心中、菱屋介五郎は、如法なる、氣も丸びたひ、にこやかに」

によん 如法(副)「前條」の轉義。まことに。大いに。全く。もとより。保元「十一日の如法夜更けて」平並「如法暗夜の事なれば」盛衰記「文覺、紙を取り向けて見れば、如法難紙(す)なり」

によん 如法(句)「佛」によん(如法)に同じ。著書書寫の上人、みづから如法、如説に法華經書きたまひけるに」

によん あいぜん 如法愛染(名)「佛」次條の略。増廣大法、說法殘なく行はる。七佛藥師……如法愛染など、すべて數知らず」

によん あいぜん 如法愛染法(名)「佛」如法に修する愛染法。大愛染法。によん 如法に修する愛染法。大愛染法。によん 如法に修する愛染法。大愛染法。

によん 如法に修する愛染法。大愛染法。によん 如法に修する愛染法。大愛染法。によん 如法に修する愛染法。大愛染法。

によん 如法に修する愛染法。大愛染法。によん 如法に修する愛染法。大愛染法。によん 如法に修する愛染法。大愛染法。

によん 如法に修する愛染法。大愛染法。によん 如法に修する愛染法。大愛染法。によん 如法に修する愛染法。大愛染法。

によん 如法に修する愛染法。大愛染法。によん 如法に修する愛染法。大愛染法。によん 如法に修する愛染法。大愛染法。

によん 如法に修する愛染法。大愛染法。によん 如法に修する愛染法。大愛染法。によん 如法に修する愛染法。大愛染法。

を安置す。によんやう(如法經)參照。盛衰記「如法堂と申すも、慈覺大師の御建立、六根機悔の行儀は、この道場より始まり、三十番神の守護こそ貴くは覺ゆれ」

によん によんやう(如法經)參照。盛衰記「如法堂と申すも、慈覺大師の御建立、六根機悔の行儀は、この道場より始まり、三十番神の守護こそ貴くは覺ゆれ」

によん によんやう(如法經)參照。盛衰記「如法堂と申すも、慈覺大師の御建立、六根機悔の行儀は、この道場より始まり、三十番神の守護こそ貴くは覺ゆれ」

によん によんやう(如法經)參照。盛衰記「如法堂と申すも、慈覺大師の御建立、六根機悔の行儀は、この道場より始まり、三十番神の守護こそ貴くは覺ゆれ」

によん によんやう(如法經)參照。盛衰記「如法堂と申すも、慈覺大師の御建立、六根機悔の行儀は、この道場より始まり、三十番神の守護こそ貴くは覺ゆれ」

によん によんやう(如法經)參照。盛衰記「如法堂と申すも、慈覺大師の御建立、六根機悔の行儀は、この道場より始まり、三十番神の守護こそ貴くは覺ゆれ」

によん によんやう(如法經)參照。盛衰記「如法堂と申すも、慈覺大師の御建立、六根機悔の行儀は、この道場より始まり、三十番神の守護こそ貴くは覺ゆれ」

にれ

のらぬ譬。【談語】

にれ 榎【名】「植」あきになれ(秋榎に同
じ。字義「榎皮榎附」) 〇はるになれ(春
榎)に同じ。

にれ 鮎【名】次條を見よ。

にれを噛む【句】にれを噛む(噛む)に同
じ。徒然半は馴れて、大理の座の演床
(か)の上にのぼりて、にれうち噛みて
臥したりけり」

にれ煎【名】〇あわつること。 〇【商】に
れを(煎退)の略。

にれい【名】二靈【名】伊非諾(伊非諾)の
二柱の神、武陽陽開、二靈群品祖
にれい二禮【名】「書」周禮(周禮)と儀禮
(儀禮)と。

にれいさん 爾靈山【名】「地」にやさん
かうち(二百三高地)の雅稱。

にれかむ 噛む【動四他】牛・羊・鹿などが、
噛みて呑み込んだる物を、再び吐き出し
て食ふ。にげがむ。ねりがむ。はんそう反
芻(はんそう)に同じ。【古語】字義集「噛、ニレ
カム、サケル」

にれくわ 榎科【名】「植」顯花植物、被子
類、雙子葉門、離花區の一科。榎(榎)・朴
(朴)・榊(榊)・槲(榲)など、これに屬す。

にれさくら 榎櫻【名】「植」さくらいぼく
(扶移)に同じ

にれたけ 榎芽【名】「植」榎に生ずる齒。
にれのき 煎退【名】「商」あわてて、賣退
(か)又は買退(か)をなすこと。にれ(取
引所の語) 〇【葉義】に同じ。

にれはき 榎萩【名】「植」はきはき(一
にれんさう)はう二聯裝砲【名】「兵」英
「Win gun」連裝砲の一。二門の砲を裝
備したるもの。

にれんさうはうたふ 二聯裝砲塔【名】
「兵」英「Twin mounting barbette」二
聯裝砲を備へたる砲塔。現時の大艦は、
この種の砲塔數基を備ふるを常とし、又
要塞にも備へつることあり。

にれんせい 二連星【名】「天」英「Binary
star」二つの恒星の、互に廻轉しつつか
るもの。その一つの星に對する他の星の

にれんせい

軌道は、楕圓形をなす。共通の重心の周
圍を、引力の法則に従ひて廻轉せるもの
として説明す。連星。

にれんせいきくわん 二聯成機關【名】
蒸氣機關の一。第一の汽筒(せう)より排出
したる蒸氣を、更に第二の汽筒に送給す
る組織なるもの。

にれんせんか 尼連禪河【名】「佛」梵
Nirajana(尼連禪那)河の略。尼は不の
義、連禪那は樂著の義、印度ガンジス川
に注ぐアルグナ(Pragya)川の支流の一
なるリランジャン(Pranjan)川の古稱。
釋迦の河に浴せし後、その左岸の菩提
樹の下にて成道(じやう)せりといふ。ほだい
じは(菩提樹)に參照。

にれめん 榎麴榎麵【名】秋榎の幹の粗
皮を去り、その下の白皮を碎きて得たる
粉にて製せる食品。

にれもみ 榎餅【名】秋榎の幹の粗皮を
去り、その下の白皮を日に干し、臼に搗き
て得たる粉にて製せる餅。

にれもみ 榎樅【名】「植」〇たうひ(唐櫟)
に同じ。 〇たけもみ(だけ樅)に同じ。

にろぎ【名】「動」動きに同じ。

にろくじちゆう 二六時中【名】「昔は、晝
も、夜も、六時(ろく)づつに分ちたるため、
合せて十二時なりしよりいふ。しうじち
ゆう(四六時中)參照」一晝夜の間。一日
中。終日。

にろくじちゆう 二六挺【名】じよにちやうだ
て(十二挺立)に同じ。

にろくつ 二六對【名】「文」漢詩の近
體なる七言の句に於て、第二字と第六字
とは平仄の相同じきを通則とすること。
(二四不同じに對して)

にろくやき 二六燒【名】伊豫國宇摩(う
ま)郡松柏(まつかき)村の人、佐佐木六太郎二六
が、明治年間に燒き創めたる陶器。現時は
海外に輸出するに至れり。

にろくをどり 二六踊【名】薩摩國鹿兒
島に行はるる、一種の踊。

にろり【貌】にろりに同じ。 狂言八尾「某
が鼻の先へ、にろりにろりと差し出す」

にわう

にわう 二王【名】〇二人の王。 齊天に
二日なく、地に二王なし 〇【人】支那東
晉の王羲之と、その第三子王獻之と。

にわう 密宗にて、愛染明王と不動明王と。前
者は煩惱(ぼん)即(じやく)の善提(ぜん)を表し、後者
は生死(しじ)即(じやく)の涅槃(ねはん)を表す。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわう 仁王二王【名】〇【佛】彫刻とし
て、寺門に左右相並びて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。

にわい

剛力、英藏(英藏)次郎が二王力
にわい 仁和寺【名】にわい(仁和寺)に
同じ。 尊にわ寺の僧正のやと思へど」

にわい 荷渡【名】荷物を渡すこと。貨
物の交付。

にわい 荷渡切符【名】「商」そ
の所持者に、庫入貨物を引渡すべきこと
を請求する有價證券。出庫報告。

にわらび【名】「植」おほかま(狗脊)に同
じ。 〇【藥】「狗脊、ニワラビ」

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。

にわら 二王【名】〇【佛】二王を見よ。